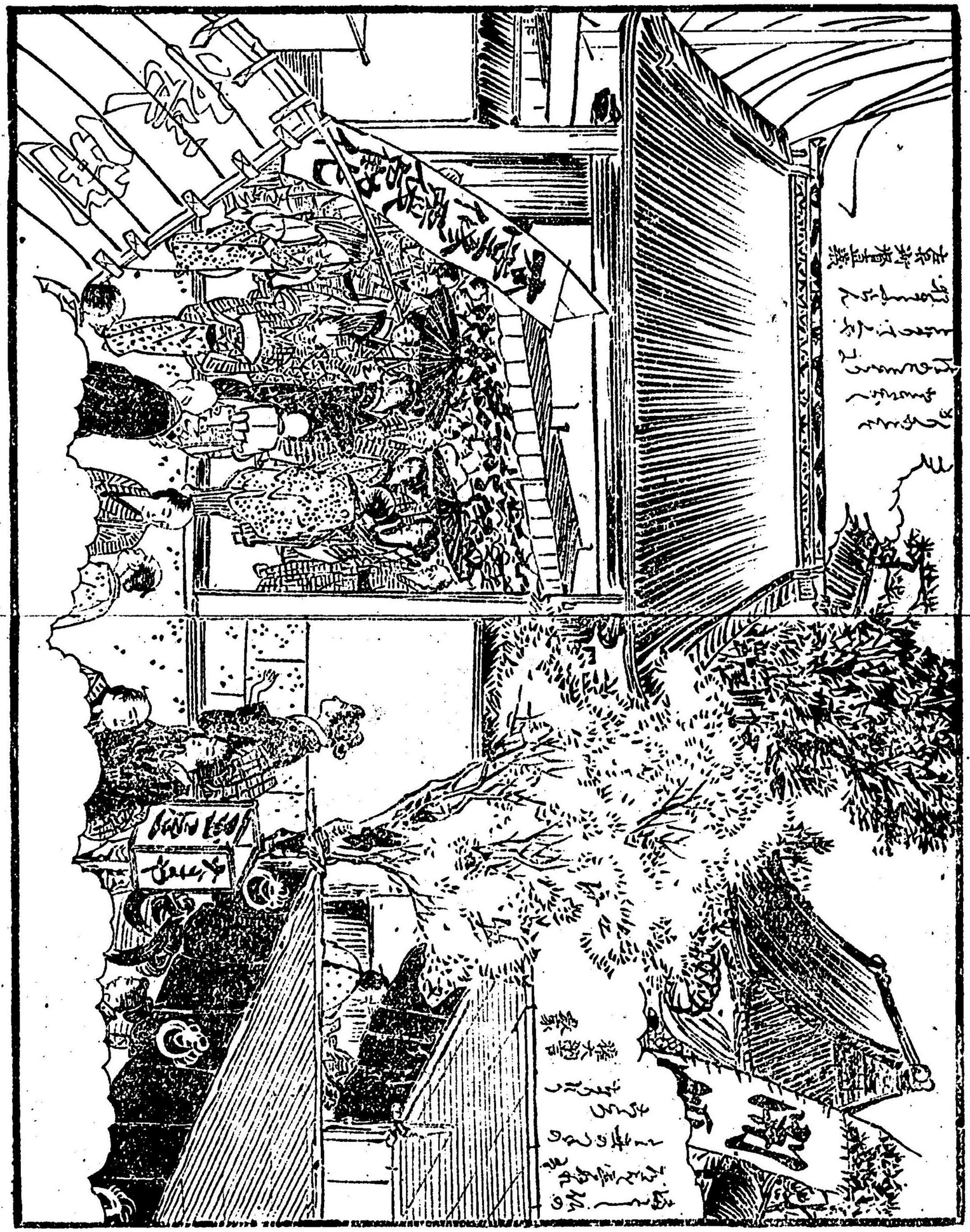


身よはれきたる蟬のぬけがら

とよみ玉ひてこつぶきを愚僧と同じ火にて水なれ共きのふい棒をそらひ今日とは齊をたま

る事偏に此衣の色が光るゆゑなりとぬき捨てはそ歸り玉ふ

さて前夜はやくそくやたむくひとたやはとやはとおしやませうのまへにわやた問男ど

の日頃の本望とてげ其ぢへ後難はさへれがれたれども其のちと一人をいらをずして女

房をむのへくらしましたが此女房に子なく去て年の十二三年も家つぎおきを人の命と

しれぬ世おとて親類のうちより異見して手かけ足かゝおりとをおしらへられよとす

〻絶て去方よりれたをいりにして土手町邊みかまひ置しがまたまれ本妻しなれたよよ

つてすぐおは手かけをれ城内へ入おきて一年たゝぬにさつそくおのゝ面ゝおらずつ

ひに安々平産とりあげ視れば玉のやうなわこざはができて是と末のたつをのと一家一

門いはひとろおびはふとろさまゝでは達者おとていつしかをのをさまお直し奥さはお

ついおつてうへ視ぬ女とおるしかるに此は手かけとじめおやさとよゐられたとき一へ

んのた付ゑん結たれし男がありしお貧福としれぬもれ不仕合よて渡世をなとがたと一

先江戸へ下りてこのせゝべしとて四年已前わかれをおしわふさかのせき越て東おく
だと三年が間あづまお住どを仕合おをしろのらずしてたよと音信をおし其のち親のう
ちお背だけれびたる女子をこの〳〵へおゝ事をおをがたくして爰に奉公分お出したるおか
〳〵る仕合とむそめのかげうれしのりしよかの過よし頃江戸へ下りたる男かへり登りて
いゝてまをやらぬ女房をゝよが〳〵しくねだりのゝれど三年と待たるおまゝのひなしゝゝて
といわげずこの男元より身躰ふらちも為外よと足もためられず何れにかゝりてないと
もとおをふ所お今の男い身躰をしおをた彼といを是といひ女めもよくしゝて彼のところ
へ行てたん〳〵をかたり尤我等たより音信ざると越度およつてこのやちに手をさげ申事
なれをとじ兎の女房よまゝのひおし只わたくしおかへしてたまれといふお亭主何がひ
ざふの新内儀おをた念をおい事やかゐすといはじしからどもらひか〳〵るのらとかくお
いたした程おかけしさするを手代や中間どをとりあひたゝき出してやつたじやまでを
をどをいきどほり底心おてつして無念おをた今日いたたしにかけ込ん晩とさしちゞのへ
るゝさたそるを一門よりおひ談合してあつこのひおなり命があつてこそゝ銀十枚より小

判十両までおてかんよん去やをゝいふを一〻及までをゝおをふ心があつておのの〳〵か
んおんせず又亭主を命にかゐる事おれを一貫目や二貫目やりたゝて身躰のかいにおる
事おてもおけれども出してすむべきが然るべゝお少のゝてころがかのしわん坊ゝかく右
の通りにてかんおんならずはおをのくも分別しだいとつきはおし来るよしからをかく
おいおしたとて宿おのへりはしたさて其じぶん東山ちかきやとりよ万日の回向がとじ
まり貴賤の参り下向引キちぎる間をおを〳〵んじもの中より脇ざーのさやとづして切て
いつるをのを今の男おをしのるよかの亭主がまおりたるを覗かけての事おをやがて
それといふ間よおげまわる何がこのだんにおつてを内のをのをゝてあたりにつのお
んだをゝおの乃已前に間男しられた男をりふし参りあを近付おをゝぢおぐる中よかをへ
だて、あつのをんおせしみつきれを〳〵難おく大げさに切たをし女がたき覺へたるか
ゝてそれうへお腰かけて親事に自害してをゝてました何とむくをいおそろしいをの何のお
やまりをおき出家を無實おおろしたむをひが此やうよめぐをきてそのをゝおもおやま
りをおきよ死しおの間男め命を大事につゝみたまりおて出家を殺させよそお覗ておれ

がとがをもつりても何れひとひとおふして今までねたるにひくひ來てのくのとくまた取まべたる眞の男を甲斐もおく結句あまり太刀さきまて胸のあたりを手負しが當座は死るまでもなく百日をゝりおやみてくさり死におりました何と悪因の業報とやたゝ其のち此てなしをゝ紙の茶やまて取くみたるとき付てゐた姥がとおしはゝた此姥を姥でかの坊さまの越度ゆおりましたをばゝそ何のせんさくもおくわたくしが命もたすかりましたとのたいやたゝの此姥をゝ出家をろさしてくをおのゝ命をのばふて居た事ゝやいつをもよく聞しやをゝのだんくの因果そのとう分くゝゆい目ゝ視へねど自然をくねんと此やうゝつゐゐゝと追つめられて死るゝ因果とが同しもので若ゝうちゝいつ年がよつていつ死るといふ事をまだ遠ひやうゝ覺へゝるか手れとゝのぬやうゐおもへどとやゝのくするうち一日たち二日たち今年が去年ゝおり去年が又去々年ゝなりさて來年が今年におつて一ッくゝ年がよるほどに十といひゝが廿ゝなりそをから後ゝ月日をゝやく免ぐり心もせはしくおつてくる三十六遍をくるよりはおほゝそみやかゐゝや正月のまをゝしたい又盆の節句の朔日か晦日かといふ内ゐ暮てゝ明て玉手箱ついゝ白髮れ雪を

いたゝきこしゐたをおもへゝ夏のゝの夢よりみじかき市太郎長松ゐいや子ゝの五人三人またりの孫ゐゝ子ゝの咲枝がしげをさて冬がれのしぐれさだ免なゝこのゐゝしよりゐろりくゝと死ゝ免るをおくりて歸くる人をゝや空ゝゝおつてゐるゝ無くおゝいのすそゐまさる世界ゐ視しりたる者ゝをおゝこへやら往て視ぬと思ゐゝ彼未來ゝやら來世とやらゐ日ゝゝたらりくゝゝ果行くゐゝにもいや地おくもおゝ樂もつまりてさうくゝ借家をたてられはいとおもふにちがひて無量無邊のひろゝ國かして一人をつまりて居られませぬとて歸りたる者なしそまへ行をのはたゝさんにおりてへゝ生れてゝにも鉢まきしてゐらをくらりとうみ出すい一日れうちゐ國々村々町々ゐ何乃何千何億にゝせよ此世ゝ生をゝるゐゝの者ゝゝな死ないでゐおゝぬゝれおれどもいつかくゝといんぐわの道理を一度ゝゝひくゝいで叫ゝぬものゝ余所の人ゝゝれ程悪い事したるゝおけれど今ゐ達者で息ゝで什合もよふてゐらるればそくふゝれでゝおいのと必らずおゝをゝるゝいなゝゝ事ゝゝやそれゝくゝおそいかゝやいのせゐゝ參るゝ心得るべしさて今の物語のありさまを聞て合点し玉ふべしたまくゝ姪欲れ少ない人あをゝ又妻子をおろそかにして邪見にあた

るをれをあいが、る物と狹中より來ると、このれて狹の生をのはりなり或と婬をおのそ物がたりを悅び人々よあいせちる〳〵をのと鷄鶏の中より生をうまあるひオ邪婬をとおるものと又おのをが女房よのみはださを て親おあしくあたり不孝よなるを者つ々婬れつみとりもまだふのしまれられをのと斬舌地獄よおちてくるしみをうくとも說せ玉ふ

臟お三界お人をつなぐきづおはこの婬欲なれをいつれをやめ玉へしかしなごらとまらぬと此色のをちおれバかたく往生成佛となりヤまいのとそんじいふきのふヤたる如く戒をたもち威儀をたゝしてヤ念佛おもあらず成佛しがたき所のおの〳〵われらを助けましとはいをゝか思じめさねどを願とくとすおしあてをた苦勞をかけ來るがうとまじ又おのご積犯の惡業つよけれををのづからおのをと引さかいてちかひの網よををおんも淺ましけをど二百戒五百戒いたもたずとも先さしあたりたる所のた法度の邪婬をおのしてあらを以とぢ嫁さらし玉ふなとヤ事之わるうきかせ玉とずとをすおしあてをあしき事とせぬやうに心ををち扱それうへの念佛題目ていと〳〵をぐれて佛をうきしとおお〳〵めをべ〳〵ゐゝ種の字と今の因果のたね木れ實且て有と日おろ合点しておさを

まれまでゐて邪婬のさたとをみました其ちちまた〳〵ほとおをヤさんあおかしお〳〵

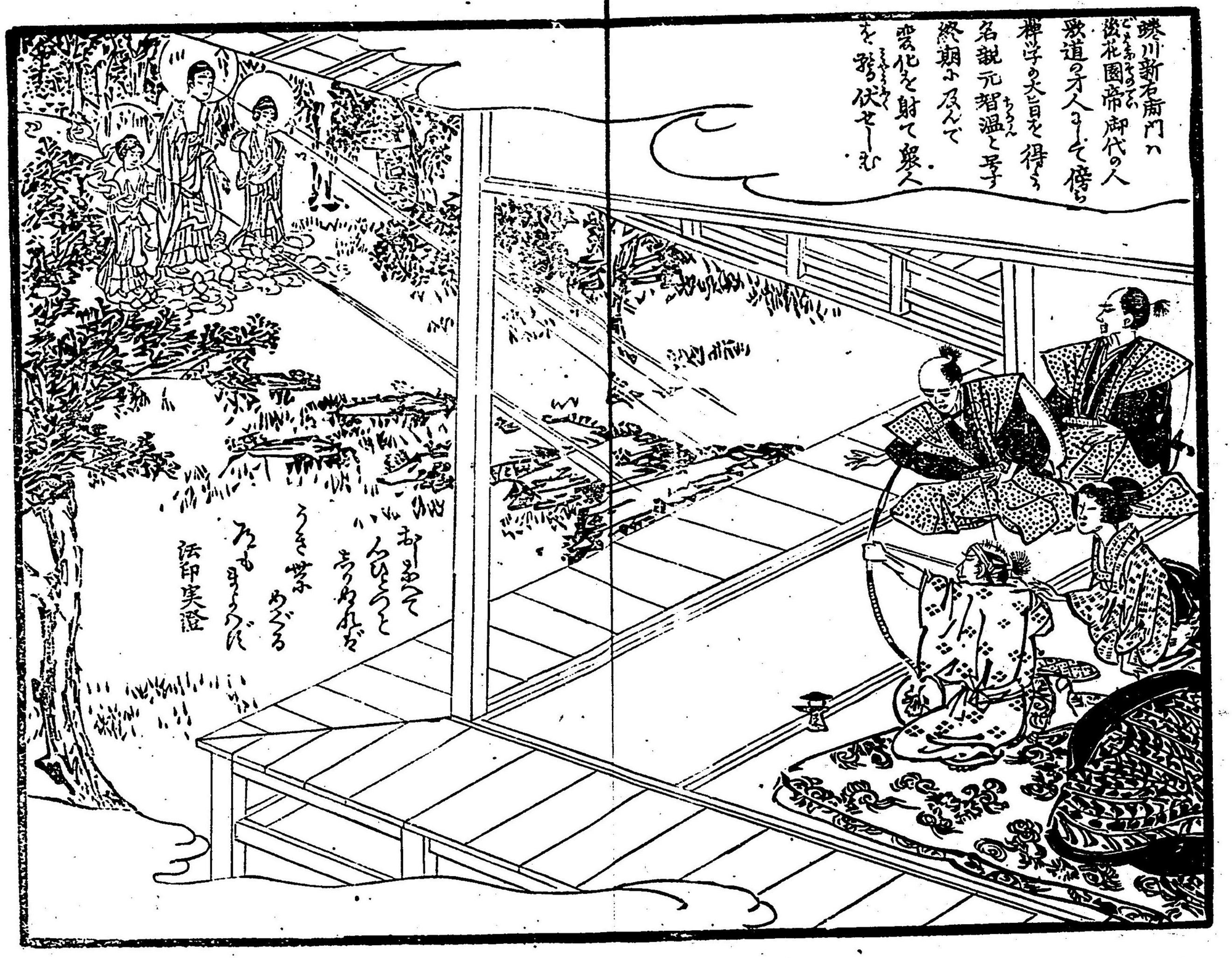
○扨を一休和尚れ活佛おてま去ましけるを世上に風聞しけるごのあはをよいとんとて去人ヤけるとこの間一休へ參りけををよく來るとのたまひ虛空よ座し玉ひてた庭のまつの枝おた腰をのけらをたをゝみなされしなり不思儀おる事おあらずやとしか〳〵とかたをけれを皆人それれ偽におそ人間と生をうけの、る自在のおるべしやと取沙汰をける事ハはのこの日聞絶し一條の辻ゐ札を立られし書お

佛法の修行までに道おり天眼通を得たり虛空に座せんとすれを則ち座し座せましとおをへと則座せず通力自在を得たり若うたかふ人あらを見物すべし

とのゝれゐり皆人是を視て此間人の評判しおるがかを書せらるゝ上れ更ようたがふ所おし去おがら魚ををひて生して吐と仰られしを臟おらず左おる事よてやあらむといふ人をありしがいや〳〵そをゝてと品のとりたるとてすおびたる人二三人つれだち一休の庵室へ行た札の表うたごのおとあるを来おれと直々おがみヤ度いておれまで參りたりとヤ一休出あひ玉ひ中々の事天眼通を得ヤいと仰られけれを其中にをこひたるをれすゝみ出ヤおる

と是はいつとなくてあるべき玄虚空の事思ひもよらず先この扇の上おわがりてはゞ覚あるとゆゝれだいとやすきとなり去おがら其おふぎの上へ乙のらんと思ふ心出れど乗る今日天早天よりのらふとおもふ心おし虚空へものぼらんと思とねどのぼらず重ねてはゞ出れのぼらんかおをふて上りて視せんと仰られれば皆人あれれて皈り来る其中の人ゆけるといかゝわして乙一休おり人のわまりよいとんとて天眼通迚得玉ふといふをおのしくおゆし迚しいまし迚玉ふおりか感じて皈るとなり

○或旦那迚たりてゆゝるはおのれ寺へ出入致じい人々ゆけるとゝ話則の一そくとぬけたるかゝゝどとてわれらの愚痴なるをあなどり何とを迷惑いたしい間何丑ても一そくはゝ玄ひに示し玉へとゆけるゝ安事おりさらば参じられよと有れれば参ずるとゝ何おる事丑て侍るとゆすいや何おりとも佛の道にて合点の行ぬとを尋られよかしおまつていとて佛殿さしてゝしりいづる和尚おかしく思し召視ぬ顔しておとしけるせつおの間おゝ走り皈る迚いづくへ行れしかのゑまへば佛の道に不審あらばゆせと仰せらをしよより佛の道とゝ佛殿へ行ゝ道なりとゝどんじ一走視て参りましたごのんかゝをがてんのまゝらぬ事おそいあの山門


蹴川新右衛門は
滋花園帝御代の人
歌道の才人にて傍ら
禅学の大旨を得たり
名説元智温と号す
終期に及んで
雲化を射て衆人
を驚伏せしむ
おもてに
ひとうと
ちりぬれば
うき世
めぐる
乃も
法印実證

の遠りの松の巣をかけてゐが何の巣とを更に合点まゐらず大方鷲の巣とを覩ゐてゐ得共
しかとわきまへずゐかゞ者をゐいや〳〵からをゐそ今時分の巣をかゝれとれたまへたい
やとてものゐ事の慈悲をたれて示し給はをとゞ者をゐ其儀ならゐはしごを持てのぼり
覩玉へと仰られけるゐかのゐれいそぎのぼりて彼巣をおろし覩をばおのの鳥の子もおく
何とゐ見ゐぬゐり一休何なるぞおもたまへゐ何ゐ中よゐはざなく侍るとゞ者せゐ

鷲の巣をおろしてみをゐからをゐて

これゐつけて見たゐはへゐ〳〵が一そくゐるゐとおほせられけれゐ彼ものなか〳〵何ゐもつ
者ゞべきこゝろゐおくゐゞゞけれゐ一休仰られけるゐそこなるゐ我ゐ汝に一則さづ者しら
すへき心ゐゐしゐとしめし玉へゐかのものゐおどろきさてゐ一休和尚さまゐ仰られかたゐ侍
るかとゞ者れゐ自心自佛と答へたまへゐよゐ手をうつてかへり終の自得しけるとゐ
○洛陽ふゐる道世しやゐりけりゐるとき一休の草庵へたづね行ゐとしめて見参ゐ入奉らんよ
しゞける折ふし和尚ゐ病氣ゐて此間ゐれにてもゐ目ゐかゝる事はゐのゐゐらずゐゐ用れ
事ゐとかゝかゐねてゐ出ゐるべき由ゞ出ゐる〳〵に此坊主のさねてゞやうゐ病氣のゝしゐ

尤ありしかしながら立ながらに見参を入たよしたつてゞ者り一休かるゝに僧も名あと
まとさていとゝさて聽したまゝおもいれんそいこゝやがてたち出たまひたいめんした
まふ此坊主ゞけるゝ某と洛陽おまかりある坊主をてし天台の法門をそのたれとくうけた
まはりてしかしのれどもに坊へすま玄不審をたづねゞたくそんじ參し一休いかあるふしん
だしいや我等は愚僧の身にてしへばいろとの講釋を玄らぬべら坊ふて返答ゞさんをおそ
ひそとらざる事なりゝれたまふ其とき僧のいとくいかなるをりあれ草木成佛一休答へて
云く卿木成佛よりなんぢが成佛成しるや又とんせいしやその成佛といかなる所にかある
一休おんぢが心ゝゝへゝ答へたまふときやがてゝ此坊主閉口して歸り者る自心の成佛をそ
しらそしてなんぞや外をたづぬる事愚なりたとへは盲目が黒白成あらそひ玄んかうが月
をのぞむおさを似たりそれ道人ゝいつと生死れ一大事を心おかけてむしのりんを名玄
むとそるをおそ道人ときいふべきおおのれが心をさ名悟らずして外を求とん ふぞをかし
とて笑ひたまふ

○一休和尚おろしも春れ半のとなるに花おこゝろをよせ玉ひて幾枝をのつめ花籠にたてま

玄名て酒おど參りこゝろをおのゝ〳〵とおりておゝ〳〵ます所へ一休の旦那の奥がた參りけ
るよくおそ來り玉ふとてさゝなどすゝめおかしきとなどにとおそおりておたもれ酒れみ
て遊ばをそをば日をとや西山おおちおちのたつきもしら必に寺お彼女房をべん〳〵とい
おし居ける和尚いのゝおぼしめしけんおよひとにとまりあをと仰らをける女房のゞける
えのりそめお參りながおそ仕ひさへおにとやらん似合ぬやうお侍るよ一夜とまりゞさ
たうき名やたちゞべ玄其うへ夫ある身の事おひへへいかお心とさとおそひのおひがたく
侍るまづにいとまゞすとて立かへりしを一休袖にすがりひらおよらととまと玉へと引
とゝめ玉ふお女房ゞやういまゝでと一休さは玄生釋迦のやちに思ひ〳〵がとらとにに心お
りてとゝめ玉ふかや狂がるおゞせのなとゞけをを一休笑ひ玉ひて其方へ心をかくればお
そ愚僧も是非おと止めゞせ心かけぬ者がにとまとあれとゞそのかと仰られけれを沙汰の
のきいや夫ある身がかゝる事侍るべきかとふり切て興お乘立のへと者るさて夫おあひて
一休と佛のやちお思ひそなた樣をおぼし必さんがいたづらなるに坊なりとらとお酒をそ
ゝめ玉ひて今まで引と必剩さへことひと一夜とまれとかおよ仰られけるかおらずおの寺

ゐ参り玉ふおと二心おいけん玆くりかへし〳〵やける夫いそるそのにて手を打てわらひさりとてと佛おと汝がかをいふを斷おりとゝ思ひ見よいかゐるものゐても我をたれひ旦那の女房になを〳〵しげゐ一夜とまをとておか〳〵出家の身にていひがたしと〳〵一休和尚と枕をならぶれを今生後生のうつたゐ成べし我等をかね待らず急ぎ行て一夜遊びたまへなゐ〳〵の誓言ゑ我等のねたみ心となしとやせゑ左わらを引かゐし参るべしたよろこびゐるべしとやけをを急ぎ参りてもゐる〳〵と和尚をおぐさめ玉へとやけれを女房とゐるこび一間の處へたちこをおしろい口紅きつねの化たるがとく引つくろひ衣裳をかざり急ぎ興ゐのを一休へおそ参りけを一休いや寐玉ひしゐ門ほと〳〵たゝくおぞろき立出玉へをかの女いかゐを細々としたる聲よてさきよゑ是非よ一夜ゑまれと仰られおれぞそ夫れ心うのゝとしくてふりきり立歸りしが余りは殘り多くて夫ゐいおまを乞へへと苦しからんとやもゐおいづかしながらとまりよ参りたるとやせを一休いや〳〵そとやいやゐていはこのゐりゐをさき程こなたへ心かゝりたるがとや心かゝらずいとやはかへりあれ〳〵とて門戸をかたく〳〵め音をせずをとてとはなぶりいかとやおをどとゐへて音をせず是非おくこのへりて夫ゐしか〳〵と語ければをあらんと思ひけること〳〵て笑ひて天下老和尚之心うごくときは動のしうごのされをうどかしたはえずもとやい其とを誠ゐ行水の如をは心やいさぎよし〳〵とかゝ凡人よてとおしゐていよ〳〵尊みける

○扨一休和尚れ時代までと方々の寺々より七月十四日ゐと大内へ灯籠をさゝげゝる大徳寺ゐを開山大灯國師とをもゐありてさゝげゝかを後々まで例ゐおいやめごのたくゐをければ一休おそつかしくや思召おんゐるとを大理へ灯籠をゐけるとて狂詩を一首つくり灯籠よそへさゝげ玉ひける

性靈今日出來迎　雨露直供二萬葉棚一
桃得灯明天上月　松風流水讀經聲

と遊しおれば　帝叡覽ず去〳〵てまとに一休の詩なるものをやうおを灯籠をもとめおるなり自今以後大徳寺よりを何方の寺よりを七月に灯籠をさゝぐる事ゐるべこのらずと仰出それおるとなり世の人おををさゝさてもく名僧かなかゝるは心さしゐてと定ては寺ゐも性靈祭をとゐるをとを若ゐらとさおそのとりたるとにてやゐるべしいざ人々一休のは寺

へ参りて見物し来代の語り句とそなすべしと四五人つれみて参ず一休へは目おかゝり此
問　禁理へさゝげ玉ひし灯籠の詩洛中にて是のみそた仕い定めてかゝるは忍ざーおいと
い性靈まつりとも遊しゃ間敷いとゃけをばいやゝゝわれらと三界の衆生をおそふもゑよ有
縁無縁の悪鬼城まつりてしもゝゝの物を手向いもゑ廣大無邊おる性靈まつり仕いと仰ら
れけれど皆人案ゐ相違ゑて此は寺ゑと見はゃさずいが何れゐてはまつりいぞとゃゑれば
まれとり四五町ほどをのりていと仰らる皆人ゃけるはとてそのは事ゐ見物仕度いは人そ
へらを下されよのしとゃけれどさとく成事をいひ玉ふ方々や人までをなし我等同道ゃべ
し水そゑし玉へと誠しやのゐ仰られければ皆々とろまびは跡に付て行ゑれど東とち河原へ
は出あつてこれゝゝ見たまへとて両手をひろげ玉ふ皆々どこもとよていぞとうゐゝし
ければ一休是見玉へとてくるゝゝと舞ひ手城ひろげたはへども皆ごのてん行ざりけれどお
けゝは見物かおるまじたそとゝて此のすべし只耳にては聞あれと仰らをけれは皆人ゐ
きれて立居たり一休一越調あげて仰らをけると

山城とうりやなそひをそのまゝゐ

たそけよおれや賀茂川の水

聞玉ゑけるが是大おる性靈たおゐてとなさかと仰らをゑれど皆人さても〳〵いやともい
とれぬは意やとて感ゐたゝてこのゐいける
ゐると此蜷川新右衛門來て佛法はなしなどしてゐそびゐけるゐ一休の仰らるゝは今ど
此の出家心さしうすく佛と五百戒をさへたもち玉ゑしとのやせめて其かず取の五戒を
ばにくゐもつべきとゐりとれたまゐば新右衛門ゃさをけると眞ゐ沙門いゃゐおよどず
俗のうへにてもせめて五戒はたそちた此事ゐとゃゐ一休いや俗い是非ゐたとゝ出家ゐ
はもたせたく思ふと去ゐごら目ゐ見て耳ゐ聞もるもの五戒をたそちがたし是つか一尺
とち扇さへ五戒城やぶるうへとまゑて僧俗生としいけるもちたもちがたきとゝりゐり
新右衛門おをを此ゝて此扇子さへ五戒をやぶりいや中々やぶりたとこを又和尚の出來
口ゐて侍らんいで一々とひゃさん答ゐて此のせ玉へいつをちは頓作ちはこのる口うけま
ゐらせんとゃけれどさらは一々とひ玉へ新右衛門とふて曰
如何是殺生戒　　答て曰　竹を切て骨とはなさいるや

如何是偷盗戒　答て曰　虚空より風をぬすまざるや

如何是邪婬戒　答て曰　かなゑとゝのとせずや

如何是妄語戒　答て曰　絵そらことをのゝざるや

如何是飲酒戒　答て曰　開てさゝんざいとそゝるや

これ扇の破戒あらゞやと仰らをれど今にはしゑめ口なとけれども一入ありがたく
ぞんじたてまつるさとながら五戒よりうち偷盗戒よりおん答ゑ不審やたくゝ和尚より曰いか
なるふしんゝぞや新右衛門のいはゝく古語ゑ

扇是日本扇　風不二日本風一

とゝゝとさゝ扇ゑそ日本よりあふぎをうおかし給風は日本をこのりゆゝとのぎらず千里同風
おゝあるからはめすむゝてころゝかやとおどけて一句やけれど一休新右衛門とよりたまふや
わといふ

音をなゝ香をなゝ人よりあゝろゝあて

とゝべゞまたふるぬしをめすびど

とあそこしけをはさてそこときは口や先はどよりよち問答をは六のしおから一筆あそこされて書てそらひてそちまゝ掛そちおさゝれけるとなり此のけそち都ち中ゑ持たる人ありこれを聞す

○或人一休ゑあふて云く何と和尚さま世ち中ゑ化そちは人毎にきどくふしぎて中そちと覺ゑはいさやうゑていや一休答て曰いや只中ゑふぶらりてこたへたまふちをとゑ大ゑそらをたてさてもは坊そちこゑ中さゑは返事かゑそれ人ち物城とゑかくるに凡そ法ゑそ有べき中ゑぶらりといふゑいさつそつゑよちゑたまそらそれは人城なぶりたまふかは出家ゑそ似合ゑさぶんや是非て也此上そ子細をたづねヤさで置まし坊主そといそせまじ諏訪八まんそは示現あれて大ゑいゑりヤける一休ち有さまを見玉ひさても〳〵其方はたんそゑおそろしき人かなそなたちやうなる人そとそち、咄しもゑらゑ子細そ其えなしくそふて いふ氣ぶんなり先よそ合点しておみやをそなたいそち〳〵不思議をて ふもゑにそゑたへ幾度もヤ聞せる事なるゑ同じ事を又といひ又云ゑ是さるにがてんちもかゑ人のなとおそひて只今ちやうゑ返事ゑたす事そそれそち〳〵ふしそを立れそふしそを不思議もゑして思

へばふしぎ成事と一ッもなしまた佛も神も有て おもへとあり無とれもへとなしさを天わ
るにをあらず無よをあらず扨あるとたと中に ぶらりてい ふ物でとあきのといとるをば此
人手を打てかんじけるとなと

一休諸國物語圖繪卷之三

○一休和尚ゑ弟子に雲知坊といふ者あり江州わ住げるが年月を經て師ゑにをゝへとそら
とんとて紫野へ參り寺門へ入らんとそるわ小法師棹をもつてうたんとそはは何事ぞとい
はんとすをどゑ物をいはをずわげ去ぬ是といの成事やらんとる〳〵思ひたちて來りしの
ゐもなくひなしく歸るべかとおもゐて又行ときわ小法師此ちしといのさま思ふ事ゑわ
るやらん度々來といひてまつかたとちわ引入つなぎおく其時我身を見れい牛あり心うき
事かぎりなし是と日來ゑ信施ゑつみふかきもゐわおそとおをゐて尊勝陀羅尼おそしんせ
ゑつみをせゑめつする功德わをとさそが聞置て誦せんと思へどもならとざる事おをとか
おとずせめて經ゑ名おりとをとおへんと思へども舌おはりていとをず只そゝめくだかと
此牛と病のあるよや卿もくはず水もゑまずそゝめくて人言けをども心うきわ食物の事を
をうちわすれて三日三夜そゝめきしが心ざしゑつをるよや尊勝陀羅尼ていれ為りける
とき本ゑ法師わおりめさてつなをときて和尚ゑ前に行め和尚仰らる〳〵とは坊といつた

たれゞといひ玉ふよ三日已前よ參りたりと答ふいづくゝ今まで有つるぞと、ひ玉ふに馬屋よさふらもつるとて有し次第をのたりける和尚不便よおほえめして彼奪勝だちにをかしへたはへゞいよ〳〵此坊主得道しけるとなゞ淺ましき事なりおそるべしとづべし〳〵

○江刺しやうれん寺ゝ一休おとしましける時ある夜ふしぎゝ夢を見たまふ其隣家に角助とゆもゝ、親喜助といふをゝ三年已前ゝ死けゞ今生ゝ居るとゝたまさしく片目にて有しが一休へ夢中ゝのたりゆやうはわをい死て雄子ゝなりたりいつ幾日ゝ地頭よりゝ狩に出たまふさらも我命をたもかりがたし此寺へゝげ入事あらんのくゝてたべ生々世々ようれしとおもたん我もとよりゝぞん玄ゝちよくかた目しいたしりが其折のらおれを定めてきヒゝちのすゝ多く飛入る事あるべけをゞを片目しい為をしるしゝたすゝたまへとゝもゝおもひたるをがたゝゝなくゝかたるを見て夢覺めあやしく思しめを所ゝ次ゝ日ゝのんの如く地頭たのゝい有けるしかるゝゝたし一羽寺のうちゝ飛入ゝ和尚ゝ覺玄て扱をのの夢ゝ見つるき玄を是ならんと取て見たはふゝ彼のいひしとく片目おしやがてのをの中へかくしてふたをおしさあらめ体よをてなし玉ふとところへかり入うち入て爰かしこ見ゝをゞをゝちすゝ力おくして出ゝり和尚此さヒを取出して今の世繼角助に玄じうをくわしくゝ語りたまゝを角助おみだを流し此鳥をゝらひ飼おろゝたるゝ開えべるふしぎおりし事ども也

○江刺よ竹林寺といふ寺あゞ此住持生質香低くして三尺ばゞかりおりけるがさる方ゝ思ひ入たる美少年おりしをひそのゝたらひ折々寺へよびよせぬんおろせられしが何ゝかしてうちたへ久しくきたらざれば此住持大よ氣をくさちか玄何事もうちすてぬ間にうちふしゝるが下人少しのぶちやうとふりしを腹だちまぎれゝ枕をなげうちしてさんゞゝゝ悪口しゝる所へ一休もとよゞ竹林寺としたしゝれとゝのらず來られ此体を見て是と何事をいひて腹立ー玉ふぞまづゝゝのんゝんめさをよ何ゝばしいたされしやとゆさゝれを住持ひそかゝかたりてかやうゝゝの子細おりて此ごろは打たへゝあらす何とぞしてよび度しゝの親兄弟の前をしのぶよー永るゝの何そ夫とおゝたのこつけしてうちたへゝたらざるはいかなる事そとゝひやり度しゝ坊ゝと才覺人おればとろしゝ願むといふに一休うちゝらを夫は何より易き事なゞ此ゝろ澤山ゝおゝる菜と錢と小糠とをゝましつゝ紙よつゝみて遣り玉へ竹林それとゝいかゝる事ぞ一休ゆさるゝとおせにてぬかといふ事おり竹林さゝて一だ

んおそしろくしいさらば明日とまれをそたせやるべし今日は雨中ゐて猶そら心さびし幸ゐ
坂本とい珍酒をそらひたと一ッまゐられと我も名べやさんとてたがひゐさいつさゝれつ
酒宴なかばゐ一休たつておどられけるごのせう哥ゐ

君がこゐとて居そらごのしろか。枕おおげそとがいおしちくりん〳〵ちんちく
りん。そなちくりん炭やほどゐさのそんよな。をどりとおんよさでちやせん

やゐろさ

とうたゐかおで〳〵かゐらばけりおかしかいし事どもおい

○其頃江州鳥山村といふ所ゐ六條おゐがしどの、ばに領分ゐてあり茶るが久瀬又右衛門とヤ
家老どうよく心のもの成ごのもゐ百姓茂ひたものせぶりとりあまつさへ農具までもとりつ
くすゐよと百姓をのつから耕作もならず在所ゐ住れずして一人ッゝ行方しれずのゝ程に
やう〳〵殘る百姓わづこのゐおり何れをゐををなげきいこ〳〵せんとひー絶きゐへり其中ゐ
一人がヤやうといこゐ百姓おををゐて是とゐまり無道なゐしやうこのな耕作の道具までも
とられてゝ何を以て作りをせんしこのをば在所ゐあゐてもせんおしとても死する命おをを

此事を一先うつたへて其後とゐてものくをならんとおをふといかにゐヤ茶る此儀もつとも
と一同しさて訴狀を認むるゐれよんでたれかをといふといへどを皆一文不知のものどを
ゐてたをか書んとゐふをのもおし折ふし一休ちゐ行玉ふを幸のとなりとて皆々立ち
りて訴狀を書て玉とれといふゐ一休きゝ玉ひて何事の訴ゐゐやと問玉ゐをしこの〳〵のこ
ををのたるに一休聞てゐや〳〵それと訴狀までゐと及ふまし是をもちて六條どのへさゝ
げとゐて歌を書てやり玉ふ

又もまたとりてをきこのぬ一村の
のふ具殘らずくせやゐてい山

ゐてよみて是をつかとさをけをゐ百姓どをかゝる事ゐて中〳〵とい上いふ事思ひもよらず
ゐヤけれど一休いや〳〵こをゐてよし是非おををさゝげよゐ仰られて歸り玉へゐいづれ
もいこ〳〵おらんとおをへどをみおゐ土百姓のあかゝゐどものとり合おをゐ論ずをどもめ
づらしき分別を出さをゐ是非おく玄て彼うたをさし上けれゐ六條どのばちんありてめづ
らしゐ訴狀かおゐ百姓れ分としてこゐる事ゐ思ひもよらず定て人だれみて書つらん有のは

丶おゞべし若陳宏なばくせ事なりと仰らるゝよつて一休をたのみしお一休おをおて事足とゞせ宏趣をゞ上げればされむこそ其おど者僧おらでそのゝる事いたんそれ有とを覺ゐすお興宏させ玉ひて其のちと農具をそのへして百姓おおさ者ふかゝりしとど扨も前刑につゝいて講談かたをつめ終り侍りしがまとおかやうゑ座をおおゝうし詞をかりとそをゝおお他生の緣とゞそのとなす事をおはくあるひと役躰をおい物がたりお夜日をおのしときをうつをと同じ事おがら日のつゐへとさらいのゑ馬があひたりとて人事そしをてかたりおそぶとせんをおい事たがひお罪になりはすれどを此やうな講談説法のまねをいたして一遍の念佛題目をとのうるとまづ惡緣でいおし座興にをゐどけゑもよい事ゑちまねをすいぶんしたがよしわるひまねとおるそのよい事えうそゑはねられぬつれゝ卿ゑを此こゝろをかいておかれたとふいたとへと氣ちがひが丸とだかゑなつて大道をとしりあるくになるほど氣のちがはゞ人があの狂人のはねをして見せんと丸とだのになつて同しやうおとしりまわらだおれもとをに氣ちがひといふもはおり然を其心は違とぬなれども形がうお者ば先誰を人ゑしてを亂氣でおんとといをぬたとへ

内ゑ惡心があらふともまゝ身の行ひ心の持やう物のいひやうをまねびて儒者のやうゑ身ををてを其儀じもしやといふものなを扨内心を俗でのらふとをのたまをそつて衣を着けさ袋のたちでをくびお引かけしやくでうふつて虫をころさぬやうゑ形をもてをは出家さゑなり誰の俗人といふべきや然れを惡のまねをすれを惡人善人のまねをそれば善人といふをのなをとのをよいまね拔すべしよいまねとゞたら身体のならぬお金持衆のはねをなされよをいふ事でをないせめて眞實をり佛法をのりがたい物おいふ心をおゐらずとを身のうへおはねをしておりおも善根をつひやうの手立とゞ事なり故お惠心僧都を名利の二字を拜見し玉ひて

世ををたるをしを思ひてふみ見しゑ

まゝとの道ゑ入ぞうれしさ

とくませ玉ふ僧都ををじめをたゝ佛道をそれはを眞のら底からおは思し発さず彼禁中おれいて紫のは衣おをたまををしやうなる事を手がらゑし人お學文者をいはれたや知識とおつて人に用ひられたやとひとへゑ名聞利養に修行し玉ひたごのいつの間おやら誠

の佛心ゐのおひ心がうかびてやを今までと名利よをのをとりて一大事の所をとり失なんとせしよて急度心をてり直して見れを今かくれとを大道心れ心とれゐるをゐしかたの名利を求めん〳〵ておもふて修行したるがもとゝおりぬれば世をわたるはしと思ひてふみ見しにそれがたねどなりて眞れ道ゐ入たるは此上をおきうれしさとよはせらをた此僧都さへと宏めと名利を忘ゐの宏玉をたゐあり今どれの各何ほど後生をねゐのをだてなされてをさゐ今其方がくびをきるゐのそれでを佛道が有がたく思ふかと飼をふを上たらをもいやすきと後生はねがひますまひもるし下をれとやす人多のるべしそれハ身命おしはぬ佛道者後生ねがひゐをいをれずをてよを今生から飼ゐて身をさのるゝといふを今世のらなる修羅道玄やかうや愚僧おどおか〳〵それゐどの信心をおこりはせぬ其をらゐに成てををのぬ佛道者といまどきをめづらしい事殊ゐ名利にさへ後生をねがふと有とをのくまづ命のけるまでをちのひ事名聞ゐ成共佛道願ふのまねよきと思しめしたをの談義寺參りをゐおされたがよし又貧れをのをゐらをほどおををよし心〳〵よ叶はど善根のま絲をし玉へまねゐつゐてをゐ宏がたざるが次よ仕ませう

○さて一休江弥ゐましまをてきゐる寺の卒都婆がを宏て八尺をのりれ入道よゐ〳〵そとを の影ゐ立そふて居ける下部のをれどを是をおそろしがり用事をとゝれへる事をおら中增ておたりへを猶參らずいかなる子細どと知人をゐ〳〵或人和尚ゐのくてのたる一休その卒都婆を見たまひけるを文字のちがひありさてをとてやがて改ため書たてらをける或ときをだんの妄霊夜半のまろゐらはれ一休の前ゐひざまづれてなみだをいら〳〵とゐぼーて曰我地獄の中ゐ入てさま〴〵の苦を受る事たへがたしゐれれを僧すみやかゐ救ひ玉へと たゞしゐ〳〵とくどれをる和尚のいとく汝圓通より出て圓通ゐいたる何れの所ゐか地獄ありやと仰らるをば入道をたへて曰いやおをちうを論ずる事おのれたゝ此躰を見よ和尚のいとく其躰はつたく佛性同躰ゐへだておしとれたまへを又入道中やうしからを名と付てたべといふ一休のいとく本空道入禪定とやさるゝとき其まゝ靈さゐ〳〵としてうせよをり其後と二度出ざりけり一休ゐとをらとをんが爲よ來れりと皆人中ゐへいけるゐはをなりし事なりけり

○ゐるとれ一休病氣ゐてよ〳〵城いためのびかゝみを自もうゐらず迷惑し玉ひいろ〳〵養生

し玉へどもいたみやみがたしさる人來りてやうやう其せんきい壇風呂がおわよりもとくいい其いたゞ所をいく度をふき付をどやとらぎて即時わよくいい私も此頃せんきさしおこりしを風呂よてふきいへと其まゝやはらぎわくる日れもるゝ〳〵立ゐを自由わいたしいい間に内乃次郎太郎はつれおされのれに其いたひところ城よくふかせ玉へてをしもるおさらとてやがて壇風呂へ入玉ふ次郎太郎をとを入おりさてのいたむておろをふおとてふかせらるゝ、お二人のものやがてふきよかゝりおる其ふたやうにちくしやう〳〵〳〵といふておたてうちたゝひてふをときあ一休つゞくゞときゝ玉ひて何てか合点し玉ふやらんそれまゝ返答に不奉公〳〵〳〵とおたへ玉ふ太郎次郎もふしんよおもひおれどを主人の事おをといかゝと問ふともおらずしてうち過ぬある人湯よりあがをこのたすみよゐてつくゞゞて聞てとらすぢをよれり此人わざとだまり居てあくる日和尚のをとへ行ヤけるを和尚さは夕部風呂へ次郎太郎を連させらをは入おさをいやされは此中はせんたおてめいわくいたゝ居る所べある人のおしへおて風呂へ行てそのいたむ所城よくふかせよと有もへ夜前湯へ參りい其方い何とゝて知りいどいやさる人ちをおしおて夕部うけ玉りいしかれを世おと風呂をふくをとを多をふかるゝをのをおはきおあんぞちくしやう〳〵とふけをふかるゝ者不奉公〳〵とこたへ玉ふとさて〳〵是づらしきふきやうふのれやうと風聞仕いさやうにふき又おたへ玉ふをいかなる事おていそおヤけきを一休それい次郎太郎がちくしやう〳〵といふを合点まゐらず抽僧ともとり畜生おてもなしまたちくしやうといをるいべき覺へおしをかしちくしやうあるしをざがもしわらを彼らが奉公のしやうがあしきもをおらんさるおよつて不奉公〳〵とおたへ為るこれをれ為まへを此人おどり上り手をうつて感ヒけるとおり

○江州堅田の浦よ彌五郎といふ船頭一人ありけるおれのわざおのらいやしきいとおみにやつれとて一生の生穂の穢揖の枕をそをだて真の道にうとくして心さしさながらあびすの九重の花よおそぶともがらよと〳〵るのおとりおのづのらいやしきよなをていみじのるべき事知覺しらずかたくおお尊たおしへをとぢくやまざををいとわさましたよすがおりおるがつゐよ身をかいて死おおる妻子したひおげを事のぎりおをさてわるべきよわらざれば火よやせん土よやうづまんとかおしみけるせ是ていのおる知識をを頼みて後世のくげ

んをたすけたまふ折から一休風雲の行衛を思しめして浦ののたよねまいあて四方の致景堪たのしみておもします所よ妻子おれを見て衣のすそわすがりたい今かやうのあさましきをの、相果いがあれたにおをたれて彼をの、後世のくるしみを導びてたまれかし生々の厚恩おていべ志ゞのなじみ者る一休ふびんお思しめし何より安き事なを引導さつ者得させんゞて此家ゑたたり玉ひ其し玉ふ樣よそふしんなを先々死人を米おをにつゝ発よゞてたはらお入て繩をか者丸太舟おかきれせ湖水の波おうかべ者るれさおいたりて磨をあげ高らかおのたまふやう

此俵とゑを元來米俵にをわらず豆俵にもならず汝とかたの彌五郎俵なり

江河にしづんでうろくづのゑとあり佛果を得よ喝との玉ひ水の底よぞつき入ける是成佛の引導之

○又一休堅田の庵おおとせしと比海とゑへ立出玉ひては毎日つりをたれて之魚をとをたまありけるに此弟子兄弟の僧達ゑれと不律ある仕合おりとて一休を一間のところへよび入口々お異見しけれど一休の日各たちと學門堪するとて何事をかし玉ふや我等と古しへ

の祖師の眞似ゞの禪宗の學問と心得たりしのれと例おき事は仕らずいでゝ古の例と如らずと見せんとてもおより給ときやうなり蜆子の海老をつり玉ふて喰ふ處をなりゝと繪に書一首れ歌をのゝれける

いおしへのかしこき祖ゝと蜆を釣し
我はあらうて魚をつりてくふ

と遊しかの僧たちにさゝ付そあらぬふりにて居られけるみなゝこの繪を見てさて之奇容ある繪や見事なる歌の書ふをやと感志ける其中よての老僧わさわらひ古の祖師の蜆を釣參りしゝて貴僧の若比なりおて魚をつりまおらんと鵜の眞似志て烏が水をのひといおゝ類おりさて貴僧いおの蜆子和尚のゑびつりてまいをしは心根をしろしめしをるか中々及なき事やと笑者をは一休少しもさとがず色ををのへずさてゝ貴僧の愚おる心おてと蜆子海老を喰し心根がてんとまおるまじそれ人と若にをよらず老たるおもよらず道おおあては老若とおるまゑ老たるが悟道せを門外のむく犬を悟道すべし世尊と三十成道とう者玉とる我等ゞの祖達广大師れいゝしゑを承るおある時般若多羅尊者れ來り玉ふて光明の

くやくたる璧をそゝげ三人の皇子お見せ玉ひつゝ心をためさんとておの〳〵此玉を寶の
したまえんやと問ひ玉ふしときに兄二人とこの璧よまさるたからと又わちじとの玉ひけ
るよ達广大師と七歳にて一の乙皇子おりけれども此玉と世寶よて寶おわらず智光の珠お
そ又なれ寶おれて彼玉をおげうち玉ふけれた尊者おどろきのゝるいてけおれ身にして
ふしぎなる人かおて則ち名を達广と付られけるとじめと菩提多羅とヤせしかや達广
とと萬事に達し通玄て見がれ立たるやうおる人おとて心とかやしかれと悟道と老若お
ととるべのらずと一休手を打て彼老僧が異見の拙さを笑ふ玉へと老僧と人中ねて込付ら
れ赤面してヤされけるはかるロおまのせてヤされたり如何ようにてをいふとてを心えさ
をおきものなり貴僧と實正蜆子のゑびまあいしは応根をしい玉ふか一休答へて日中々存
知たり老僧ヤ出るよと各いかよ思じめすそれ禪宗い以心傳心おりんかで蜆子のは心か知
るべき蜆子の心と蜆子おらずとしりかたゝとわざわらへと皆々尤と打わらて蜆子の
心とおかゝ〳〵凡人のしるべたよわらずおかしし一休は蜆子よおりては覺にけるか一休少も
おくせず扨々おの〳〵とおろかなる事をのたまふとれのな我等と蜆子にならねども蜆子

の心えよと知ったりと宣へとみおゝ〳〵それとうおかたた返答おらん一休されとと〳〵おの
〳〵と此一休が心におりヤさねば愚僧が蜆子の心よなとたるのおらさるえしれヤまおて
大お笑ふ玉へとおの〳〵藤咲門にておげられけるとのや

さて爰お善悪ともお眞似よよるとヤ事のはたおしヤそうある人冒我をのかたとの淨る
りわやつりを見物に行き彼十番おさりの處がおをしろしとのみ思ふおんで彼五郎十郎が
祐經を討た所が不斷目よ見もるやうふわつたとたよ日頃念願おるもれふとりきたりて
酒よ夜をふかしてつふそおよねて前後をしらず高いびたしてねるよ此十番切のとた男
居ねむるお目がさへて寐られず折ふし彼夜うちの五郎十郎が淨るりをおをいだして
ひのしれ祐經ごのうたをしを此とくね入つらめおぐさをよ兄弟が討たるとよろを仕方し
て見んとふつと起てあたりお刀脇さしあるにまのせ両鈔さめて其方と工藤でとないか
我こそ曾我の何がしおり親ののたきのがさねと刀をすらりとぬきながらね入たるもの
討と死人をきるに異ならずかそもゝたかにねるものか覺悟せよと枕元れ綵おおどりお
かつてふみおらせバ此男目を覺玄南無三寶とふんどしをせずおにげ行て次の間の屏風

の間を飛のくれてふるゝ〳〵さしのぞけば去かてい人たゞのゝおちんさら〳〵身よ覺ねな
し我は生たる鼠一疋おろしたる事待らすと手を合て色青く其興を覺せしかはを見て此
男もをかしさの死りなく是とあやつりけれまね玄やと大笑ゝにおつた各〳〵よすゝめる
が此たゞへありあたきかいふは八万四千のぼんのふの敵つるぎえ念佛題目は利劒之この
の煩脳の中の大將無明や元品やといふ敵めい聲聞や緣覺といふ修行者さへ手を余りま
すまして〳〵おあた方れ千人万人の勇力でえ行ね事じや是が行くらいおらゝ何をそまねよ
なゞとも名聞を成とも後世をねがゝせられよ善人れまねを玄玉へとゞやさめとてもそ
をが行ねをゝせめてもの事ゑよいまねをめされよまねよ成ともそれゝ今の如ゝ人たが
らてゞさらうとゝきをつぶゝ敵もあれたゞおそでえ功徳つみ徳をのそねて名聞の中ゝ
り眞實の道理があらはれて眞の道を入事ゝの有ゞとゞ事を惠心僧都もくを〳〵仰られし
事おゞさて眞似にゝ物事さま〳〵多けをゞを此やうを經文のえしくをでそよみたり聞
たりするまねが其中でえよし少でゝわるゝまねなゞせぬゞよい世話に佛のまねとそれ
ゞ人まねがならぬゞいふ金持ゞれや位高を来れまねおのが分よ似合ぬまねがおらぬと

いふ事じや今の眞似といふい其やうなけつからを形そがたのまねでえおし只心内を
おしゝ持ずのたちよよき取はしをうつせといふ事をうたを

のしてきをうつせゞおぞかうつらざらん
花の色おる山ふれれいろ

とよゝたるやうをうつそふず又きおゞと思ゝ品形ゝ兒ん〳〵の生付貧福は過去の業
心えなゞかゝしおきゝゞのしおきゑうつさゞうつらざらんと書たる歌よく心得て眞似
おされゝとゞゞ中事ゝ今の聞きがひなきやちを身を持玉へ又まねを付ておかしさいなし次
をゞやませう

○爰を一休の時代に蜷川新右衛門尉親當をいふ人ありけるゞ禪法に身をやつし心をなやま
しけるを一休の發明なる事をきゝ及びて導師とたのみ奉るへ〳〵とてあるゞき一休の草庵
へたづね行柴れ扉をゞと〳〵たゝ〳〵ゑ折節和尚出たまひていかおる人ゞと問ゞ玉へゞい
やゝるしうゝはゞ佛法修行の大俗まゐりてゝゞとゞやゝれけれゞ一休えやゝひたまえく

おんぢゝいづくれ人ゞ　答曰和尚と同國

國ゐと何事を侍らぬか　　烏とのうゝ〳〵雀とちう〳〵

こゝといづくとかしるや　　そらさえあ染たる野邊

いかんとしてこの染者るや　　尾花朝のは紅菊柴蘭

ちりてこの後といかん　　宮城野がとら

原ゐと何事の侍る　　水と流れて沈々風は吹て颯々

よき哉やこれ〳〵と請じ茶湯はゐらをとゝとて

なゐをゞのなまゐらせたくとゐをへども

達广宗には一物をなし

返歌

一物をゐきをたまいるこゝろゐを

本來空の妙味ありけゝ

とゆそれけれを一休のたまひけるは聞及びしより蜷川ぞのゐと道心者ゐりとて感せられ

けるそて四方山のはなし過て親當ゆされけるを少し承りたき事ゐり邪正一如といふ心得

といのなるがよく侍るや一休聞玉へとて邪正一如の心を

生れてと死ぬるなりけりお去ゐへて

しやのをだる广もねゐも杓子も

又問空卽是色とといかん答へて

しら露のおのがをがたは其まゝゐ

紅葉よおけをくれなゐの玉

又問色卽是空の心は

花を見て色香をとをゐちり果て

ゐゝろなをてを春と來よけり

又問世法といかゐ

よの中をくふてとこして寐てゐ死て

さてその〳〵ちとしめるをのりと

又問佛法とといか成心得をよしとし侍らんや

佛法とおべのそかやき石の髭

給ふかく竹のとをすれの壁

と一々問ふ言葉の下ゐ歌とみてあたへられけをと親當舌をふるはかして聞及じよりたけき活僧かおて賴をし〳〵思ひけれといよ〳〵道を示したまはれいつまで語るも濱の眞砂のこのず〳〵おをと先ほいとはヤそとてしゐヤ垣の邊まで歸りけるが手をたたとうち立歸りて一大事の安心わすをたり佛おといのゝして成けるそとヤけれと一休きやつとそせそのかなと思しめしそをいいと易き事之おてふんぞりかへりて目口をゐろげてかをして佛にとおるよおてのたまへば親當おどろを活大禪師このおと心空及第してこそかへりおる

○一休和尚ハ奈良のたを木おていふ處ゑ折々とおとしまず其邊の村々と近衛どのゝに領地ゐて有けるが左近尉といふ家老百姓狡ゐたをのせぶと取おる百姓どをもおををなげきていかゝせんおてひし兄きおべり其内老人ヤけるといかに百姓にあたりきつしとてを武家どいとるか連べ去ほ公家の長袖おれを訴へヤて見んとて訴狀をたくみける所へ折ふし一休鉢をひらを兄に出玉ふ百姓どを一休を請じこれ訴狀をは書下さをよとたのをけれを安事おり

いかおる事どやとのたまふふしか〳〵の事のよしヤけれを長々しき狀までもなし是をもちてほ館へさゝげよおて

その中と月おそら雲とおゐ風

近衛どのよと左近なりけと

とよみて是をさら〳〵と去たゝめつかとされおれを村々の百姓かゝる事にて免多くたまとる事思ひをよらずとヤけれを一休ひらさら此歌をのみさゝげよと仰られて歸り玉へをせんかたなくこれをほ館へさゝげゝをバおれは何をのゝくみおるぞと仰出されおる百姓ヤおるを薪木の一休の作おていとヤせばその放者おらではのゝる事いとん人今の世ゐ覺ゐずと興じ玉ひて多くの免を下されける

さてかどけたるとなしなれどをある座頭がくそで山椒にむせたるがおかしさようとてしたををさかしを兄男居おとせわたくしそれまねをして見せませうとて手元ゐありしさんしやうを二三尺ぢ口へいれてゐとつふたつ去ぢ兄して口をとがらし目を白く黑くなして舌をそゝるうちに此男誠よひせて息を内へぞのりして水洟〳〵でんふさへ息い

でゝおろりとそまへたをれて目を見つめたるに一座おわりしほどもそれ誠よひせたる
とと夢さらしらずさでもよくにたゞ眞わ物ゝまねが上手きようお男おやうつりまずよ
いやゝゝてゝかめて心おもあまりながゝまねおやとかをふうち炉ゝ中へこけまろひたる
にをまだゝきよりたまねて思ひたるよ炉よてたびんをやゝわまつさゑじまんのほうひ
げおそりてなしたる躰を見て是とまとにひせたるやらんとわはのわみなゝゝおどろき
て水をのはせ薬ををちひてよびつおおがやうゝゝの事わて息出まづあだは灰だらけお
るを打とらひなどしてさどやくるしかりつらんて笑止がをゝば彼男へらず口わ何とわま
り眞似ごのねんいりて眞心のくるしをわ面目灰わまぶしゝたと秀句わし大笑して座をた
ちました其頃ハ近邊に此さたをかりをなして笑ひしとおい先此やうなまねとんとい
らぬもれ今とゝの若衆ととおくいらさる役者まゑとをのをちひの眞似などをおし給ふ
同し口てんがうならをくをもの切としでもゝのそまで一日こゝで一日聞て庭訓往來山高
きが故よ貴方よ向て武道勝利を得ざる事子程子れいはく孔子ハ大學れいよしへおんど
たとへ取集めわけもなふよめどものやうの口てんがうば聞安し扨とうたひでも爰一町

て十番ほどうとふくらゐでを余の口まねよとてきゝよしかりそめわもくい眞似をおさ
れとゝゝ事ゑかやうの事と子どをのとゝゝのら親たちが心得てやういひきかしやりませ
先入主人とゝて子どをれとき覺たるとしよとてもわすれざるをのなり

○一休丹波路へおもむき給ふある山里ゆ二三日とうりう有けり在處のをれゝゝけるといか
わたびのゝ僧この郷境に二町をかり南郷に天台の寺のゝが此寺夜るゝおれをさましゝ
家なり去て色々ふゝぎおる事どもあるわより我すまんゝいふ坊主おし其子細と去々年た
びの僧たのみおきたるわ去方とり三年忌れ卒都婆張たのまを此坊主の書たるが其よゝ時
ならず火焔をもる其火の高き事一丈ばのりわゝ郷内とゝゝわ及ばずゝん郷二三里の外はで
を其かくをおしさをを其坊主もさまゝゝ經多羅尼を修しとひらひゝかどを去るしおけれ
をいつの頃か此事とづのじくや思ゝ者ん夜ぬ者して行方しれず故よこの里の女わらべゝ
るにをなれを恐れて門せどへも出られず其のち或坊主を入置しゆ是を三日とまらへずし
て又出られ其よりわを住せんといふひとりおければおれづからわさ寺とおりくちはてん
こそ惜うしへ是ていかなる事にてやあらん一休開玉ひてさやうの事いいかほどもあると

とそれと別れとよていわるまゝ完て卒都婆れ文字の書ちがゐしもゐおらんそれゞのし書なはし參らせおゐ別れ義あるはじさらゐ同道ヤさんゞてゐだんの寺ゑ行見玉へゐ法華經要品なりわんのとく文字一字ちがひありはらため書直し玉ふ其文字よいはゑ十法佛土中唯有一乘法無二亦無除佛方便說とかゐこれを立おかれよかさねて子細はあるまゐとて和尚とそれより西國方へこゝろざし玉ふ其後い此寺無事おなりにおりひとへに和尚を神佛の化現なりといいねものおかりけり

○又丹波れそれべより三四町南の在所わかめどいふ女あり母一人にゐ有おりその三四軒となりの喜八といへる者の方へかねて縁付のやくそくおましみ或者いのなる意越やあり おんさまゞいひきかして契約返がゐさせて隣郷ゝりあるものゝ娘をよび入おまゐ此女これを無念よかもひて病となり終わ死たましゐのの喜八なるものゝこのたへ亡靈ゝとにきたりて恨をのべ喜八れ首を去むる事たびゝよして其恐さのきりなしさおがらかのひかへし女をおそろ去て親里へゐげ歸れり喜八ゐの親類此事をなげき神子山ぶしをたのみてさまゞ祈禱をおずといへゐをさらに止ざりし折から一休圓部ゑましますよし伝ゐゝて此と

しをねがひしゑ和尚破地獄の誦をのきてゑをを喜八が首おのけぬるべしまた家のうちおとるべしとのたまふを敬のまゝゑなしければ其後ふたゝび亡靈ゐたらざりしとおり

○又讃岐三木れ郡よゐ二里ばかり奥の山里を修行去玉ふゑ在所のめんゝヤけるは修行者にゐ何國ゝり來い玉ふ人ゐ此邊ゐ草ふのき山おれば元より佛ゐくやうゐる事なおゐをゐまして僧おゐおわゐ一鉢ゑ慈悲をはゐおゐといふ事もかつてしらず賊お今生の罪人といふゐ我々が事おらんおはれ是ゑしゐらゐ逗留ましませかゝ一偈一句ゑ道理をゐうけ玉ゐり活佛にゐそならずゐゐ死佛おゐおらゐおゐいゐて四五日ゐゑゝおゐゝ処置けり一休ヤさるゐ是ゐゐ北おあたり松林の見伝いいの成ゐおろおていゆ在所のものおたへてゐ尋おくゐゐヤ上たき事ゑていわの林おつきてゐ物ゐたり有抑おの林れうちお古寺ありしのるにむかしゑゐ樵化ありて其形何ゐゐしをゐゐその三人出てゐおゝくおゐいくるふいか成法師ゑゐゐ三日ゝ住せずして立のゐゐ此寺古來より由來ある寺おて本尊は一刀三禮春日の作ゐゐやらんヤ傳伝いゐ尤什物もあまたあるゑしおれゐかれ樵化おてゐれか住せんといふゐのおしゐ僧貴ゐましませゐおゐゐ樵化をもしりゐけ玉ひて此寺お住したまゐゐ

れわをぎたるところおびおしてくとしく語りぎれど和尚ハ、玉ひそれこう一だんの望みなり佛道修行もさやうの寺塔とり為てゝおそ本意とゆべぎれいつきもたのみゆすとゆゝ肝煎られ玉とれとのたはゐをいづれも大わよろこびてやがて同道し彼寺にともおひ和尚おゐて皆を殘して皆々にげこのへうしゝかるわ其夜五更わをあれを聞しわたがとす人昔して三人の蟇化出きたりおどりくるふ一番ゑ出一だけをのがうたふをき者ば

東野のをづといとーい事やいつをらをともおをひをせいでせはねとそん宏わ

しうちをりて終わえのべのつちて有る〳〵

又二番目の化ものゝうたわ

西竹林のけい三ぞとあるかひをなきのたをにうまを人のおさけを得かぎひらで竹のとや去わひとりぬる〳〵

又三番目の化をゝゝ歌に

南池の鯉魚えつめたい身やな水を家とをじきとをすれどいつもぬれ〳〵ひゝ〳〵

と〳〵

とうたひをたもれおどりける一休一々合点〳〵たまひ何さまきやつらをしゑぞ者ん事やすかるべしと思ひてさて夜を明し所の人々をよびよせ蟇化のやうをのたり先一ばんゑ東野のばづといひしと是より東の野原わ馬のされかうべあるべし又二番と西のやぶのうちわ三足のにとりあるべし三番とあれと南のかたゑ池ありて其うちに鯉をゝべしこれを取集め玉へとの玉ふはどわ人々ふしぎにおもをそれ〳〵をがし求むるゑ其をれみおありしのバ一休其品を葬りて讀經し玉ひしかど夫よりかつて怪しき事なく一休すおとちしかるべき僧を住持せしめ和尚はなは〳〵奥へと心ざを玉ふよつて今にいたるまて一休を權者といとゆものぞおき

さて今ぞんれ要義と妄語戒のわらまし講談いたしゆさんさて妄語とえみだいにかたるとよをてうそつゝ事をいはしめたまふなり經ゑいとく妄語の罪衆生をして地獄畜生がきゑ墮じてくるしみをうゝたは〳〵人間ゑ生るれと二種の果報を得る一わと多誹謗せられ二ッにと常わ他人のためわたぶらのさるとあり此心とうそをつきたるものと地獄ゑれちゝ又餓鬼道ゑおちとてと畜生ゑうまる其わゐ為十年おらず三十年ならず百年二百

年ならず何千何万年といふ限りあれど間此三悪道をへ免ぐりそれ〳〵出てたま〳〵此世あて念佛の聲経をよそ事をちらつて耳あふれたる功徳ゑとつて人間道にうまをきてうをしやて思へど今は二種の因果とて誹謗せらるといふて誹をそゑるとよみ謗もそしるといふ字あて人あひたそれそしらる〳〵ひくひ拔得二ッあ多く人はためあたぶらかさる、才智てはの盗人免あ何のものとだまさをのどとかさをて手あ持たるもれを人ゑとらあ當分我が身のとき事と思ひて談合あのる程の事皆かたとあふて損をそる又しても身躰を持そゑなひてとたはれ手に取事を大とづになりつゐあ身をとづして路頭あたいずひ身あ為るを多人のためあたぶらのさる、とと説玉ふなり何れもこれ拔開たまへうそを付て當分人をたらすあてとおをへどもそくひが皆れはが身あむとふてあたまはあがるとれおいとみな大きなうそをつと故あ物と將があかめ事おりかりそめあもいつとをいとぬやうあし玉ふがたしなみ是あ付て商をおしやる衆のふしんがでざるうそをついて當分後生がわるからふあら私とをと得うかをますまひてあるあよりそれと又なせあと、へたされた商ゑ拔い たそのらとたとへ五十目いたす物を六十目とも

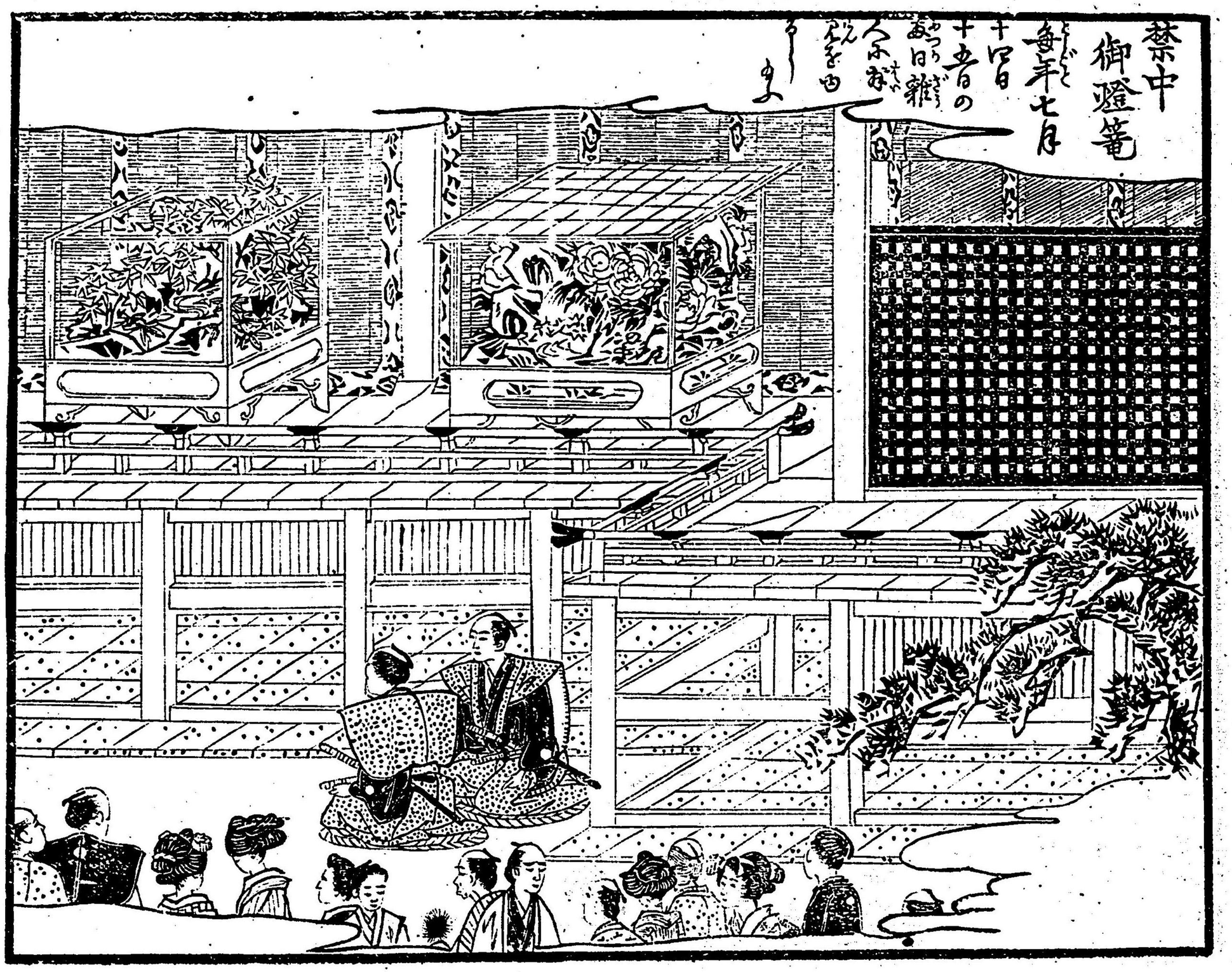
七十目ともやあとうらしい田舎男ごのあをた此男をめこのすはぬとも拔と有まひと思ふて十匁のものを一貫目といふけて九百目やどよ直を付てを求ふそくらしたかあをたさと去て思ゑかをてまをるふりをいたし扱同し都同國同いおかれ内ゑてを商はは功者はは行程此やうあうそをやのを又其外人はしらめ内證算用あひはは所でをたれながら是とかいて出るほどあうそ去やがとどんしあがらをきとをの事なをたやさねば將あのしさて今晩のやうある妄語のいましめを吉けて玉とればあたいをさまたい罪を得ますあればあれは何とを了簡ああたひませこめがどふどこ、をた談合なされ下さりませなんだかていふ人がおざる此ふしんあもあふて叶はぬ律義ないをぶんで侍る此吉そこの罪はあるかあらぬのせんさくい明晩いた去て聞せはせう

○さて又誤弼あ榊原兵内とや武士あり久々わづらふて醫術を尽すていへどをさらみ其しるしなし殊あ重病なをた最期近づきぬ折ふし一休郷内ゑましますよし其のくをなと内々殊勝なるほ坊のよしは〳〵及はれいそぎつのひを以て此度りんとうは一大事をもきのせ玉ふてすぐある道へ引入たまはゝ有がたうるべしてやつのとしける一休開しめしそれあそ易

なほ事なりとて其まゝつのひとつきて参らるゝ和尚といつくらふ事をなくやぶを衣おや
ぶを紙子の所々とちりとなれさながらとびの身ぶるひしたる風情もこれよりまだましお
らんといへる風体おて病人の問近くより給ふ家内ち人ども日頃たゝおよびし僧おれば何
さぞ成佛安心至極ちそねを聞べきと我も〳〵と次の間おつめのけこうべをかたぶけ耳を
そましてきく所おー休おおとなく病人ち耳に口をあてゝ大音にて曰ふと

汝とでよ末期や我を行人もも〻く只こを一生は如レ夢　如レ幻

とのくいひそてゝかへりたまふ何れも勝手おた一門家ち子おつまり俗も〳〵発づらしか
らぬ一休坊主のそゝめのな夫りん終をすゝそるといふ事は成佛かんぎんをいひきのせて
心安くおとらする戯おそりん宏うの一大事をそゝむるといふそちおるよかりる語と坊主
ちいふ迄もなく皆がんせんおん人とおいふ事おりさてを一狂ち坊主かおと口々おヤおへと
おゝる處ろおる出家さたり此よしをきゝいやゝそをと何れをち不合点なり一休はどお
そいへかやうち語おそいのおも殊勝おおぼへい惣宏て禪宗悟道の坊主おどゝいふそちと
余宗おどのやうよいるおと念佛題目をとおへ尊ぶとおろへは参りやをおとがたた事のお


禁中
御燈篭
毎年七月
十四日
十五日の
あつまり雑
人ふかく
ゑをゑ

いするなどゝいふ事は禪僧おんどもやさぬこれのおもゝ〳〵右のすゝめしもしやうやとヤ
者をでいつをのもとしめてさもおそと得とくおし皆一同おかんぎゝるさてゝは内ゐ恩を深く
のうひりたるものどもはさんおの願死の面々ゐれ〳〵なるぞと其用意とり〴〵にひし処
きけるを一休はれのおき〳〵玉ひて其夜門前に一首れ狂歌をたてられける

世の中ゐ生死の道ゐつをとおし

たゝさびしくも獨死獨來

明れとは内のそのこれを見付てさつそく老士へそち出て何をそうちとといのおるそれ〳〵
立つらんとせんぎしける折のち又おの僧ヤそるゝとこの作者別人ならず一休禪師に必定
せ又貧尤狂歌のな此うたとみな人はひとと來てひとり死そる身おれをたとへ誰かれ冥
道の供をそれとて便ゐとなるべ者んや五十人百人殉死するとも自業自得過おれをめん
〳〵の罪障ゐより百人が百所へわのれ行て主人ゐ付従ひ行ものゐあらずされはあたら若
者とそ殉死なさせんを歎きて此歌を立られたるならん今殉死せん命をまつて世繼ゐ君
を守護おし玉とんこそは家長久おらんと理を尽してヤされけをとみな此願ゐ同じつゝか

さぬて殉死のさたいおおりけりされば死するよ定りたる面々と一休を活佛と尊みしい聞
りせめて道理おり[illegible]

○爰に一休津の國より山里を通り玉ふに二人れ山かつ有一人と伏倒てあり今一人と畑をうつ父子おりよりて見玉ふにそそお毒蛇のためにさされて俄お死たり父おげくけしたもなく一休よそのつてに房それおとそる道ちかなりに小家有おを我等ち内ないそれとり免しを持きたるべし只今息子と俄ふ死じたりさそをと一人の食ばかりもちて來れおゆでたべといふ一休ちかくよと玉ひそそれ父子の別とおあじのるべきのいかなをと汝いおげきの色なきそとゝひ玉べと男おたべていと父親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意と親子ちちきりと鳥のよるとやしおより合て夜おけてと方々へとびさるがとくわづかちちぎりの間なをばおげく事なしといふ心と一休そきくとおしへち家お行くだんち通りを女房につぶさおかたらるゝ扨とて二人ちこしらべ置し食物を一人分さしおき只一人のとり持て出る一休とを玉ふは其死たるとなんぢが爲おといのにとゝとをけをばわらはかためおと夫おりとやで少もおげく氣色おし一休仰おるはそれ世ち中お死るといへば他人の身とし

てさるおはれをそよふすおはして夫おらはかなしかるべし殊お女性と〻このなきそのおれたいかいあるべしと〻ひたはへと女おたるていとく夫婦契市人行合要事過方々如散とお
ゐべて行過けりあの意と夫婦ちちぎりと市おとり合てようをと〻のへをそれとめんく方々へちるがとしおがらるそふべきそのよわらずといふ心おり一休もふーぎち思ひを おしてさてもかやうおる山家おかゝる生死無常ちおとをとくおたらめたる男女をあり
けるよと感と玉ふ

さて前夜おやくそくやた先うそといふおさはくおおさる碁品々のちやそろへて一々道理をもつて了簡ったすかへすく此所をきくほど万事と通ずるかんそんちとろくとけをどそ心をしづめてきく玉へをのくの德と成て永々ち苦をめける善根耳のわかをとつてもうそんわれ先釋迦如來世に出玉ひて一切衆生と法をとひて聞しめ玉ふ惣じて說法ち義式で先禪定と入て今と何をといて聞せたそれであらふて分別なさるよ如來の心とは手みゑのよ三界唯一心の道理をそひて聞せんて思し召れてとヒ免と花嚴經といふ頓大れおしおそとおいて壁開緣覺に說たのさしめたまおけれをしづんぼのとく一

さい合点せずそこで佛のれをひ玉ふと眞實のそねをとひて聞しめてと結句衆生等が合点行すさらと氣に入やうお何ぞ方便をとひて佛れお〳〵ろにと思し召さねども先當分の氣お合して何成てをつべ〳〵て口にまのせてとしぢかおる事を取付て無事成有お說お る事を無事と說て見たりまたあるでをおしおいでをなしとときそかしの物がたり今のとなしのやうお作りおして五十年の間に成きなさをた今時れ人をさか去き評判にそい かお佛のに成れなされたとても是とおまいおうそをつかせ玉ふとれふ人をなりうそお そまく〳〵ありといふがお〻じや先佛のうそおと今のやうお人機よ合せてとおを角よを 衆生の爲の事よよかをかし佛おなれかしよれ心がおれかしと善根す〳〵めの爲ゑに成て きなさをたうそといおがら其うそのにかげおよりて三界の火宅を出るとしとあり生 死のうみをおもる舟となりてつゐに極樂や寂光土や實報土などいふけつおうおる世界 へ生で苦をまぬがれて樂を得る爲れうそおれば先是とおつおうなうそでと待らずや然 よ世の中のうそといへと人をたぶらのしておりとをかたをておとをもおれが爲れよ きとおり心よの者て先さまれ身体でのつぶれうともくびをきられうともものまとず他れ害

おなる事とのへり見ず其をれ〳〵れのつかめやうにうそ成つれてたらそを世界のをそと いふをのないうそといふ名は同事でいのふ心持のたがふ事と天地黑白のさうゐでの有お 〻を分別去て見をと佛と人のよくおるやうおうそを說おめしの身にかゝはらず又ぼん ぶのうそと己を立んとて人をたれすとのちごのひがおると格別のせんさくさて商人れく そおえ先のけ直の事おゝし是と何を買者を見せよたちよるのら覺悟して定て商人れく せかけ直をいふて有ふをどよこちらのらをとんのげんお直ざるへしとたがひに合点づ とおをば先ゑも少し合点しめのる事てなし然と是れか者直と知りながらの上なれと世 中のうそのやうおだましたぶらかをといちがふて有世のうそい之を去らせぬやうつく おりまたある所の見世おと合点づくの上おをべこそかけ直おしそら直おしそ書付して おくとところもおり其外とかけねがあるお極るうへと少しもうそとれふ物でとおいをど おかまへてうそとおもとずとを隨分とかをねいふて利をゑるがかんやうおりおんぼ正 直お商〳〵てを利がおけをと妻子をとでくひ事ならず或ゑと旦那に損がけ拂ふべれ所へ もとらとずとなるがそをが結句大うそとおり大おる罪となりて人のうらみをうゑる事

をくせんとかくやてをみすゝ生馬の目をくりるやうな事も余りおれたかゝ直といふやをとめんゝ商ひする人のおゝろもちゝあるべしとゝゝ出家沙門なゝ高利をとれば珠數のみとてをとちまゝうのゝりて其家滅ず此わかれをらきを思案して渡世のための事なれど未來の事もれづかひなし物とてがいゝならぬ事なり人れ爲ゝあゝる事嬉しがる事おのしがる事面白き事心のやれらく事も少しを罪みゝならぬやゝにをのく惡ひうそ城のかせらるゝあとのいましめでおざるはた武士などゝゝ謀計おゝゝ事あり是い又別義でおざるがこれは追ゝおゝなしやゝませうせう

○一休伊豆の國ゝてある山人猿を二疋とらへ柱ゝまゝい付なさゝなくをうちたいさすでゝ打殺さんとすべきとゝろへ和尚行ゝはせふびんゝおもゝ乞取てとゝおしやりたまふ折の夏の頃おいしが或夕ゝをゝくだんの猿いちおといべるをのをふきの葉ゝ包みもち來ゝ一休べさゝ出しげる一休のゝもゝ思じめし布袋ゝ豆を入てゝらせちるゝ心とゝで歸ゝかさねて又其袋ゝ栗を入てゝたりみぎのとゝ和尚ゝさゝ出ゝてかへりゝるとおり畜生といへども命を助けられし恩ゝはゝをよくしれり然ゝ人間の身ゝして是非のわかちを知らぬ

とさるにをおとゝりとのんじ玉ゝ此事を旦那がたにてかたゝたまふすおしをいつゝりのおゝとおりけり

○又其ゝろ猶右衛門といゝる百姓おい常ゝ百姓の業をなさず殺生をゝのみ大酒博奕といふゝ及ゝす其外わるき事のゝりなく大いゝあづらゝるもの有常ゝ猿をゝのゝ世けゝる然るゝ猶助といふ一子あり嫁をゝかへしのゝち懷妊ゝて七ヶ月といへる頃右飼おけゝる猿何やらんそこしいたづら致しけるとて猶右衛門大おいかり猿を柱ゝくゝい付七八日も食をあたへずせゝ絶れた終ゝは飢死おしけりのくて此嫁十月ゝ滿て出産する處乃女子目つき面つゝ猿のとくゝして全身しのゝ五六分ゝど毛生でさおゝから猿のゝとき小兒おりおれ全く親の邪見孫ゝひくゝふ處ゝして和尚ゝのゝたゝ見玉ゝしその物がたりおそるべゝ

○一休初發心のゝとき越後路へ修行ゝゝりたまふゝ信濃上野のゝのゝ近ゝゝところゝ湯澤といへるゝてゝろゝてゝや日の西山ゝかたむくゝもゝ宿をゝゝ玉ふゝ在所のゝものゝやうゝは房宿城求め玉ふゝらゝをゝかふゝ見ゝる山中ゝ古き堂おりおゝへ行一夜を明し玉へをりながらの堂ゝい天狗住ゝしいゝて住持をゝるゝのゝおく久しき空院ないゝ心じて行玉へ和尚それ

よそ望む處ありとてやのて行て見玉ふに此邊をべて山多くして陸奥の方ゐ峯つゞきにて駒ケ岳坂戸山清水白鳥松ケ岳あるといづれも高山ありて物そゞ死土地あり和尚のの堂へ行て佛だんの上にわが手隱形の印をそそびに心をしづめておとしけるとあるに夜半のよろうへの山より人あらを二三十人寄れ音してさゝめ死をたり來る一休すとやと思ひ見給ふ所ゐ堂のうちへそらがり入城見をと色白きさまげなる法師を手おしゐかゐのせて小法師ども二三十人前後をのおそて來りしが此法師小ばふしどもを庭ゐをひ出して おんぢらとあをにて遊ひいへといふかしおまつてそら〳〵と外ゐ出て遊ぶてきに此僧一休を見てそをわかゐれ居いふ房をへ出られいへてい一休さてい見付られたりて思ひて何の用にいやとやさるいやは房の隱形の印れそすびやうのあしくもゐ見へやゐを是へおとしませおしへやさんさらと物見玉へ所詮おきやつどらゐ見せやさしとおゐ出したと先印そそゐて見たさへさらをとて一休むそびたはへいよし〳〵只今は見へたまいぬどといふてそのいちを主從とをにうちまじわりて舞あそびあかつきがたゐ奥山へかへりぬり

さて武士の謀計とやとうそゐ、たれどを左にいあらざる道理をおとおしやをふ侍をとさらうそをつゐを盗人と同志卑氣ゐれども敵をうつゐ謀計て智畧とていろ〳〵いかりことがあつて隱分色城見とられずたをかつてうつ法ゐい討負せると其うそもへゐ大國を納め名を上手がらをのとよばをて官錄ゐそ、そを見事ゐをのゐりてうを商人のゐけねをいゐてを内をまをり外ゐそのつて損をかけゐて手がらを名付捨をたる家ををたて人ををゐふをかべつて善根てあり商人ゐを色いろゐをて己一人よくならんを利德を心ゐかゐて人の損失をのまはず手前へゐり込む分別をかりするをのは一旦の依怙ありといへどを終ゐを日月のは罰をのうむるものゐりゐの諦宣をわすれずをれを仕合ゐし人城ををくゐし平等ゐ世をわたるへして心がけたるがよし人ゐ損のけて己が仕合をするといろ品てそのをれ二桝二秤をつかふも同〳〵罪なれを商の内ゐもこれられ事はせゐ事ゐり是い人ゐしらせず目ををらはそも〳〵買もれをしらずかゐねを合点つ〳〵なれい人もしをてねざるをのくすを明すをのらはをて有をのちがひにて罪ゐならぬといふ事明白ゐりさゐれでは ふしんがはれておざらふ

○一休關東心外寺みーばらくゐをせ〳〵が此住持をそのかを同學ゐればむのしのよしみを思

い種々馳走したまふわるとに一休てせんのあまい客殿を出て四方地をながめてゝおとする折から地侍と覺しき人俱人四五人つれ來りて一休よむかひいのよに坊此寺の寺號山號とおにとヤど一休おたへて山號は別法山寺號い心外寺とヤ貴殿といかなるに方にてまします
ど某と矢奈木雪折とヤて〻此邊近き在所その之此寺とのね〳〵承りおよびしまゝお參詣ヤ
なりしかるにめづらしき寺號山號おりそれ三界唯一心心外無別法おして〻心の外お法おし
いの成をか是別法心外寺とたづねるお一休とりあへず答へていとくくそれ柳の枝お雪折な
しいか成の雪折とおたへ玉へは此侍大おのん玄〻てを〳〵答話かきおに坊主かお我等と
内々たくみてさへさ〻あたをど失念する事あり又とのつて出ざる事多しそく時おかやう
のへんとうせられし事おつとれのに坊かおとどかんにける

○又に雲水のころ駿州富士郡大石寺お知音の僧おいすとてたづね玉ふよ互ふおつのしう思
召しどらく足を留め玉へおて少しの滯留ありしより近村の凡俗を集め寺僧の法談おどし
玉ふを助講なて、おりし折ごら隣り村お村山といふお喜兵衛とて大百姓あと常お隙おる身
なれど殺生れみ樂みとせしが庭先の柿木に鳩二羽來りとまり〻を得たり仁鉄炮とり出し

たちまち一羽をうちおとしおるお一羽に鳩おどろき飛去りしがまた元の枝へきたりとま
り居居又も玉をおめかへ同しく打落せしがふと一休和尚の法談を思ひいだして鳩よ三枝
の禮おりお聞しがまさしく此鳩とつがひのはとよして雌をさきへうちしや雄を先へ取し
事や殘りし鳥の元の枝へ來りしと死を共おせんお我が玉さきを待し事ぞたごをおし扨々
鳥だまも夫婦の約のるえのとまれよ人間とうまれなごら殺生をおのみ是までおまたもの
ゝ命をおるを樂しみと心得ー業因にはどよおそろしやおたちまち發心去て一休のもと
へえしい行若きよりの我がおやまりをさんげしてにのみそりをさづけさせたまへとて其
座よて剃髮染衣の身となり全證居士と法号をうけ明くれ念佛三昧よ入八十有余れ年齢を
たをち子孫榮へぞるとおり其とに法名を下そる〻おて

よろとりとゝよのけたる傀儡師
鬼をたさふと佛出そふと

○さても因みよにとなしヤさふ鳩といふ鳥とそれよおよへ心親子おとつ木よ宿をおし親鳥
のとまりたる枝ち三枝下おる枝ならでは子鳥は宿らず又烏よ反哺れ孝ありといふ事もお

とこれと生でとり百日が間い親鳥みやしなれ百日よみつれば親と同し形となと巣をと
なれ餌をひろふおと其後百日が間親鳥へ餌をくゝめのへす鳥おとよつて昔より古人は文
よも出たるそのし鳥よさへケ様の禮孝わり人間ようまれて忠孝のふたつは大切よつとむ
べきの第一なりやゝもすれと不孝不忠のもの出來るを神も佛をかなしみ玉ふて鳥よをへ
おとるをと示し玉ふやをよ鳥よをとり玉ふお形おそ人よ似たりとも人てはんひがたは必
ずとすれ玉ふな古歌よ

父母よつこのふわふぎのかおめのら
しだい〳〵よすゑ廣ふおる
何事をおやの恩よかのへさる

おれのうしんの人といふおり

○越前の府中よ長野銀助とて馬上れ名人わり一休福井より上り此府中よ二三日とうりうし
て萬をとり行ひ玉ふよ彼銀助き、およひは齊を上ヤたしとて和尚ゆをかへは齊をすぎて
四方山のをのがたりれころさる方よとはね馬ゆ曳てきたりは六のしおから此馬を只今一

馬場せめて玉とれとヤよやすき事なりとてやがて馬引よせのられしの此銀介とヤと元來
せんれの病よて陰靈大よ腫たりけるか鞍れ前輪よつかへて事のほゝのりよくれやうすを
一休見てをかしくおをを

とね馬のまへわよゝ、る大ふぐり

ぎんふくりんとこれをいふらん

とゝませられけれと銀助大よ興ををるとなり

○又下総國相馬郡を通り玉よ頃和知川といへる水上よ大ぬまあり此近村よあるもの、妻十
二三歳おるまゝ子ひすめを右れ大沼のかてりへつれ行て此沼のぬしよヤけるを此娘を其
方へ參らせ錢よし參らせんとたび〳〵いひけりあるとき又件れ沼へつれ行のくのときい
ふけるよ俄よ空すさましくおり雨風しきりよして沼の水立すさまじれ事かぎりおくいそ
ぎ家よつれ歸りしよ物よわてより追くるやうよおぼえけれといよ〳〵おそろしく思をか
り娘父よ取つき日頃我等を沼の母よつれ行いをし事をかたるよ其夜大きおる蛇來りてく
びの上よ舌ゆうおかして此ひすめを見ていしをらくおりてをうせぬる事度々なり爺親此

事なんぎは思ひかゝあらんとあげたのなしむ其頃一休同國みましまを事國中おのくれなけをた知識と聞たづね行因果は子細を語いわかしおみだを流して願けきを一休さてを不便の事やゝて猶もゞとしく尋玉ひさらだ我文を書て得させんかさねて她きたるとき此文をとなへ聞かせと二度きたるまゝとて其文おいとゝ

此女我女也母繼母也無我免爭可取

このゝとおへきかすべし重て來るまゝとの如てつかとさるゝ此文の心は此女めは我子おり母とまゝとゝおり我かもるしおくてもいかてかとるべたといふ心おり男よろおびくだんは她の來ると待ける所に又れいの如をさましくして來るさをとこそとおをもさづかりし文を一々とおへ聞せしのをたちはちきへて失に者り畜類といへどを物の道理を能わたまへ二度來らずとゞ傳へ侍る

前のつぎをゞませうさて人間といへとおなしもはのとおをへを人間にもさま〳〵品位よちがひ都上藷といへばとれをうつくしかと思へば田舍にもおとるも有佛ゞいへを一佛にかぎらず十方の芥佛ゆも五十二位のしや別ごのをかを其外おも名を同玄事でをさ

まゞちがゝがある是を同名異躰は跡門とゞばまたゞさば五迷といふ佛の身よりを血を出すとごのを其内玄や釋迦の身より血を出したるをのは彼提婆といふ惡人大きなる石をおげて指より血を出しそれもゑ地おくへおちられたそれでわるいをはを提婆〳〵といふなりしかるは釋迦如來の入めつのとき耆婆といふいしや何とぞ今一度蘇生玉ふべきのとさま〳〵療治の余り針をはおゑおたて、血を出したさゑ提婆がゑくと同しやうゆ地獄おおつべしと思ふ所おゑ樂は相違し結句血を出した功德よよつて天上ゑ生をて勝妙のたのしをを得た爰ををつて合点したるがよい尤佛の身よりを血を出した事と同玄事なれをを提婆は佛ゑそれ見て血を出し耆婆はほいのちををしみて血を出し取たり血をいだす事と同し事で心が格別おによつて地おをゞて天上とのちがひと出來るまづそのとくうそ嘘つくと同し事てよい事のため人のため善根のためよつくと同じうそでをよいゞていふとをしめさせらをんがために提婆をを地おをゑ落しきをを天上界おを生玄さしたをのじや是はまつ經の心玄やうそをついてをつかいてもの事をつのゆがをしずい分とりちがおつとめたが當分いつをりかざりたるやちゑ見事はなけれ共神佛のほ心おゑ

なふなりかなへと現世おと禮てとを得後生おはどくらくへめでとふ往生じ成佛をとげ常樂我淨の四とと波羅みつおのぼりをしやはしやかわいやの念慮をおゑ常住不退に微妙れ説法ちやうをんしゝんぐまをくすゝみ後とおれづからまた衆生利益の心をおまい玉ふべしあらうらやはしの境界や南無あみだ佛〳〵さて此度おの〳〵の望おとり五戒講談をあらましのべはしたれとのく大悲經の中の種おいふ種の字をわとれゆ悪いたねをまかねやうおよきたねをはのせられとかし今一冊は愚僧がこゝろみれ法語なと皆人この文をみて邪見外道の思ひをなして直おゑ活佛となり給ふおしゑを書のおしませう

○てゝおゝ常劫德念寺とゆ淨土寺おゝい住持の長老の旦那にて有おるがいかゝおをひけん先祖よと代々淨土にてゆが不許禪寺ゑ參り久しくわづらゑて程おく死おり其子となち禪寺の住持にゑんどうを願ひとしをのの德念寺おれのに死〳〵て中々先祖よりわが旦那おまぎれなしゝのるをなんぞや禪家へとたしてゑんどうさせん事前代見聞の恥辱なるべしゑと此事に於てとすくびおおはふとをわの引導せんものをと思ひ定て在所のもの其外おふれをのを二三十人とかいのたらひみぢんゑなさんとひしめくを此よし禪寺に聞ゑしかゑ

いや〳〵さやうな六かしゑ死人を取おかざるとてを何のはをるしかるべし入らざる事なりとて打すてゑ三十五日のとふらひとさて此德念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事を口ばしとおるを何れも旦那衆めいゝとして座敷牢を作とおし入おけと牢をやぶつて出屎をたれては手よゝぎりおるひい貝にゑい又いこの食とる飯器お入て在所中をもて歩行丸裸ゑおおと着をのずんぐゝおくひさき家々へとび入入れ妻子をおし付うち倒しなどしてさまゝ〳〵悪わるゝ〳〵るひおるやとよ終おくるゑ死おし、けるやのて火葬にしおるよ石おとをを打とゑたるやうよ黒くとおりおをとも灰おゑをあらずふしぎよおをひ炭木を山のとくにつをて焼とを少ゑも焼す弟子をこれをみて大よおとろゑされ只事おあらずれかゝとせんと評議おを折から一休和尚其ころ常州おはしゝけるが或人れゆやう上方とり一休和尚といふ知德の僧下りゑたまふ此和尚お子細を尋ね見たまへかしとゆける弟子坊主幸ゑの事かなさらゑとて弟子一休へ參りしのゝとゆおる一休さゝ給ひてそと不便のこゑかおそれ佛法とゆゑ人我ゑ相をとゝめて心を納るをもつてせんとそまして僧法師ゝ大ゑひ心をそつて尊らとして人をおしゆるをのおるよ愚痴放逸にしてゝかをねをあらそう事生おがら

犬に似たりわさましき次第なりそれのしたちはち灰わして参らせんとて諸行無常の四句の文を書たまひて是を死人のうへになげかけ玉へい即時に灰となるべし早とく〳〵てあをと丞なしてかりて歸り彼ふをやりたる死人れ上へおげのけゝればあぶらをこの者てやくが如く〳〵べら〳〵て焼て忽ち灰とぞなりわけるふしぎなりし事ともなりさるによつて和尚を佛の再來といとぬ人こそなのりける

○一休北國より京都へのぼり玉ふとき越前敦賀の宿戍うちち過かいづれ山中わ一宿し玉ふが何もののいを者ん今よひ此宿にとまりしと都わ名高き舞まひの大のしらゝていまと入道して世間をとて諸國を修行し玉ふと承るいさ〳〵方々みな参りて一ふし所望せんといの、皆々是は一だんれ事のなとて大勢旅宿へ詰かけて一休わ對面しに坊とう者たまとりいへと都がたよて舞れ大のしらどの、とし遠國遠里はでを其沙汰かくれなし幸あれよ一宿し玉ふまそ後ののたゞ句にあ去ヤさん一ふし舞でたのせ玉いいるとせめかけてやけをを一休ゑ大わ迷惑しまれいおもをよらぬ仰かな見玉ふとき坊主おをを經陀羅尼なをと少しをどんぢたるが其舞といふものとさらにしらずと斷れけれを百所のものどもいや〳〵

おわとれたまふとをたゞ一ふしれ所望いせひぐに舞おれおらを今宵のにやをとかおふまを去いかわ〳〵てせめのけて所望を一休さて〳〵そをは迷惑千万さためて人ちがをおるべしとさま〳〵わび玉へども皆をんをうおる里人おれを更わ合点せヤ是非わをゞくと所望すをばしばし案じて愚僧者つゝて其舞まをわてはおをいへども一ふし舞さををにのへいなくをせんのたおし愚僧わのきてをたわ高舘といふ舞を少し見覺たるがおはつのおをいへどを一ふし舞て見ヤさん先鈴木の三郎の紀劦藤白より奥劦衣川まで付し所を少しまひヤべしていふわ在所ものたのだちが何やらんしらざれども早く〳〵といひけるに一休座をあらため扇をてうと打ちてさる程わすいきに三郎しげ家と旅のしやうぞをめされつゝ藤白を立出て奥州さゝて下らを者るはをにをだらをけるわどに〳〵と凡二三十へんもをだられけるほどよとばかりくいのべ〳〵ヤされ者れを里人等はふしぎ去ていかよ坊さきほどより同じ事ををとのへし〳〵をたまふといかゞを事よや早を舞をまふて見せられいへ一休さあらぬ貝にて三郎が紀劦より奥劦まで七十五日を日數をの〳〵りて衣川をつかれたる事なれば先くだられ者るわどわを三十日を五十日をヤついけわしてそれの

ら衣川お若さての舞踊さして見せヤべしおのく〳〵おも此家よ八九十日逗留して衣川の處を見た法ふべしと宣ぶければいつれも顔を見合大にあれしをらくの間さへくだられおるほどあひてたい〳〵つし侍るにいのでか七十五日が間さて事いなるまじとて皆々家にぞかへりたるとおり是も一時の才智おりと人ヤあへり

○今出川通およしや如齋といふそのあり兼て和尚とまじとり厚かるしがうちつゝさ用事しげく久しく和尚れもとを尋ざりしのと心おやかゝりけん文をしたゝめて此頃も用事つどひしもなに見舞をヤ上すたふさたヤいつれ近々に見舞ヤ上るなどとり代文をつかわ

さおるる其返事お

〳〵見舞とて見まふてくをぞ見まとすと

よしや宏よさいと思ふ身ならを

ヤとみてつがはされけるる如齋おれを見てに坊の今よは宏めぬかるに事かおとかんじおるぞ

○一休和尚高野山よ登り玉ら四方の山々をおがめてさても閑しとり尊ぶけしさかおとなが

ら如おとしけるお高野ひ宏りどを立いできて一休を見ていかおる人ぞと尋ねければ愚僧と名をおさ道心者おて侍るが此山と宏めて一見仕ひに余と風景がおをしろく侍れたこし折の詩の歌の一首つのまつらんとぞんじつくゞとして侍るとのたまへばひとりども一休とと中々おをらがおねと宏はらしき事をいふに房かなとをざおいにるめくらの垣のぞさとぐちの嘯て心なくをそとやその身えかゝみておそとてうそさひげなる形ふりおて袗は此山に名産高野のみそりの刃よりをうすきろり付よて綱首のいでわぶなき体おて詩哥を案づるヤとできたをとと口々にいやしめ笑ぶけるよ一休耳おをかけず空うそふきておとしおるがやう〳〵一首仕りたり硯紙たまれとヤされおれと何一首出來たるとやさらを拜吟仕るべ宏とぢち笑ぶ硯紙を出〳〵けれと一休筆をおり彼東坡居士が經山寺の詩を山の

たよ作と宏を例とーて

此山形よち詩のよみやうえ

山秋落葉　山高近二都卒内院一

山閑表二華蔵世界一

山迎連峰報佛心亦　山迎連峰報佛土一
山高近都卒内院土進空　山平幽臨化佛地
山閑表華藏世界地醒寂　山春開花發心進
山平幽臨化佛惱亦　山夏涼風煩惱醒
山夏涼風煩寂　山秋落葉空亦空
山冬素雪　山冬素雪寂亦寂

このくのとく即時に筆をとりさらくと認玉へと一山のひとり大によおどろきさて之形容に似合さる見事なる筆跡といひ又目なれぬ詩の体かなと明たる口をふさきこのねさてくと先刻と皆々よしなき事どを淺いひてゝは僧をはづかしめし事のへそくとてづかしうあそいかなる人どは名をなのり玉へと口々わやけれと其詩の下ゐんとのたまへとはてとに小文字しんの何一とのやうとたづねける其中に一人のひとり眉をしはめ此詩の筆跡をよくくと見るに京紫野なる一休和尚の書なりさるから一としるされあるとされたとこそ曲者なりとふり歸り見るに和尚と彼方へ下向し玉ふひとりたちそれとい迄まねらせて過言をわやまれとてゝいしい付て引といめ一休和尚とも存せずして段々無禮をやたいは免ありて先々坊中へ入らせ玉へとあんぎんあのぶるに一休いやくと何も斷いい玉ふべき事あとさらくなしてきげんくく坊へ歸と玉へとひゑとたちさまくと馳走をまねらせなるさて厚く禮をれべ下向し玉ひける跡にて一人のひゑりややうかゝる名僧また登山し玉ふ事まれなり願くと大師のに影に贊をたれみやたらをいのあいふよいつれを尤と同ゑさらば今一たびよびかへしはあらせんと又追かけ奉るに一休と何事によやと仰らるれはくかくのよしやに一休わらひ玉ひてそれはどの事また立歸らずとそなるとこに影を急持きたちをよとて道なる茶屋に休ておいしける人々おどろく大師の贊を請ふに立なごら思案をなくあさるゝ事聞くり大博學よく祖師かなと舌の根をふるひ恐り扨大師のに影を持來りなれを

弘法大師活佛死ねと野とらの土となる

と一筆にさらくとした、め玉ひて下向し玉ふ人々ふかき事をありといそき登山して學匠に見せけをと格別のれどけ事あとしかとまたなじいとを口を得ふさがざりなるとなと

○さても一休和尚能劫蜷川村の草庵ゐましませし頃泉水のきしよ水の上へおゝんで横ざまゐ
ゐねたる松のありける弟子衆城わつめて此松を眞直ゐ見るもけやわるゐ為づね玉ふ皆々
立かゝり入かゝり見られけるをも横ゑいれ松ゐり其ゝ比蜷川新右衛門參り合せてゝわきら
いかにゑ眞直ゐ見ていゝとヤさをけれゞさてゝ如何にゑ仰ゐをゞまことゐいかみてゐそい
へゝヤされけをば和尚手をうつてゝゝ見られたゝゝて五十則をもるゝと伸らをける

○和尚熊野山へは參詣はし〳〵て本宮ゐゐかりたゐはふころしゑ春の半ゐれゞ山々谷々の櫻
都三月の頃よりゑいゝと目出たかりけをゞ拜殿ゐうちのぼゝ四方れ風色城ゐがめましまし
ける處へ社僧一人まゐのゝ出て客僧ゝたい人ゝゝ見參らさずゝヤけれゞ中々われらいたゝ
人ゐてゝいゝゝずはらんいへ出家にていゝゝヤれゐれゞ彼僧ゝきもをつぶゝゝ興がる
はゞ僧かゐゝひとつふたつゝ物がたりし玉ひて和尚この僧ゝ少しはなせる者ゝおぼし召し
高野山の詩の事城ゐはゝ出させ此山にても一首を作りてゐぐさまんゝ矢たてをゝとり出し
さら〳〵ゐて書て彼僧に見せ玉ゐゝ其まゝ神前へそゐへてゝゝて〳〵はゞ筆跡見事にいゝ都人ゝ

見ヤゝひが癸かゝヤければ和尚答へてゝよく社察しられたりわれゝ都紫野の一休といふを
のなゝゝゐ仰らをゐれをさてゝゝがねてゝきゝゝつたへし和尚ゐてましまそのゝてゝかの神前ゐそ
ゝげゐきしをゝゝ見たりゝてゝその事ゐはゐ名を書付玉へゝとねがふにさらゝ後れ代かたり卿
ともなりゐんゝと一休老人偶題ゝゝ記し玉ふ其詩ゝ

七山里放光
五山瀧吟落碧三
三山海溟高船片雲社
一山廟等一扶桑神片漲景
二山客成群數万人輪座春
四山樓鐘動月輪惱宮
六山谷洗流頻本
八山花猾馥

さて彼僧と一休和尚なりとて自宅へ招し横槌て庭燒と況杓子で芋をそりは馳走や事おろかあらず折ふし花のさかりあれと庭前はとなをも見たまへとて酒肴をいだしておくそめやさてかの僧やけるい此山ゐまたは越おさゐる事をいかりがたし末代の寶とをあとべけれは何おてを一筆遊し玉をとやけをと安事なりは望をあれとちたまへとさてを拜殿おて

のは作の詩体といよしへとりもかゐる体の侍りをるかとふおいかおを古へよりおりし事おり唐土の東坡居士が經山寺よて作り詩体なりて〇たり玉へとさて〇めづらしき詩やされどかゐる山奥よ住てとに學文をおさ文盲の我々が目なれ耳おれずい相成べくは愚おゐる我々が耳おれ目おれたる事をねゐのふおりとやり上けれと和尚うちうなづは玉ふ折から春風ふきて櫻ちるをら〇〇ちをけれと貫之れうたを思ひ出されて

櫻ちる木のした風いさむからで
空よしられぬ雪をふりける

これといかおとのたまへと彼僧いや是をいまだ耳なれやさゐる處なりといふ又さをらちち花ちる風にちらそれさつ〇〇と見だれければ其まゐ

雪やはんまおあられやこんま御寺ち

このきの木おいとりつそれはんま

是といかおとやさをれと彼僧大ふうちわらをさてそれどをたるは僧のないこのお耳おれ目なれしそのおてもそれとあまりおひとやせは一休をとらひ玉をて寶もつともないいで〇〇其望ち目おも耳おもおをしとをかきてまいらせんとて

このく

きねが鈴海山木まり谷のおろ
入あひのかねおを庭前ちえな

とあそは〇けをとかの僧さてもよきはこのる口や實お見おれ聞なれしものをのどみけるま

そ愚おれとては口のこのるきをこのんと侍るかくて色々馳走やおれと次手おをとかの東坡が詩を書おをべしおて

七 山僧 山花發二茂林一
五 山鳥巢来 山遠路幽深
三 山雲飛片倫問 山雲飛片々
一 山花發二茂林一片食道 山水碧沈々
二 山遠路幽深沈吟尋 山鳥巢倫食
四 山水碧沈抱相 山猿樹抱吟
六 山猿樹遷 山僧來問道
八 山客 山客還相尋

かゝ書あたるていにまゐてゞのへり玉ふとなり

○爰ゝ堺ゝての事ありしゝ一休和尚へ常ゝ參ゝてゝ心安くゝ遊を得たる又次郎といふ町人ありけるあるとゝ河豚汁をしゝ、か食てけるが殊の外ゝ酔ひ終ゝその日けうちに死しけるゞ今ゝの時にゆけるゝ我世ゝありしゝときゝ死る事ゝいつの頃ぞやと思ゝけるゝをゝ後世ゝとて願ゝ置し事もゝくゝされどゝ一休和尚へ常ゝおしこうゆしゝ物がたりとゝ承り〳〵結緣あれゝ引導ゝたのゝ奉れかゝる不慮の死を仕けゝさゝそゝ哀をゝも思召すらめかならずといひ置て終ゝおしく成ゝゝる妻子眷属なげきのゝおしみ遺言ゝ通りつゞさゝゝ一休和尚へゆ上けれゝいてやゝゝき事なり扨々ふびんの仕合ゝ仰らゝをけるしかる所へゝや時分ゝよくゝ間和尚樣ゝ出ゝゝあふぎゝたてまつるゝ再三人をゝおゝしけれゝ一休仰ゝをげるはいや〳〵われら罷出るゝおゝよばゝ引導つゞさゝゝ書てつかゝゝそべし誰ゝてゝゝみゝあげさせてゝほふひらゝと仰らゝをけれゝば妻子ゝあげきて遺言にてゝ間ゝらゝにゝ出下さゝゝよゝ慈悲ゝあゝゝゝ さまざまねがひけゝゝを一休のたまゝけるゝいや〳〵我等が出ゝゝばゝのへつてかれがまよひとゝあるゝり則書てつかゝすべしとて

海中有二毒魚一 名云二河豚魚一
面腹白脊班 人不レ食二此魚一
嗚呼痛哉又次郎 食レ之忽死來
彼歳五十四 彼歳五十四
合て珠數一連百八煩腦のきつゝあゝゝをふつゝときつて行たい方へつゝ変もけ

木曾十七寅の年角ちおいこそ添よけれ

とあそをしてつかとされけるとかやしかをとおの〳〵肝をけしけれどを仰なをを其おと

くわおなじをるが其引導の書たるを其子供秘蔵して今に傳て其家ちたからとしのへを

なき墨跡わて代々所持仕りて有けるとおり

扨前冊わは約束やたる法語ゆ書すて参らする

○君がちとせをへんおとをあまつおと絶れ羽衣よのふ

註君とを諸人おりいふこゝろい唐の玄宗皇帝のは代わおうゑんといふ人ゑもつをおし

て目ち前わ宮殿ろうのををなし乙女をくだして羽衣の曲をおさしを玄宗皇帝興し見

たまふよしをしもなをきへうせぬおふるを弥み見へたりしかれをちわてせをふるわても

夢ちとくよ比ゑんとの事の又四十里四方の石を羽衣よてなでつくすといふ効石のた

とへあをを久し比事の見る人のこゝろよまのすべし

○をんせいましませいとふがうへ

此文をよゝ見てながく生死ををあをて不老不死の身とおをいわてを

○我見ても久しくなりぬ住吉の

きしのひめまついくとへぬらん

とれおを大明神なりをみよしのきしとを苦ををたる彼岸をいふなり姫松わてをみ

やびやかわしていつものをらぬ常磐木ち見どりの松おいいふ心を天地のいまだをに

まらぬをさきの神代のをき彼岸ち姫松を見てかくよめり此神代ちをきといふを常にわ

たくしおき心胸おり姫松といふを人々ぐそを乃本智なり松をみさわて四時しほま

ぬ物もををよたをへてのをいふなり今を身を姫松を得をを不生不滅よして變をる色お

くゝるしみたへをなれて彼岸よいたりて安樂おるべし諸人此斷をしいてゆめ松にお

れをの事おり大明神とは文字におふをにわちこのおるのみとかを神ををこゝろおり

くらきまよゆの人ゑわきらこのわそる神をまた一説わ姫松が變化して大明神とおいて

おの歌を詠せしををあを是をしらせんた絶此古歌を引玉ふなり

○目おしをとち〳〵

目おしをとを人々具足の自性おり自性本萬の見ををなる〳〵がもへよかく名付たりもし

佛を見法を見心を見有を見無を見を見本末を見をべて何よてを一寸と見てを見る事
あらを目ありおして目なしおてはなし本より名もなく方角所もなく然も天地よ先だ
ち万物おおくれて古來變滅おく色形おふして千れ色万をかたちおあらをる是世界國
土れありとあらゆるをの〳〵本源なり佛とも眞如とも阿彌陀てを觀音とも本智とを自
性ともいふことを去るを佛おなる人とも悟りの人ともいふなり釋迦一代を經文を皆
此目おしとれ事を人おしらせんがたなゲ
楞嚴經お阿那律陀無レ目不見と說玉ふ
又同經よ曰阿那律陀白レ佛言我不レ因レ眼觀二見十方一精眞洞然如レ觀二掌果
如來一印レ我成二宣阿羅漢一
云々佛六圓通說たまふおをそもひとつなを是にとつて此註を目おしとと名付たりと
ろ〳〵とはたづねるおおばなり
○おろおつゐてましませ
とろづの音聲をたくをのを何者ぞと明くれをてれかずたづぬる心つゐふと目なしよ

たづねなふべしかくのごとくして尋ねあいたる人をくどんおんとぞよぶ観音圓通の門
とて二十五ぼさつぼ中に第一ぼ菩薩とするなり

○扨一休和尚のは袋は浄土宗にて有しとのや一休常ふかな法語をのたてつかとし又と水かゝみといふ雙紙を送りて道をおしゑ玉へどゝ云のゝはさといもおそ明暮たゝ念佛のみにて過し玉ふ一休聞じめし一段のは念入おり念佛おて〻佛におらせ玉とん事とうたがゝなけれどゝ此所より愚僧が庵へは出ならゝお何のうたがゝおくは出あるべし是よく常よ道しり玉ふもへよ苦ゝおくゝうのゝとあるゝ玉ひても庵へとは出有おり又かた田舎人がわが庵をたづね來らんにいの程道よまゝゝゝても我等が庵ある上と何れたづねあふおりその
たづねるまでの心苦じゝあいたがまよひおりゝ仰らをけれゝしのらゝ何おてゝ示ゝ玉へ
と仰られおる一休さあらゝ一句中て見まねらせんとて

目おしとちゝ〻聲おつれてましませ

昔人のさとりとやらんいふおとを悟る其おらゝとゝ兒よ父母ゝなくとつと已前よゝ我身と
何おるとゝいゝるとゝゝいふゝゝを知らずとゝがゝるもゝもしらず然ゝ釋迦彌陀ゝよし日

のとてすがたうやといふをちとをてとすごのたりどんひまれば一歇をておいける此心を見玉
るを仰られまをたは袋のいとく

いへといとずいはねはそねにさとられて

おをとゆさきや佛なるらむ

とあそをしけれを一休ところとびたまをてをりあへず一首をよみたまひける

いまとゝやゝろにかゝる雲をおし

月のいるべき山〜なけれを

をてよみ玉ひては工夫尤〜をてところとびてこのへり玉ひまる

○そを〜みな人たちの悟りとやらんいふ事をさとるなちをを玄旨に父母をおをとつと
いせんちをこの身を何をのぞいへをのんといふ

父母とを天地のおとをいふをつをいせんをてもわが心のあるとをなをとも天とも地をて
を我をを人とも何をもすおしもをからぬさきといふををうまれゆさきをてをかをおを
ふべからすもし生ぬさををおもをゝ千歳おおよゆををしるべからす我今までおを心

のおよをおこるなりおおらゆをきおを其おおりたる心をいかやうにおつていたををて
かをのををおゝををつてしらを生ゆさをををしるべし

○おおをとしてしらゆ事がやさるべくしやたゝへんてつをおき物なりと思ふべし
知らぬ事をとすなはち目おしのおとなり目なしを萬物よをおれたをばへんてつをな
きをおり是をおしをいゆおらををんがためおりーのをどをゆをとるに又しらずしてな
きといふををあらずたゝおりをもおしをとをおをへををやへんてつが有ぞ

○たをへをよしのをつ瀬のをおもみち色々にさをてちりてをまたををの根おのへるがお
をし

をが心のいろ〜おおこをを又おくなるををとをへたり其心のおおり又さるをころを
をくしるべし色々の心がおおらさるを何者ごのするをを急々に眼をつをて見るへしを
れおを則目おしを花もをれをくさきてちりてをくおるなり花のさくをきおを何の子
細をちるををれ何をしさいををなくおくをれ何のしさいををしらせんがためを花
を見てはおをを必煩しらむをとせをおふきて棒をあげて月をうたんををるがをきよりも

つのぬ事なりわが心のうちで花の心をそ天地の心をそわきらのよ志るなり其證據よ
はこどみお四時のうつり月日のたよび月しよくまで分厘そたがとさるおどいよしへ
の聖人おれはて天は外地の外までめぐりわるそ見るよそわらすたゞ我心の繪圖を
見てしるし出すなりそのたがとさる事をもつてしるへし

○本來そおきいおしへの我おれを死行のたもおおをかもなし

いよしへそいはもかいらぬわれなれば我といふべきとのとそなし

○世の中のとゑがしうとめと早なれば人そほとおおるはほとおし

たつおみそたべめも同じ水おれを人もほとけよなりやすき哉

○もと水おまかのくよりそとのなきとゑとけをたのむ人のいちの世

石の火の火よりそとやきゑとけめをたのそゑなどや追や付べき

○うそをつき地ごをにおつる物ならばなそとつとるしやのいかいせん

しやかどのふこいろを經におきものをどうりをとりて地ごくふどいる

○とへないふとはめといとめだるま殿心のうちは何ごのわるべき

べつゝ事おきそといふもとやそそくつゝにいひぬだるま一休

○世中の人のおいろの佛おれをしやのやおみだれとれわれす哉

しらざるとほとけそ人もおおしおとさておそ人ちまよひおそそれ

○極樂も地おくもしらぬおもゝでおうまをぬさきゝ物とおるべし

どそらくも地おくもしらめおいろめがどうして者ふどそとの身となる

○人しめるといなややきそしうつみそじのさておくおると思ゐをまたおくおちず去て魂

ていふもの來世とやらんへ行おらおそろしやゑんま王が手ゑわたをおば裝束おて作る

罪をくろかねの帳おつけておきて鬼お見せてこをゝどの罪人なりのしやくせよと云時

ゑんま王といふと目な去どのゝ第一の臣下おりそおしそをたくしおふしてよゝ善惡

をあらた是わかつなゑ能とをおせををき事況たい又おしき事況なせばおしき事來る

なりはやきのおそゑか其そくゑかたちおかげれ去たゞふがとく毛頭をもるさずつゝ

ゑたたちすといふ事ならおれをくろがねの帳ていふ是則人々の身よそおとりゐるゐ

んゝどれきせんの道理おれを名付てゑんま王といふなり

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ玉ひしに其の人狗子と犬の子なりとれ佛性
なと何とを合点まゐらずとヤ者れば聞て見玉へとて仰らをけるを

犬の子おわやかる人ぢ去わさこそ
ほとけとをれ地ごくへ入れ

ひかるぎれゝ云のおろとまた目がゐのめ
れつぼ口はらを入ておろ〳〵や

と仰られけをたんま目がわきて狗子のなやうなわのいてゝが趙州の有無の處は
千年工夫仕ゐるぎも愚知の我等と得道仕る事れありがたしとヤ者れば歌よみてきかすべ
し此歌を常お吟じて心得て見られよとて

なしといへはおしどや人のおもふらん
またへをぞする山彦の聲
ありといへをありどや人のおもふらん
またへてをなき山ぶこれ聲

とわそをしけれを彼をれしをらを工夫してしからを有とも無しとをれぬをれよて心ざ
しかとヤ者れを

有無をのをる生死の海のわはをぶね
底ぬ者てのち有無をたまらず

お仰られければ彼人此うたよて得心して一首

有無をしるおわおをぶけん趙州を
なのをしをれの犬の一聲

なをけをを一休さゝたまひておつぼのまゝ城一をちまゐり者るゝとてわらひ玉へを旦那
禮拜して歸りけるとおり

○五しれの鬼どのが請とつてうをよてつれ殺して刄みおてひて人のたいとなしてしやば
にてつみの重さわどかしやくをていふ

五色れおわとを五溢おりこれを目おしどのゝけんぞくなり常にわたくし有ていたづ
らをのなり阿責をとわが心は目なしといふ主人おるをぞゝらず下人のいゐづらをの

をたのひに依て善をわし何のとうたがひのなしみよろこびとら立などするものゝに其
惡がかの鉄の帳お付るがとくあつでわしき事のみ來るなりおれの則ちかしやゝおり
たい多の人の此いたづらをのゝ下人をたのそふよつてくるしみをするなりたれむて
と五うんをとれとをるをいふおりたい主人の目おしどのをしらざるがものゝ
○はたさるをれいふおは毒藥ゐんとてくをとをるといへば罪のおもきと佛よやおり
なん

いふ心は目おしどのよわふたる人と我すおとち目おしなりお知るおれを佛よおる人
おいいふなり其人い經念佛難行などもなさず何の思ひをおきなり經念佛おども心よの
者めもへよつみのおもたと佛よやならんといふりんさい大師のいゝく造二五無間
業一方得二解脫一と云ゞ五ひけんの業とは父をころし母殺ころし佛身より血を
いだしに和合僧をやぶり經像をやゝおれをいふなり父母とは天地有無おところすとと
取さるをいふ佛も經像をとをよおろしてとらざるなり解脫とと一切のまよひ殺とふ
さけとおるふをいふこいふこゝろと修行の人佛をそゝめ衆生殺たらを有無おのゝと

る内といまた迷なりそれを皆おろしとてゝとらざる人を佛お成と說玉ふものへお罪れ
おをさは佛よやならんとれおなり

○つくゝとおくつをのしもをはどあるおらと
ゐんまのちやうよつけをおろおし
ゐと者をも鬼ををおろすあく人と
ゐんまとうとてもるをべたのと

○とくをのをあんするよ地ごくをおよと遠からず
魚ゞいふゞ瞿曇なり一代藏經はみお人間をいためんがためおりあらよくの釋迦どのや
いろ〳〵のうそをついておゐて
地おゝも身心よのゝとくどんと釋迦のかへ名と釋迦いろ〳〵れ經を說おかるゝがものゐ
よ地ごゝのくるしみをうくるなり

○さて爰よ頃しを八月下旬おれゞ大風大雨しきりよして洛中の家堂社塔もそおねけれゞ蟄
川新右衛門取物もとゝとあへず一休和尙へ見舞ゞてに坊に内よにざるか何と〳〵との外

ある大風大雨に寺はいづくもそこねずさすがいやおそれて一休出合たまひてらくこそは心付しそのかゝ誠よめづらしき大風よていん去ながら當寺は何事をいえずとて

　　旦が宿とゝしらをたてずふきもせず
　　雨よもぬをずの世もわたらず

て仰らるゝれば其に庵はいづくのほどよていんどとヤけれど一休わらはせ玉ひてされどこそ大事のことをおたづねあれて

　　わが庵い都のたつみ〜のぞそむ
　　よ浪うぢ山と人わいふあり

と仰らるゝければさてこそ喜撰法師と相住おさをいかとたゝふれけれバいや喜撰法師にかりて居る也とわりけるばさてこそ借家とゝあていんのとヤてわらそれしかど一休また一首をよみ玉ふ

　　かりゝ世わかしたる主をかりぬしを
　　のそとかゝとずかるとかもえず

とよみ玉へと新右衛門此歌を感じて扇子にかゝ留かりそめゝ参りてこそ得道ゝ徳侍るとてよろこびて歸りけるが門より立かへりてさて〜をのしきたいふれ事仰らるゝしあうか〜ひヤべきと思ふ事を打わそれのくるとでよ歸らんと仕いん此心えいのゝ心得ヤべきとて

　　吹とゝたゝそゝさゝこのしゝ風あるか
　　ふかぬときゝわたいつちあるらん

とヤ者れとそゝさ〜に返歌あり者る

　　吹ときはうべそゝこのしき山風を
　　ふかぬとゝおゝふかぬありけり

と仰られけれゝ新右衛門そゝをゝいはずうあつきて暫ゝ禮拜をおして歸りしとおり

○それを誰と〜へゝよしあゝとゝずがたりやゝ

　　いふ心ゝ一休釋迦をたらふくしかれとゝ我ゝまたそでもおい事ゝゝふたゝおりおせ
　　ゐおれゝ經ゝ文字ゝ心をもつて迷ひをしらず何をゝつて此有事をしらんや八万余經
　　千差万別ありといへゝも見聞覺知ゝ四門を出そゝ四門ゝうへおおゐて永く四門を

とおれたるを經ゝ文字ゝとゝ義をゝてりてみだりゝ分別させまじたゝの爲ゝしのるゝ一向ゝ經をゝて見聞覺知ゝ外ゝ佛城もとめゝおれ則邪見外道おゝ人ゝ邪見とおゝさん事をおそゝて又一休和尚みづからゝしおゝとゝいずかたいやゝと宣ふおゝ釋迦をしかりてせんもおき事城いふたおり法花經に曰舍利弗云何名諸佛世尊唯以一大事因緣一故出二現於世一諸佛世尊欲乘生開二佛知見一使得二清淨一故出二現於世一云々知見とゝ見聞覺知おりおゝ以零して聞覺を不レ說開とゝ見聞覺知を則佛卽心ゝ光影おりとゝるをいふおり然ゝ見聞覺知ゝ四ッゝ一代藏經ゝ要文おり是をゝをいて別ゝ修道おし猶開とはたとへゝ迷ゝ人ゝおしゝ夢を視てくるしみのおしむごのとくそれゝこのたもおゝ事おりゝ人ゝいへども聞入ずゝし又聞〳〵い顏ゝして我今頃に夢さめてくらきゝ灯を得るがとくゝおて万法おさらかゝ視るといふそゝいまだねおゝみて夢おりよくもめゝ覺ぬる人ゝいふゝ我ゝ汝めよりねむらされゝ夢おしおんゝさそるゝていふ事おらん其とく性德まよゝおゝとしるゝみにしてのつて得るゝおしかゝゝとくおるを佛知見を開くといふおりまよゝの人い見聞覺知をゝおるゝといへども一向ゝ捨て外をもとむゝおれずゝいへゝ又とりてみだりに分別をゝる今爰ゝ迷視ゝとらず捨すれ事をいふ夢ゝうちの人ゝよくさゝ只榎木ゝ作る土地藏がねおゝをいふ城視ゝ忽ゝさら〳〵と車の音ゝ目をさませ

○釋迦出山語云

出山とゝせそん山ゝ入六年端座工夫じもく〳〵して明星を視ゝ元來まゝ〳〵おゝさをさとりて山を出たまふといふゝ

○一佛成道

一たび見聞覺知ゝ自性の日かりおりゝと識得れゝ万法歸一亦まもらずかくの如おるを佛の妙道を成就ゝていふもゝゝ成道といふまた佛の知見を開ゝていふまた目おしゝおる人ゝともいふ

○爰ゝ西の國の大名身まかりけゝ今端のゝとゝさゝゝされおるゝ我死してのゝち種々の佛事をもつゝとゝべからず紫野の一休禪師を請して引導城願みゝせ是ゝい外に望みおしゝとて死たいおる人々おげきゝ遺言おれゝとて急ゝ都へ使者をたて一休を請しおる休一折節在庵ゝ

て易きことおりゐてかれ使者と〜そふうち連て下り玉ふ既に葬送れ日限きはまりしのち音
ゐ聞べ〜紫野れ一休和尚こそ此國の某どれ〜に引導の爲とて下向ありしとて國々嶋
々より聞はゞの人足を空よまゐふて貴賤くん玄の玄に引導を聽聞せむとぞ心しめけける
葬禮の儀式天ゐと花をふらし地ゐと錦を散て其よそゐ詞にのべがたく其日ゐあれと數
万の見物かの一休れ引導をゞ聞べ者れゐおしあ心へしあひける扨玉のおしをかきそへけ
れと一休立出たまふ簾ゐ前ゐ一默し玉ふ諸人そや今や〜と耳そだてゐるゐ一言を
そいひたまとず天を仰ぎ口をくとつとゞらき地を見て口をふさぎて其まゝずつと退き玉
ふ彼大名のれん中れん達をとじめ一門家來のとをゞのらまて是はいのゐるに事やらんせ
めてゞ一句をしめし玉をとに袂れ袖にとがつ〜諸人の見物を興覚さましけれと一首
の歌をよゐゐ都をさ〜て上りたまふ人々是非ゐくそゐ歌を見れば

我とたゝ後世のお玄へをしらぬゐり
わらんの二字のゐるよまかせて

とゐりけれと皆人まれ覚き〜てゐとそうゐとそんそれさるに僧かなと默して感玄ゐへり

しとゝ

○又一休堺へに下向のゐれ淀の河覇舟に乘たまひけるに乘合に山伏ありけるに坊と何宗ゞ
と問ふ一休われと禪宗ゐりと答られゐれと禪宗ゐと我等がとさゝゞくとゐらゞとゐらゞといひけ
る一休ゐさる〜とゝいかにもきとゝ多し其方ゐ何ゐてもきゞくゐらゞと見せたまへと仰られ
けれとゝんで我等ゐの法力ゐて此船のやさきゐ不動覚いのゐ出してに目ゐかけんとて一ゐゐ
んがうゝゐせいたゐをはじめてゝみゐもんで祈り者れと皆々のい合ゐそれゞそ目とめを
見合ゐるとゝろゐあんのとく舟のへされゐたちまち不動の像火ゐんをとなつてゐらとを
たり其時山伏ぢうめんを作りおれ〜おがみ玉ふかゞゐけをゞ皆人ふしぎの思ゐ覚ゐし
けれ共一休とさらゐふしぎにゐはしまとぬふいなりいかゐ禪僧のゝるれゞくゝ如何ゐし
玉とんゞゝゞくりかゐてゐけれと我等が奇德ゐと身より水を出してゐの火焔をとゐつ不動
發覚けして見せん隨分いれり玉とてかの不動の像の火ゐんに小便をしたゝこの玄かけ玉へ
ゞ火焔とそのまゝきれて山伏ゐ法力つれけれ皆人一休を拜禮〜て奇異れおもゐをおしゐ
る也さて舟より上り陸路をうちつゞ行所ゐひかひとりゐるほゞ大ゐる犬の山河ゐもひゝ

くべのりにやへこのゝりけをゞ山伏ヤやういこのわゞ坊さきの行くらべわおそまけたりとも
わのおそろしき犬れいこのゞ殺止めたい今是へよび寄る法力をあらゞさんごのゞ僧ゝいこのわ
とヤ者る一休是ゝいと安さとおゞまつ祈りて見玉へとのたまへゞ山伏大いらたかの赤木
の珠数をさらり〳〵とおしゞんで一いのりこそんのりける一切犬ゝほへやはず手元へ来
るねんもおかい者をゞたつさまやよこそまかけて十文字犬のゝんゞ〳〵めよあびらうん者
んそわか〳〵といへどゝいねゝわゞやまず一休おかしく思ゑめしそおのゞ玉へ某はそれ
ほゞれ事わあびらうんけんもそゞこのも入事にはあらずあゞいめゞのいかりを止めたちまち
ゞゝへ来らせんとふゞところより壹飯ゞちやきめしをゞとり出しこの犬わ一目見せて〳〵おろ〳〵
〳〵とれゞおまへゝゝしもいかれる犬なをゞもやゞめし一目見てくん〳〵とて尾をふゞ来
り者をゞ山伏をゞさもをけし皆人さてゝも格別おる心得かなと感せめゞもおそおこのりけり

○観見法界草木國土悉皆成佛

いふ心ゝ釋迦目おしゞのゝとなり得てゝ天地万法ゝ観見おゝ〳〵くみな目おしゞのなゞ

と說玉ふ

○草木さへ佛になるとあれど人間はいふもおよばずそのし昔わつた釋迦阿彌陀をみな佛じやといふたしたがうそをつかをたとのふ

いふ心と釋迦目おしゝ事を人々ゑしらせんとていれたれども見聞の人其心をしらずして言葉のきりたこのりを取によつて一言葉を目おしどれわいひあてらをされた皆うそと又有をゝいふはうそをいとずと佛とゝせしとあり方便のうそと皆實なる故と

○うとふをまふものいの聲

さきとゝて詞をひゝへにきらふをわらず風のこゑ水のおゝてまでを皆免おしをわらはそなり人のとばにておど別ならん其外身おふれ目ゑ見耳にゝくなどの事天地日月うみ山おいたるまで一つゝして法の聲おきものなしもゑにうたふを法のおゑとあり

○柳とみどり花とくれなゐ

いふ心と目おしとれひとりにて能それ〳〵品々ゑ別る〳〵なり自由おるわざおりそしわのらずして一めんおらゞ目おしとゝせし善惡なく〳〵てよく善惡をわかち萬もとの

にはあれて萬物とゝをあひ分別あふして能分別し見聞すして能く見聞ことなにもへあれば目あしゝの〳〵生國無住れ國れ人あれとあり

○あらおそしろの春のゝしきや〳〵

目なしゝの〳〵けしきおそしろきとあるなれ何れ心もあきなり

○本來生死をとあれたる身なれと來る處もあく去處をあし三世不可得あり

三世とは心のいまだおこらぬ所を未來といふおあつた心を現世といふなとなつた心を過去といふ是を三世といふ不可得とと文字お得べからずよむ心の一ッおとらぬ先を視るゝ何ともしらを又おこた心をおこらぬ先の心と同〳〵事あるたゝ三心ともおしらぬ心と是を不可得といふなり云心と三世とをしるとをしらぬとも何とを思ひいからぬ不可得の〳〵ろれかとらぬ心あり是を目あしといふあり三世名ゝ一心と成かもゝに生死をあく本來今もなく來る所もあく去所をあし

○混沌れいづくともなを出ぬれと

混沌とい天地れまだわからざるとをない是則識前の心胸あり此ねをとつて平常つのひ用るあり是をあんとんれいづくともあくいづるといふなと

○父母未生いせん本來をあくもめ〳〵佛法とやらんいふ事もしらず何ゝならんてあんをべからずたゝ何おとをしらぬ心の佛なとその佛といふをのと有おをあらず無ゝをあらずさるりぬれば有とをあしとも知らぬ事なり一切八万余經を視るゝ佛とあらん心いをあしをあしとのく古暦あゝゝ同し事あり

いふ所のゝんとんの一歩を得れと未生已前本來をなく夢々佛法といふ事も去らずたゝやそらかゝしてゝをとをしづのなり爰ゝいたりて一代藏經を視るゝみなたんことの日記なりもへゝふる暦あゝゝ同し事とゝきたまふなり

○爰ゝ一休和尚れ末期の句とて世の人の口ゝまのせけるとそゝ數多し是ゝの實なり是と虚なりといふも不實ありいかゝとあらん彼もた影を書付て贊ををと染こをを贊をもとむと其贊ゝと出るまゝゝゝあそばし者るとなりゝある處のた影の贊ゝ

朦々〳〵而三十年　淡々〳〵而三十年

朦々〳〵淡々〳〵六十年　末期脯糞捧二梵天一

此句々もあり又そ語にも

借用す昨月昨日

返済す今月今日

借證し五つのその災四つかへし

本來空わいまどをとづく

又ある末期かやらんわ遊しけるとて人のいへるは

生也死也　死也生也

柳不みどを　花もくれなひ

喝

柳不緑花不紅　ほ用心〳〵　一休題

○又ある人一休のほ寺へ用事ありて參りそるが或夜沙彌小喝食をあまづけて一休のほ遊言どををおがを侍ゑよ一々名譽を極めたる事どを多かをし中よを自賛自賛のほ影を拜し侍りしにかちべをいのよを長髪にして眼をたつを視出しうを赤たゑ衣をめし丸竹の柱

杖をつきいすわこしをかけ侍りし賛よ

柳も緑花も紅

行脚事畢　今日時節

折二主丈子一　燒二六月雪一

虚堂之再來天下老和尚一休宗純末期書レ之

○又ある畜家よ所持せる自書自賛を拜見せしい是も蜷川村の卿庵よ居ませし頃よや是も髪長くまゑほし卓よかゝり玉ふ山居のほ影なを

山居窮僧聽二松風一

不レ須二臨濟德山禪一

一箇住山三十年

公案工夫了畢後

長松風破罷二參眠一

虚堂七世　龍實門客東海純　一休老

とそ有けれ視る目もとさましくて身は毛もよだつ事と

○としなふて雲のそらへとわのるとも

ぐどんは經をたの山をやせん

きやうを見て其としわ〜をとりぬをと

せんわくとそふわくよとそおれ

○去やかといふいたつらとのが世ゐ出て

多のおとをまとはそるかあ

人とみなだちりをれみゐきくとのを

いとぬれしやのきやうなりおり

○是は是非は非ゐしておき生と生死と死花は花水と水草と草土い土

千境万物名をかへかゐちをわらため出きたるといへどと頭々常體是にして是のだう

いなし故ゐ生と生死オ死花と花水オ水草いくさ土と土ゐしてかつと讓らずおーゐど

とおぢとおあらだゐを佛ゐおる人なるべし一休和尚は何ゐもならぬ人なるが故ゐ是

と是非はひと說玉ふなり是人々生れつきの平常左右のとゐろおと一休和尚のみゐと

のぎらず誰の〜くれとくあらざるとのあとやーとぞおて我常ゐ返照して見てさらゐ

うたごのふ事おかれ

○あめあらを雪やゐやりとへだつれど

とくをとおおし谷川の水

あめあられ雪やゐゐをそちまゝに

水とーるこそおくるなりおり

○我オ是何とのぞとつちやうとりしるまでさぐるべしさぐるとをさぐられぬ處と我おり

我とと迷ひち身心をいふおりさぐるとと此身心と何とのぞと根源城さぐりたとそる

をいふおりつてうとい上諸佛おとし下衆生世界なりよをそぐりてみれどさぐ

らぬ先ゐは色身ちゐとも無ともしらずたいたちたをなどのとくなりそゐまてあつ

しつめたしと直ゐ境ゐ應じ事を弁去てみぢんとのりをさまたけなし是をぐられぬ處

之それが則平常の身心本性の我なりとしる是を名付て目なしどのといふ之此故よさぐちをぬ處ありといふ玉ふあり元より色身の身よをあらずたとへば色身は樹の根あり万法は枝葉あり本たつて末ならずといふとあしもゐあ先色身をいふなり心經あいと之色即是空空即是色受相行識亦復如是云々色とは色身あり空とは本智なり即と其まゝなり受相行識は幼心をいふ心は身心とをあ其まゝ取もあわさず本智なりて説玉ふ古人是を心經の要路といふ之是即ちさぐるところをさぐられぬところは我ありといふ語と同一言あり

○心あをいかあるをのをいふやらん

すみ絵わのきし松風は音

ふたつあきものとありて一をなし

そみ絵のかせれさてゝをゝゝしき

○死ぬれは空々としてあるやらん

またぼうゝとしてあるやらん

死ぬをとは誠に死るよとあらず目なしどのよわへ真あをよと思ふと色かあち音聲とゝゝく皆目あゝゝれゝわざよて少を心あきなり心あきが故あ死るといふ之目あしよよ成得れば爰をのしあを皆目あしにて分て目あしていふべを方をなしもゐあ有やらん無やらんといふあをといつあうあしらぬ事みていふよをあらず

○ありのをもあしとをとつのあのみよてくうあふたつのあ云いをとあし

ほりあしとなに名をかへて思ふらん見れとひてつのこのみなりけり

○おれれさゐあつさをらはぬ不動めのあくまのうふく無用なりあり

あやまりてふだうをよきとおもふなよ其心あそあくまをとあれ

○なきあをのかた見あ石があるならを五りんは代にちやうをきれかし

人をたゝ五たい五をんよ化さるゝ五つ塊さをてりんのみあせよ

○朝つもをきゐのよりてを有ぬべしたをのあの世あのあをとつべし

いなづまのかげよさきだつ身をしれたいま見る我あわふ事をなし

○はらぬ井のたまらぬ水の涙たちてかげもかたちをなたん人をくむ

うそをつきうそをしらするうそおそはてを波まことれあるまことかな

○目おと見て手おとをとらをぬ月のうちのつらのおとに君おぞおりける

かをは得すすきてをやきて矢のとをひたかへし見よもみはりの月

○萬法波見る水おとよれをかわきおもて水を一くちおのむ

四つのちうみ波たゞ一口おのみつくし今ぞ出ちるゝをのゝ水をしを

○釋迦きんかいの處にまおせて佛おなるといふしるしなしとかく不明なり死をを我を

おし人をなしゝやかみだを觀をいをとを人れ性をうけつゞ地獄よゞ入

きんのいをとをいろ〳〵れ法を立さまゞ〳〵ゝ行 法戒 行おゞをる事を死ををばとを悟

をゞをいふ事を也を我もなし人をなしをおりいふ心をさとりて後たんかいれ法を

みれをゞでもおゞ事なり釋迦彌陀もゞふをいをとく目おしゞをゝ成得すして〳〵いろ〳〵の

きんかいをして地おをゝいるをいふなりたゝ人々お文字をを是苦行などさせまをき

がた絶かくいひたまふなり

○夜をとをのら佛の道をたづねばわが心おそたづね入めるる

いのおをゞたづね〳〵ておく山れ道なたのたお安くいるらん

○おをゞいれを人をわが身も余處おらずこ〳〵ろのほのおこ〳〵ろおおれを

のへりつゝまた立のゝりをを見れをおもふお〳〵ろをそゝこ〳〵ろかお

○心おてげおもこゝろをなきものをさとりは何のさとりおるらん

さおらぬもさとるも同じまよひおりさとらめさをさとりとゞいふ

○何事をむなしき夢をきく物をさめぬお〳〵ろをおけたつるかお

をめぬれはさめぬきこそさめつるにさめめこ〳〵ろおども絶おらむ

○わか法をいとでをいら迎春のはなもひらおてちりてつちをおそおを

春くをゞさきちる花ををゝちををきのぬを人のあるもゞをゞかし

此本歌を文の終の言葉なり佛の常 樂我淨をよめり是一卷おち 流通なり我をを我淨お

り法をを常樂おり歌のおゝろをこゝをのしおも我法なるもゞをいをでをいらめをを

り春おちをおをらをもちるもつちをおるも皆常 樂現前のところをいふおり

○一休のぼこ〳〵ろざしをれも心親るゝ寒山子の風相ゝのとる事なく寒山師の詩句に

我心如寒月　秋水清無底

とありしが一休の道歌ゝ

我ま、ゝろそのまゝはとけいきはとけ
なみをとゝのれて水のあらをやや

とよませたまふれ寒山子れ詩よち心なり寒山の文珠ないといふ傳へしが一休と定めて普賢あるべしされど狂雲集ゝ其詩文多していねもたゝ人よの目よと視へめをゝゐみて其中ゝ〳〵金つんぼの耳へも入やをゝ詩を書ぬき盲の目にを視ゝたらそへきひらかゝゝてしばりつゝ子供ゝを覺へさせ大人にを未だ去らぬ人ゝ見せ侍らんどかたこと殘のへりみず仄平をゝたまへゝ人の書ゝやまりををつてをがゝやまりとす我ゝやまりてゝも苦しのらゝこのくなん出しめ

一休和尚狂詩二十首

題鉢敲

畫不笠兮夜不茵　瓢箪叩罷有何益

題影法師

元來有物不離身　全躰分明無面目

彼岸

今日彼岸欲開鉢　無蓑無笠又無杖

梅法師

往昔江南沒落時　欲問横斜疎影古

虱

獨臥寒衾恩幾千　東西南北自由身　花發十方淨土春

揚手同揚伸足伸　起居動靜似侮人

餘身貧乏雨晴稀　結句食犬引腰皈

起青道心成法師　伊勢壺底暗皺眉

余身貧極有誰憐

不大生黑雲殺不桑布裂天殺一
寅波手看無若酒來天其
尺是中間忽貴兒茶然
是桑恒忘七文叉好三
佛阿忘佛珠無富
一八不
定髮山指
有髮倩刎
愁髮屬爭
人髮流可
少年只入
陀字御
字字意
足諸下人信米仰醫仰眉無用棚陰
足下米醫眉無用陰
諸人信仰醫眉棚陰
山指刎爭可入御字意
定髮有愁人少年只字
髮愁髮流只御
髮髮流只
髮流只
髮流只

佛法無二虚言一　菩提煩悩　匪石　乾坤　霖雨　恒一

本来有偽　茲思出事　白物染二青　青地扇切　々一　皆

秋射　風手名人能登守　有レ恨八　浦　島之擬合戦圖

万騎下山源合氏戦圖兵

長江不洗英雄恨弓

源丸郎流レ弓

漫々滄波已落レ弓

日乎夜風潮尽出二堅城一

恰如二初月掛二晴空一

狼兵法連者源丸郎

猪忠信亡二鄰王一

犬治川酔乱飛螢

字治本晴時如レ見星

法印宴寿
俊成

忽伸二左臂一取來者　天下英雄在二轂中一

熊谷招二敦盛一圖

生年十六美男兒　身命碎レ珠同レ馬時

熊谷道心從レ此發　法然庵室念二彌陀一

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如レ雲宇水邊　東關諸將各爭レ先

功名誰出二四郎上一　一馬化レ龍何若レ鞭

右

一休和尚往生道歌百首とて

○阿彌陀唱さとをは即ち去此不遠まくへと遥のよしおこそあれ

○三國の法としおく多けれどしやかれをしへにまさるぞおき

○儒釋道三ッのをしへの別おらす善お善報わくよ惡報

○そかしより知惠ある人の佛道と二世わんらくのをしへとそおる

○三おくの世々のこのしてき君臣にしやのれおしへを仰がぬとおし
○三寶に歸依そる世々のため〜みよこそ土あんおん土民福樂
○一心よまとの道にいる人のその行をゐえ子孫とんじやう
○公家武家のぼだい信ずる手本にとこのまたり大臣多田の滿仲
○道よいるそゐとんじやうの例にと藤氏源氏れ家をみてしれ
○せんぢやうと忠孝多しとんせいとげあたぐひあきわかれそのゝふ
○もの〜ふとんせい修行手本とて西行法師さてはくまがへ
○今も又十細八素の友がなじろさんのそのじかをれぞする
○おんせいと不遇の人とさをあら免名とげてぼだい入とうどんげ
○大唐とち如編禪師と樂天とをお念佛座禪とそきく
○熊谷がとんせいしも行功德みよれんしん平等自他の成佛
○四大五蘊とおそうふしてやあそまもとの念佛座禪かそいふ
○家おあり不忠不孝のぞもがらとんせい修行おやしかりける

○成佛い異國本朝もろぞもお宗おとよらず心よそよる
○おや主お忠や孝おる人々と家よありてもぼだいたのもし
○萬法の行とよろづと事おれたお〜ろ〜ろ道をつとめと
○世をとちがれ修行の道い別でなし智者愚者とをお座禪念佛
○貴賤知愚僧俗男女別なきぼだいの道とひぞつ事なり
○佛說はぼだいねんとち眞理且て二世安樂のをしへおりけり
○善修それどあく事ぞたると恨およ先世ざいがう即爲消めつ
○皆人とちねんん常樂〜らずーて生死無常をなげくあとれさ
○佛だお定業のがれ玉いねと〜やくいんぐ也のひとふ幸
○佛性と不生不滅の物おきばまよへと生死流轉とぞしれ
○何事と定業おりといふ人もまとのときはおどろかぞする
○佛道にさとときといふと何事ぞいんぐわぼだいを得とそそる之
○との常お工夫觀念つとめなばまとれときまん心うおの去

○智恵わるゝ若を道をつとそるに老てぼだいをしらぬおろかさ
○人をたゝ平生志願おかりせを修身齋家もいのゝあるへし
○何事をせんせんがうといふ人のぼだいつとゑめてきそ猶ぐち
○我等今悲願新誓をするをゝて有爲の法とてそしる佛陀や
○ふくとくをねがふお來るわざをいんをつゝじそかとよ入ねとぞきく
○一さいの諸ぶつぼさつもひぐをんよりぼだいねをんの成就し玉ふ
○一念ゝ中よりまゝふ雲およりゝんゑ永劫やみぢをぞおる
○つらゝくとめういもとむる人みれたゝひある人を佛おらまし
○神儒佛みつゝを玄ゝをゝく人の何れゝ道もいらめあさはし
○一念ゝすゝ眞實ぞたねとなる九品のれれげゝらけおそそれ
○よの人のねんぐをぼだいをしらずして五ざやくのつみをつくるゆえれさ
○戒たをちざせんねんぶつゝをめつゝ玄ゝおわる人を佛おらまし
○比丘くの其身ゝつみを扱おゝ人の道心やぶるうら絶し

○當來の三會のはるの花もまた現世のじゝぞたねとおらまし
○世中お我そさとると自慢して名利もとそる人のおやさよ
○正法の花ぞのゝ山の草や木焼そこのしれをるとおすよしそのな
○名と利とをゝとそるとのくげんやな人おつかをれざいにつかわれ
○今とてゝ天地ゝみちのゝをらねをまつせのわれらぼだい願をし
○財寶と身のわだおりと聞おからおほゝとゝとむる心をのなを
○釋迦を又おみだもゝとを人ぞかしわれをのたちを人をおらずや
○わくねんはおまりやすくて玄ゝしんをおおしがゑさをものうのり者る
○道をたゝせけんせ外のをぞもお玄ゝしんを玄つの人をたつねよ
○おをらくをぢをくをゝれおわるなをゝのをねんおこるおゝろせいせよ
○わが氣おはたをひ入ざるをおりと人のいさゝを用ひしたがへ
○人の非をしり安けれをおゝが非を智者をしるおとかたをとそ聞
○おにをも人のおゝろをさかふこそ世法佛法をゝ也をおりけい

○身を入て鳥ぞだものを救ひしと釋迦のゐんちを修行あり者り
○眞佛と有さう無相よか〳〵とらず四相なきまそむをう成者り
○ぼんれふをそくぼだいぞとなすとは一ねん廻向そのうちよあり
○賣僧ぞて物とりくろふ沙門まそこれぞぢごくのかすとまそあれ
○本來ぞちひまん無さうの佛をを五ゝくまひのれぼんぶとそなる
○くわれいなる沙門をみれた皆人のめうぞのしやなりていふぞおのした
○躰ありてぼんぶこ〳〵ろのなかりせと本らいくうのそさう眞佛
○れまど犯の僧と中々俗よりをいんくとぼだいをしらぬ佛だう
○戒たをち座禪念佛つとめてをこ〳〵ろわしきと造地獄から
○儒佛道おしはたとを得せずとも生死大事とおもゐ人々
○物とふ執着せざる心まそ無さう無心の無住なりけり
○皆人ふれしへぞち道よまかせなど本來空ふかへりまそすれ
○みな人ぞちてんじんぐちの惡水と三ゝれ川のながれとどなる

○生は寄死と歸るぞといふとをふるきふみにそおほくみへ者り
○六根ふつをゝるさいくとのちのほとり四手れ山路の高根ぞどなる
○たゝをたゝ宮き物なるにふる里のそらにかへるをいぞふいかなさ
○極樂の月まつ夜半の念佛はくもきりをろふ秋れおし風
○障なく本來空にのゐるまそこれや西方往生と法れ
○老の身の月日をのくゝる所作をたゝ香花ふどくじゆ座禪念佛
○西方の本來空よ往生〳〵ひりやう壽佛となるぞめでたし
○口ほどに身の行ぞのならざをとわが心にもとぢられそそる
○ひが禪とおしはぞ外ぞち宗なるに往生要歌よむもおかしさ
○わが禪まそたらふべぞ法わらされぞおゝ〳〵ろのうちよ一もつもなし
○いにしへのちしきのをしへにをとれみいまとなふとてごのまんけんぢん
○まやとたういたいけ夫人極樂へまをぞ佛れひうぎせつぼう
○佛性ぞ四大和がうの躰なるに五欲のちりをいかゝ引けん

○佛乘をせち弁僧やとる知識世わたるもれて するそのなしき
○妙ふして神あるものとまゝろ哉天地ゐわたゞみ玄んみもいる
○不義よしてあつめたゞくえふざい寶こつもりてれちと二世の身のわだ
○心より四聖六凡れでぬるゐ何とてあたしゆがうい作るぞ
○名と利とよかゝとる心引かへてまとつくさば二世は安らゞ
○何とも今日の觀樂とぎめれを明日えのならすくげんとそなる
○書寫寺の僕のところもの虱とりむこのしのは僧今そこゐしき
○現在の苦修善行ど種てなるかならず來世安樂のとれ
○ゑしへなる道と世外よ事多したゝしん實に慈悲をたずねゝ
○罪障の露霜ふのき身ゐもたゝ座禪念佛題目ぞとた
○まつしまやみなゝの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
○十方は唯一心の淨土なれ衆生もつとめ己身彌陀佛

眞珠菴い末代まで出世すべからずと仰られ和尚自の一代ゐも出世とましはさゝゞけれども出世の法語どもと名譽なるを書置玉ふ和尚號と贈號なり自のたまふと虛堂の再來なゞて其外ふしきなる事を書おき玉ふ事多し又遺言のおくゐ我死て百年そぎて唐土より禪師きたらゞ我再來ゐおもへまた二百年ゐあたる年我死骸を土よゞほり出し見るべゑもしかたち朽たらゞいひ置し事と皆たとゞておもひて火中そべし大のたと死がいとそこねまゑゞのたまひしゞおゞ然るに百余年ゐして隱元來朝なゞされ相違なき隱元和尚と一休和尚の再來なるべしゝのらばは死骸とても定てのとゞ玉ふ事ゐるまゑきゐり又今のは木像とゝるこのゝちの作物ゐて諸旦那ゐるゐと弟子衆まで一休和尚のはそり髮を守袋に納もちけるが彼は像造作り奉るゞたは長髮の躰ゐれはとて直のは剃髮をは眉は髮ゐいたるまで佛工が植けるとゐりさてもは剃髮をとゑゝけ代の我々拜し奉る事有のたからずやさてかゝ集めめゝるゐ昔の人れ書誤るも間たがへるも有べけをども今はたつたゐた筆ゐ記しれを猶ゐやまる事も多から兒まとわがおろかゐる故ゞかゑゆるし玉ゐ必しも古人をそしり玉ふべからず此書と兒童がひる筆の伽となし玉とゝおのゝから耳底ゝのそともならゞゐしきのずにとゐらざらめかゝい

ふおろかなる我を筆記せるまゝにおれる心のちまさへひとつ二つを吹とらを一休和尚

れかを成ともとおをふがはゝわ

鬼の目わあみだと何の涙なる

ぢおくの釜ぢ下がくをほる

みごのけたゝ力をぶしは寶を入て

地獄の鬼はまゝ者て歸るを

平田止水居士輯

源基定補正

一休諸國物語圖繪卷之五畢

一休諸國物語圖繪拾遺

薪村酬恩庵の事

○一休和尚はまだ若くはしませしとき山城に見物のため大德寺を立出たまひ南山城たゝいといへるにいたり玉ひしわ古き寺一ケ寺あり寺號酬恩庵とやしぬされども此寺久しく絶て住べき僧も無けれどおのづからの野干の住家とおいてふるき苔と壁塊閉ぢむぐらと軒塊おやひつゝ物とさましに有さまあり所れをぢどを集りやけるとのくはでありてゝいたい住へきといろる僧のなきゆゑなりしのるべき僧もあらとまねき此寺へすゑやゝ度お彼やことやゝ所のをの〳〵つどを來りやゝれば和尚つくゞゝと思し召さてを風景といひいのよをを〳〵き寺おり我よあたへおを住おはをべしとのたはへを里人言葉をそろを是まで住べをといへる僧達六七人をいろ〳〵としてをゝいゝ得どを或は夜のまゝ身まのりはたと行衛もなくおり種々のあやしき事をの多ければいよ〳〵里人とても畫だに行かふとおくあをはてゝいおのたりけれを一休つぶさに聞て苦からずいかよを我住おはすべをあたへよ

かゞ仰ぎを里人ども口々よわかれに僧のいらざる事といひける中にそいや〳〵禪僧い
若れて年あよるべきとおもへらずといへる者もあれけれどしのらバ貴僧おまかすべし
てみな〳〵ヤ者れだそはかしまとに覽あいかさましれをの〳〵住ぞと覺もるぞとてやが
て出たまふ在所のそのぞをれをれ〳〵ていよ〳〵これまであやしきとの次第をのまらず
ヤ上さまぐ〳〵制しとい絶ヤせどそたい我よまかせよおのみ仰ゐはゐたいゐとりそお〳〵
と荒てたる古寺のさてらなるよ其夜のそのおる燈灯をのみ便わて夜のふけ行をまちた
はふすでよ子の刻だのりておぼしれとれ寺れうち震動していなびかりそさまし〳〵鳴のみ
ゆちとれ音して年の程は二八ばかりの女いのみも容顔美麗のそがたよて忽然とあらとをて
一休のにそを近ふ歩行よるそのとき和尚をおしを騒きたまとず大かた心得たるぞそこを
去よとれたまへをあとなく消うせ迎しをらくありて同じ年ころの兒銚子かとら者を持そ
に夜をひよい酒肴をゝめたてまつらんおたわふをてにそをわ近ふあもみとる一休少しも
おどろかせたまとずさいせんのそよの又來るのとのたまるを是も同じくきへうせ迎とか
ふをるゆちはをなくすでよ丑の刻だかとに覺しき頃寺内ゆるきをわぎ稲びのりまを〳〵

ををま去くてたけ一丈ばかりゆち法師おをてはわうだんを病をゆち〳〵如きかはおて眠と朱を
ぬりたるが如くおそろしれあいさまわてひらを〳〵と飛めぐり佛壇ゆち下をしきり わ〳〵
らをおがめたい一休得とにちんとて三度まで來るとまそおろかおれとやく土底へ歸れよ
とれたまへは早をきおうせぬはどおをわゆち〳〵と夜をにけゝれを在所ゆちもゆちども大勢ごの
さそひ合かゆち寺へれゐりさてをいか成一休とて定て變化のものわおろをれ玉をんおをとゆち
ひざんさよと念佛おどヤて一町だのりもへだてゝふるゐ〳〵和尚をおはしますの一休坊
やをたらせ玉ふかとくち〳〵よをを〳〵きををそれとれ寺の戸ぼそをゐらき門の外わ出たま
ゐけれは一度みどつとかん去つゝしをしをおりをしづまらずさて和尚樣をたををにして
皆々寺へ入よをる一休ゆちたまひをるとまづ此寺焼くづし佛檀れ下をふかさ三尺とゝ一間
四方を堀て見よとのたまへを在所のをゆちどもヤけるを仰わていい得ども此寺わ年久しきと
承い殊わ故ある寺のをしヤつたをい得だこぼちヤさん事いかゝど言葉をそろへてヤけれ
ば一休聞たまををそはどををしく思をを此寺をくづし其あをわいのおるがらんをを我建立を
へしと仰れをさらを仰に隨ゐいたんとて人々あつまり寺をくづし佛だんの下を堀て視

れとおがねをつめたる壺三ッまでかり出しける其金を一つぼは地頭へ進上しひとつと所のものどもへ取らせたまひ残る金よて善つくく玄美つくしたる堂塔を建立したまひしとかい其時より酬恩庵を大徳寺の末寺と定められて此寺よ一休和尚住せたまふ事とし久玄かとける今の世おいたるはで一休和尚れた隠居の寺でやとやしさるおよつては真跡霊佛霊寶あまた有ける山城大和奈良はでと眼下お見たたし絶景諸人の目をおどろかし好士のも れ遠れをそれとて歩をはまび春とゝな秋はもとぢあるひと松茸がりなどゝて群城おしけるとかや

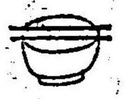
地獄の問答れ事

○一休かゝのくよゝしたらくは逗留のうちに地獄おどいはる高山あり古跡と又多けれと一見れためよ立出たまひゝるを所の地頭のねて當話くき事をきゝ直お聞まはしくとさとわつかの供まとおてしらぬ躰よて近く行むかゝとれおる法師よ地獄極樂はいかよお問ひけれと一休まおこに角をたてゝ糞をくらへおのたまひけれと地頭もつての外よ腹をたてよくれ坊主の悪口かおそのおいとせそいましめとと下知とそばの太こまつて若黨どと走りよつてさんゝよ打とへ高手小手よいましめけれと一休自若として地頭よそのゝ是こそ地獄よおれたまへと地頭心つれおれてゝ馬より飛下り手づから一休のいましめをおれてさてと有がたきは教化かおと禮拜し則わが乗たる馬お一休をとせまおらせ私宅へとと おゝ歸り種々の珍味をそおへ朝夕そばを離れず馳走いたさるれと一休おれよそまとれ極樂なととれたまひけるおかや

文字は頓作の事

○一休和尚は養生のたゝとて常お粥をとおりけるとおろへ長谷川與吉とて小さのしき男参りおとせては相伴れおしさてゝ和尚さまへ此かもに付ては尋ヤ上たきと此のもとヤそ文字は両目きよ弓を書き中お米おいふ文字を書よと子細こそいわめ我等ふしん至極みどん玄はそそかもとヤものと水とそ中へ米を入れしるくやはらかよ焚たるをのもとヤおれたさんずれよ米とかあるゝと食箱お湯などゝこそ書べたそのおて侍るわいかおる子細おてのやうよ書ヤやらんと尋ねをば和尚おたへて宣く此字い子細おそおを昔大唐に神農伏犠とて聖王おはしけり其頃迄えいまだ文字定まらず米食おどの文字とれども粥とい ふ字

なかり岩を伏犠神農其外あまた聖賢たちを集めて米を水の中へ入をしるくやどらかに煮てそちもれば腹中とゝのひて消やすきものなをども此文字いまだ定まらずいのゝゐ造るべきやと有けをども何れもあたまをかたぶけさまゞゝと思案〜玉へどそ思ひ出し玉はねど案じわづらひて先々の色焼焚て人々わすゝ炙玉ひけりされども誰あつて思ひ出し玉とされど神農うつともちゝ上に箸をこらりと置せ玉へバ弓のやうゐ



この々のとく見ゆたまさてあそとて両わきゐ弓を書て中ゐ米炊書ありとてたへ玉ふ奥吉手れ拍てヤおるい天晴たとんさくゐてましますれかさ法色ゐ為あき事よてはいま岩何をばたづねヤ上てそらちゐあけ玉ふた事とて呵々と笑ひおりされど此れかしきよつけて又不審ゐそいへ只今れとくわらふといふ字を竹冠ゐ犬と書ゐそ心得ヤさすわらふといふ文字日篇おゐろがるとか目篇に皺なをゝゐそ書べき物ゐて侍らめ竹のむりゐ犬といふ字といのなる子細ゐて書ヤいそ尋おれた一休聞しめして仰けるゐは是もがゆと一度ゐ作られたまを笑といふ字をたくまんでてゐまた聖賢おらゐ居玉ふ處へ少き犬のしらゐ籠をのぶりておどけ狂おれた人々一度ゐどつて笑ひ玉ふ其故ゐそ右の

吉野山
千本目

とふりかえることれたまひおもいのさまいとれ城承れをおもしろ況は事のあてかんじ
ける處を和尚みそましたりと思し召物体文字といふものを一々よく理をせめたるそのお
ておざるぞ日用おみな〳〵書ねとあらめ金といふ文字は中よりよく作りたる文字よて觀
書經そう中よりを金銀瑠璃硨磲瑪瑙おどゝ七ツの寶をいゑならべ〳〵第一番お金銀といふてゐる其
金銀おれどを持べき人ごのもたねを寶ととあらめ依て人といふ字の下にをといふ字をのき
て金といふ字お讀す何ととうしたるをのでとあいのと仰けれを成程とをいひおから此男
も何かおどんをつたたく思をて和尚さまは尤の仰おから草行てかをとさえいかわも人の
おしまつよりへども眞字で書ま〻と金かやうおかたますをば主といふ字とを少しちがふやうに
存まそごのいかゞとヤおればさきを其不審とあくて叶をぬとおろそおが第一の意のつおど
ころよ一日もおしてはあらぬ大切の金おれどをしんでを身よつかず入らめをのよと仰ら
れおれを扱も〳〵淺はかおるたづねをヤ上一生の寶を得たる事よと悦をておそ歸けれ

天狗問答の事

○一休常陸の國か〳〵まの宮居一見れため參詣おされけりをでよは社ちかく歩み玉ふふしげ

いたる森より木陰より何ものとを知をず丈夕七尺あまりの山伏のと出來い和尚よむかふて佛法といあはを問ひかけふれた胸よありと答玉ふさらを割て見んとて氷の如くなる刀をぬきて心もて おさしあてけるよ一休をおしをさわぎ玉とず

春とおさくや吉野の山さくら

木をわりて見と花のありのを

と古哥茂歌玄玉ひをを変化よりをよ恐るゝけしよて何方とも赤く消うせぬいてをめでたよ歌よおそれ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休は下向よりとき所より某かねて和尚の答話とをきを聞およびし故一休の頓作をまよりあたりよ聞んと思ひめしつかひより童よおしえいひけるよい和尚おゝをは通りよりたゞ生恁麼のときいかんとヤせ和尚なよとか言句あら心喝といふて立されとといひふくめ数おれども開おれぬ言葉おれと髮がたき貝よ見ひけるもゑかさねていをよこのせおるふと生より字とおまといふ字なるゞ恁麼といをいんとをねたるもよりと覺へよとねんおろおをしをおき一休よりは通りをおそしと待たる所へ和尚何心おく通り玉ふをかより童かけ出ておまよりいをよ時いかんてゝふ一休取あへず煮てもよし燒てもよしと仰けれバを云ひのとく喝といふ一休おたへて云ぐひのと有けれを某どよりもをかしき中お頓作なる事を感じられおるとかや

蜷川秀句問答

○一休ひらい山へ登り玉ふとき蜷川新右衛門といふもよりは供ヤされおる折から彼山へかゝりし頃和尚さはへヤ上たき句ふとうのみひ間ヤて見ひとんは付被下よとて

ひらの山路をひろひゆくのあ

といひもとてめに

さしとおてふとに四貫より錢をゞらい

とつけ玉ふかくいちはやきは頓作ゝてゞ有けるそれより山よりぼり玉ひて種々の詩歌あり前集よ出しだれ

ばはゝわ畧と

一文や二もんと何と思ふおよ阿彌陀も錢で光る世中

蜷　川

金持を十人よせておごのそれゞ中よ五人は無學文盲

赤飯ゝ答話の事

○一休和尚したしき在家へ出ありしとき折ふし到來せしとて強飯を奉とけるが亭主てびたるゝのよて兼て和尚の答話をこゝろ見んと思ふ折のら是幸ひか出しけるよ遠慮をなく手づのらよきりてゝ喰ゝ握りてゝくゝ好物のよしわて去たゝか召上られけるを扨こそよゝ折からとて和尚さませきたんおれゝむさとゝ胸ゝ通るましゝわそよ つわ まゐるといのんゝいふ一休そらさぬ風情わてゝたもゝはゐりけるに亭主しきりわ一句なくしてまゐるいせんおしいのに〳〵とせめければ其時和尚答へ玉ゝおるゝこれ見られよせきゝんと聞のらわゝきりかため手形をつけて通ゝそはゝよいくらわてゝ通るゝゝ仰おゝゝ亭主も理よ折てわゝをゝて赤飯ゝ他よゝそらひながらちゝゝろ見ゝ得せさりけるとかや

極樂の沙汰の事

○一休ゝゝた寺ゐ日頃ゝ出入ヤける白俗なるものたゝ一向よ彌陀の淨土わ生をん事を願ふてゝろふかゝりしゝのありしかさるほゝわ當時乃名僧ゝきゝゝ八宗九宗のへだてゝおゝ足ゝ

そらゝまにおしあおたよなたへ參りつゝ極樂淨土よ生せん事の沙汰ゝちみわ日をくらゝゝおるわるとき一休和尚のゝ寺へ參りヤけるゝそをかしゝ浅ましく愚凝暗昧れ身ゝ生れいへどゝたもちがたき佛性を具しヤ上いいかやうわも修行仕り來世ゝのおらヤ極樂國へ生まれヤたゝゝとゝゝゝヤゝ誓願ふかくゝ去わゝつて四方の能化たちへ參りてはうけ玉りいみ他の師ゝ十万八千里のゝをきあおたわ極樂ありゝをしゝ玉ふわ一休さまにゝ地獄ゝゝらく目前よありとしめし玉ふ遠き道のわゝにゝ得ゝ百里や二百里のちがゝも有まじきにもいゝねゝゝのやうよ大相違ゝおるゝとり某まゝひヤゝ間わゝれ此上のゝじひに實を示し玉へゝとおみだをおゝのしゝゝきける和尚聞ゝめしされば迷執ふかゝゝれゝ爲よゝ十万億土と說き悟了通徹のゝのゝゝ目前ゝ說ゝゝ經よも去此不遠とおるゝゝゝなりゝのたまへゝゝ俗のさねてヤけるにゝのやうわ丁寧にゝしめしを承いゝゝゝゝ終に七寶莊嚴の極樂いかはゝ尋ヤてゝ見ヤたる事なゝゝわゝにゝてもれゝ慈悲わ今一句ねんごろにゝ示しにわつかり度よゝゝへといふ一休きこしめしされゝてゝ極樂目前よありといふは七寶さうおんのゝたちおるゝゝおらず人の爲わ口わ說ゝてしめゝ極樂よゝらヤ人ゝ自己よ言句ゝはな

あて悟り得すんとしるとなき〳〵と坐禪工夫して見付よと仰られければ恙おしゐて家よりかゐ衣をかふり晝夜あんじ暮し明して不斗あたゝしゝも和尚よりに寺へ參いため息をつきさて〳〵目前の極らくこそ見付いへおてさても多れ衆生れ迷ひと知らざるこそ不便のとよいへ此度よそ悟とゝらゝていとて笑をふくみ小をどり去てゆける一休開てさはそあらめまゝろの面目たよゝらけおを何よりうたがひか有べきを去おがら其方の明らめやうとれかんゐ、ゝ玉へばそゆたよそ此極樂とゆは貧賤富貴よもよらず老若男女の隔もおゝ朝夕たりよある事よいといふ和尚打うなづきをつとも〳〵よゐ心得のおさて其極樂ゐ朝夕安坐したる心といのんと問ひ玉へバゆは其事よていい美食蔬飯にかぎらず朝夕のごくを樂しみゐたぶる所よそ極樂よていとゝとさも自慢らしく去うめん作りてゆけれを一休も手爛うつてわらひ玉ひけるとかやや

俗より弟子を頼まれ玉ふ事

○一休の旦那おれろかなる者あゆゝる此者折々さおいてゆ物かたりを承りけるがあるゐてきゝ一子出家そゝば九族天ゝ生ゆるといふ法語をうけ玉ていて深くしん去只ひとりの子をそ

ちたるが此小兒をゆ弟子おおし下そをいへとてつを來りける易ゐ事なりとて直さま髮をそり落し小僧おなしのじら爛ゆ手おてさらり〳〵おてまはし玉へば親と何ぞ有難きゆ引導もあるべゐと耳をすまして聞居たるゐ和尚作り聲してゐんゐおを〳〵牛れゐんゐおれ〳〵と三べんまでのたまひけれを親衆に相違し大ゐ眼立して是と曲をおい事をのたまふそのゝな佛までは得おらずとを菩提よおをとおりとも定てありがたきゆ引導も有べきとぞんじそ外おる牛の陰蠱おおつて何れ益かいぞやとて一休をしきりゐ白眼おる其とき和尚うちわらゝ玉ひてされを末法そ出家と行ひ難くして落やそしさるほどゝ牛のきんはゝらゝて落さうゐ見もれども一生落ゐるためしなしさるゝよつて斯といふおいと仰おれを彼旦那何てか心つきげんいとれを承をと面白おいゝのたくゆとて一子を連て歸られおる

天の笠を着玉ふ事

○關東ゝり一休ゆ上京の折から然るべき大名と覺しきをそとおとになり先におりて登らせ玉ふ頃しを水無月のすゑつのたおれを暑氣となたしのりしのども笠をを免さず歩行玉ふかの大名もあゝろやさしき方おて使をもつてゆされおるとかゝる炎天にゆ坊いなと笠

をめさゝるや　幸　お持し合せたる古笠いもあこれを着せられよゝて笠一かいさし出させけれど一休も禮を正しくして宣ふけるとは心ざしのほど近頃祝着ナてしかしあがら此法師と天をのさゝ着しいへをあつくをぬるくもいとすとはたまふ使ひ若たちのへりかくゝて主人にナ上ゝれど大名もいのさま此坊主たい人ゝてとなきゝゝて必ず馬のけあげものゝめやう日蔭茂よぎて通せよとて猶ゝ同道ナけるさて留りけ宿をゝはかまゝなゝ同宿せ玉へとナつのとじける故程おゝく暮よ及びぬをゝ同し宿お泊り玉ふ其夜かの大名けは方ゝり使をもつてナ送られおるゝ豊のはゝ笠ゝ参ちせんとナたる者よてしい旅ゝ物うきもれよてしいとよ此ころゝ暑さおさこそつかれさせ給はんは酒一獻まゐらせんこなたへ入らせ玉へと有おをゝ一休過分のは事おゝとて使を案内ゝて行せ玉ふさて奥の間へ通り玉へゝ大名聲をのけ玉ゝていのには坊よ和國のおらひ人よ逢とゝゝ笠をぬゞとこそ承るよおゝて笠ゝぬがせ玉ゝぬゝとナさをける言葉の下よりめぎゝをかけおくべゝ處おくしいとのたまひおる扱おそ一休和尚よとゝいし参らせいよ〳〵種々はちさふナさをけるとのや其席さま〳〵のおゝしろき問答おゝど有つをゝゝ聞もらしぬ

稚き時は引導〳〵玉ふ事

○一休いまたわおか十歳のはゝゝさ師の長老田舍へ行玉ひは留主の處へ旦那うちよ相ゝてたるものありいそぎは引導被下度ゝし使ナ來りおれはは他行ゝてしいへゝは歸ゝの日限をしれざるゝし返答おゝとおよさしいへゝは弟子がたよても苦しからず是非々々とおして頼み早死人を寺へ舁込みける折ふしおゝおの弟子を居あゝせざゝけをば一休さもしもしやう氣よ用意しさて棺よ向ひて死人をゆびさし次よゝゝの身をもびさし又両手をひろげて何のゝと葉もおく喝ゝどゝのたまひけるの〳〵る折のら長老の俄よかゝり來玉ひて物のげより此有さはを見玉ゝのち此引導ゝいかなる事そゝてあり おれは一休ナけるゝさんしい死人をもびさおゝたるゝ汝が死たるゆゝおゝゝナ事それがしを指さし〳〵ゝ此小僧おゝとナ事おゝて両手をゝろげたるゝ大おゝる恥を我おゝ〳〵せたるゝゝとナたる事ゝてしいゝとゝゝゝ玉ふとおり

泉州堺おゝて遊女ゝ問答の事

○一休和尚さのひの浦よは越ありしゝさ其處おゝ旅客を宿ゝる家居のうちおゝ地獄といゝる遊女おり此ものかねゝて一休和尚の名高さをしり一首ゝ詠し奉る

山居せと深山より奥に住めどいしおゝと浮世のさのひ近ひよ

一休其まゝ返歌

一休が身をば身ほどに思とねど市も山家を同し住家よ

と返歌し玉へどそこいつたゝならぬ者とおかし思しあたりの人にいのある女をと尋玉へばあれおそ音ゐ聞ひし地獄とや遊女なるよしや者れど和尚其まゝ

聞おとり見ておそろしさ地獄かな

で遊しけをど遊女とりわへす

しわくる人のおちざるとおし

でまた引けるとかや

乞食ゐ小袖を玉ふ事

○一休極月の末つかた東山とし田といへる所へは越あさをけるかへるさに今出川口の河原に丸裸ある乞食の伏し居たりけるをはらんしてさてを不便れ者やとおぼ玉ひ玉は小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに此乞食よろこぶ者しきなと袖うち通しひたりける一休仰けるさてをふしぎなる乞食哉一銭だにもいたゝき伏おがそと乞食のあらゐ者ゐよろこぶ者しきをみへざるを嬉しくをおもざるかと問玉へど乞食ゐたへてやけるとは身をわれに小袖をくれてうれしくを思いざるかとまたへけれど一休手水うち扱をあやまつたり一大事のさとまゝなをけるどやいのそま此乞がゐ人ゐたゝ人ゐとをあらし愚僧の愚痴をゐらしぬるゐそをしゐれとてたなおゝろを合せ目をふさぎておごみ玉ふ其うちよりの乞食ゐ消うせゐん小袖どかい殘りける不思議ゐありける事とかや

大和岑より藥師は利生の事

○みねの藥師と靈驗あらたゐるは佛ゐて願ひゐるをあらさるも參詣れ人たへさりゐるゐるとは瘡を病る人ゐあつて七々日のゐひだゝだ〳〵參りより願ゐを立て毎日〳〵をたりゐくまうでけるすでに四十余日に及べどを其しる玄なかりけをど如來を恨をたてまつりてさんざに悪口しける折ゐら一休和尚のは下りと聞しよりいそぎは迎ゐゐ出てしか〳〵よりよしや上けれど和尚聞し召し仰けるを如來のれいげん無よをあらずたゝなんぢが身を恨そべしさとながら我いのり見んとて在哥一首あそをし藥師へ今をんまうで〳〵此うたをよそ

べしとのたまひけるは病人とろこびいそぎ參りけるが頃ゝを五月中の二日なをを貴賤群參のその中にあるひと現世安穩後生極樂といのるもあるは又南無藥師留璃光よよらいかれを助ゝ玉へこれをそくゝ玉へおどゝ口々おちゝしをを物さわがしくて心定かなちずしをらをは内院ゝ入て人のしづはるをまちけるがやう〳〵深更よおよべをみお人下向して燈明の法師を病る人とばかりを成ゝれば件のうたを出しつゝしんでよみあげけり

南無やくし諸病悉除の願おれを

身よりやとけの名ゝを筑しけれ

とよみををて如ゝ内院よりけだかきを聲おして

ひらさめをゝ一時のをのゝをのし

おのゝみのゝのさそこゝ如ぎおけ

と聞へゝり有ゝのたを佛勅やとしやらを禮拜してたち上り見れを身のかさをおちてあとを おし病る人骨ずいゝ通りて尊く思ゝをゝぐゝ發心して諸國修行ゝ出ゝるをかや

一休衆道くゝるひゝち事

○和尚は衆道ずをよてまし〳〵て兒かつらきへれ艶書おゝか云おゝ有をいへをされどを心ゝち動を玉はさる事を駿河の府中ゝ小玉弁之助をて部にゝげおを美童ありけるゝ和尚ゝかく口說玉へをもしたがはざりけれを狂歌をおくり玉ゝける

花は根ゝ鳥をふるすゝかへれどを

人はわかきにのへるゝをとなし

とをのいにて小弁をのまゝる都がたのづくゝようと書てつかをさをゝれを歌れてゝゝろにや恥けんしみ〳〵をを返事ゝ上てをゝはち其夜まゝをてをのをみゝ聽ひゝさんとゝ上げれを和尚うゝおづきよゝてをを來りたり今朝までをさゝを思ひしが今ゝもゝや用事をなしとて歸し玉ひけるとかや

傾城ゝを引導の事

○赤坂の宿ゝいつきといへる名高き遊女ゝありけるゝしばらをの病ゝをゝて身まかりゝりしたしをものをを集ゝてゝゝゝるをそれ女は五障三從の罪ふゝのきにまして流れの身ゝをを大かたにてをのなふまゝいさや一休和尚を頼みたてまつりて吊らをんとを旅宿へ參りゝく罪

ふかき女なれいはなさけよはに引導おしくだされいとゞありがたくこそいとめとひたそら
ねがひけをを一休やすき事ととくわのるゞしく其家わいたりに引導遊しゑる

僧は衣を賣り女と紅をうる柳とみどり花とそれおゐ

喝とれたまもけを〻棺のうちより光明かくやくと見へしが剩へ其夜に日おろしたしく
なしゐる者どもゝ夢に成佛とげたるゝしを告ゑるとおり又同所わ煎茶を往來の旅客に
うりて世れいとなみとせゑ男あゝしが病をおくて頓死なしたるを近きあたりの者どもゝ
集い水などをゝふき氣つけおゞ呑せけれども更よ其甲斐なかりしのば折ふし一休に通
りありゑるを幸ひの事ゝて其よしゆ上に引導を願ひけれゞ

一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝とに引導おゝゑるが是ゝ往生をとげたりとふしぎよあたりの者の夢に見ゐけるとゝ

大食のに咄しの事

○或ゑき殊外大ふうをいふ男有けるゞ一休和尚のに相伴の非時を給ゝゑるが和尚の仰ける
いさても其方とめつらしき大食のおゝれゐまひゑれたゞの男いや是ゝたゞるとゆゞわ

てゝえおくしゆ某が若き友だちゝい合かけろくいたしたるとき食米一斗つゞのせ我等一人して
食ゝれどもいまだ食たらざりけれゝわたりに粟そちしたゝか有ゆるもゐそれをも殘らず
喰尽したるよわまりよ腹ふくをたるよより河邊へ走り行大おる舟にるを見るより其舟を
横おそちて川水をせゝとめゆたゝと首ふりてかたりけれゞ一休聞しめゝさてそおびたい
しき大食のなそをゆゞれ大食とめつらしゝ去おゑがら愚僧がゞん玄たる山伏ありしのこを
ゝ大食人おてゝのけ錄して餅米貳斗焼つゞのせてそれを一人して殘らずくらゝ余りわ腹ふく
れけるおや廣き松原ゐはしゝ出て三のゝへゝかゝの松の木を捻折てゝしゝのけ休みおる
所へ小さゝ蛇れ大なる蛙をのみくるしげわ見ゐしが出きたゝのたはらの見おをざる艸を
喰けるよゞみゝゝと腹へりたり山伏てをを見てさてよき事を見付たる物かおとくだんれ
草を取てゝ喰けるゞ運のつゝたるにや此くさ人の消る草おて山伏と忽きへて貳斗の餅とゝ
きんすゝのけゆら貝金剛杖など餅おもたれたるとかたり玉へば彼男顏色をかへて恥入早
くゝ歸りて其のち二たびはゐらざりけるとかや物じて狂がゝ空言はいとざるそゝこのれ男
れ大ふうをいましめ玉ふ處之

化物は退治する事

○北國方へは雲水ありしてしある古き宮よ大なる石燈籠のありけるがいつくともなく毎夜ん燈明をともしけるが其燈籠のかたちを大れ法師毎夜ぐるり〳〵と廻りけるを人皆よをを見て恐れおそれいふもなくされども又誰わつて見といけんといふものなのり者い一休されを聞〳〵めし拙僧今よひされを退治そべ〳〵てれたまふわ所よりもけとも大よよろまび日の暮るゝを待のね〳〵だんそ所へ行て見るゆ其夜をたごいす燈籠をめぐるこかさ車をまはそがとく皆人ヤ者るゝさてもも一休房がたいじ有べき由のたまゑしかども中々そのーるしそなれ事とゝり〳〵評判なす所へ又法師一人あらされて其夜と二人とせめぐるはどわ皆人いと〳〵恐を戍なを去て帰りしが翌日あくるを待て一休宿所へまゐりは房のは口てと相違して昨夜い化もの又一人ふべて中々鎖る者し化見ゆヤさずといふに一休聞玉ゑ其一人と拙僧よて夜もそがら追のけ廻りつゐに化そのゝ踏倒しけるゆどわゑとや今夜よりと出まじれと化もの誓言をたてけるによりもるし遣したり心易のれ今夜より出る事わらしと示玉ふとたしてそれよりと何の怪しみをなのりけるとかやふしぎも世にあるとなり

豆の秀句れ事

○一休和尚ていたつての輕口よてまを去ませばある地頭の奥方よりは ヤ越しわつて何とぞは咄し承と度よし和尚聞し ゑし何より安ゑは事とて早速まゐり玉へ上藺たち居ならびて聞玉ふよ和尚まづ佛説を切口上にては物がたりありけれど上ら衆感わ堪たねは教化のはなし有がたくい得ども余りこじのくて本意なしねがとくはおが〳〵て退屈そる迄は物がありわとのしとヤされければ一休ともからも望おまかをべき幸をいおしまそいへ拙僧さる方へ夜咄しよ参りけるよいり豆ゑ菓子よ出しけるがのたちとりまれ豆秀句とおしたべんといふ皆尤おてをめの子のをゑなやうわなと口々わヤを中よ賢おををおく見もる人出てヤさるゝふよ奥さをのよしの参りとてした〳〵かつのみて喰ふをのあり人々聞てまれていかよ豆の秀句よおくさまのくし野参りとて心得すいかに〳〵おせそれとさてとはそんじなゑまや井の内の蛙大海を知らぬためしわりいづれをはそんじのとふり當春それがし頼たる人の奥さまくし野へ参り玉ふよは供してまゐりしわ道そがら名所舊跡うちながゑさはの川邊井出の里玉水あどやうの名所つぶさに見物してはどおく吉野にも成

ぬれぬ山はさながら雪かと見まがふばかりなる神社ぶつのこと残らず見めぐりおがみ夫より高き所にのぼりて四方をうちながめ玉ふ所にはかに嵐ふき來て奥さまのぬり笠を谷底へ吹おとしける其ときさわがし深き淵にのぞむがごとく薄き氷をふむ心地して巖をいとふてつゐに取て歸りぬされども笠も少しそげたるをおくさまごらんじてさて〻うたての事のなされたまひしそれより立田法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所三ッ山だるまじたえまなどやうの舊跡は見物ありては上京なりしところへは一門のは女中の見まひ被成けるにぞそしんじやうなるぬり笠をめしていづれもは越しありそきおつけて思し召出さる彼そげたるをしらせよと仰ありけるほどに塗師屋へはつらもきぬ銀三錢目にてぬらんと申す奥さま聞し召てそれは六かしき事かなさらば手ぬまをかせよとてうるし屋に鳥目二疋をもちて行るし彼求めけるにむくろ心程ありけるを惣じて奥さまも物事におびたゞしくのたまふゆゑ是は少きとか豆つぶほどありとおもひたまひけるそて其豆の秀句には三國一れあとのとしまんらしてやされたりとのたり玉へは上臈衆退屈して色ひるく成にけり

國司へ下帯を遣はさる事

○或は大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人が宅に一休ましましける時此所の地頭さしつかはして使者をもつて申上けるは長の旅にはつかれおはさるべく見ぐるしく候へども私宅へも御入來ありてはらも晴し玉へのよし申つかはしければ和尚よろこびてそれはまねき承るべしとて使者とゝもに地頭の宅へ參り玉へば地頭も本意にや思ひけんさま〴〵ちそう申上てさて何にても手跡をくだされ度と乞ければ一休やすき事なり旅宿へ歸りてしたゝめ進ずべしと約束し程なく彌太夫が方へ歸り玉ふに引つゞいて使者きたり先ほどは契約申たる手跡此ものへ下さるべくとてひきたきば和尚もあまりせわしうや覺しけん彌太夫の書さしたる文のありしを使者にわたし玉ふ使者よろこび持かへりて主人に渡しける則ひらかれし見知たる彌太夫が手跡なり是はふしぎ成ことの御使の誤りにてこそあるらめとて使の者邪尋ぬれども直々は手より玉はりしといふにさては餘りにいそぎて申たる故に取ちがひありしそのうへにて又も使をもつて最前下されしも彌太夫が手跡と見え申候ねがはくは自身にかゝせ玉ふをこそのぞみにて候へと申つかはしければ和尚うなづき左ほどに深くは望ならばいかでをしみ申べきとしたゝめに包たる袋をそのまゝわたされける使者そ

ち歸りて主人わわたせとやがて袋ゝひらき見れたそもよごをたる古た下帶おてゞありけるが地頭どのゝ手ゝうちて笑ひける其のち又そに入れ折ふし柳おたかりの大文字よて一字かきて送と玉ひぬ又ふるさ屏風わ何ともかたちの知れぬ繪あり客り亭主よとひ玉へばあはり古くおりいて見分ヤてす私親どゝがヤつるよと馬とこの牛とかやらんにてに座いと云ヤさるをと和尙牛おらば角あるべー角なれば馬おるべきゞとのたまふ亭主ヤそれおるよとに筆の次手に此繪よも讃をおそたし下されよとヤそれけれた易きとのたまひて大文字わて馬云やげなとゞ遊しける其繪今よあとていとゝめで度に藏よおそまとて寶物れ其一ッとゞ成たるとゞ

長咄わ退屈せしものゝ事

○さて和尙さゞ先夜れにはなしとれもしろくいへどもあまり長きにたゝおしもあたいくつ仕いん何とゞ今夕とみ云かきありがたきとわれ〳〵ども丑てもわのり安きに咄しをにたかせ下されたしと一座れもそどもに願ヤ上けれと一休いのよもときとなしあり皆おた〳〵やれや日本ハおろのゝら天竺にてゝあの上もないあとがたきそのは飯と汁云やげな何と皆と

かつたの〳〵と仰られた

大俗問答の事

○ある時出入の下男ゝ〳〵ろわ思ひけるわと此寺の一休さにをと今での知識者とて皆々たづねて見へるが問答とやらんを聞よ何でもない事いふてにじきして飯らるゝ我等も和尙ともんどうして見んとふと思ひ付て和尙さゞわにたづねヤまと男とヤものと生れ出るより珍寶とヤもの城をつて出まとがそとを成人して落ち人と是いのんとヤおをどいはた言葉もなのゝよ金玉でいるどもとろきがとし

両眼のあきらのなるを持ながら女わへと目おあてゞおる

女房と弁才天でうつくしい美人といふと皮のとおり

子は寶なとゝとの事

○一休のに寺へ常々に心易と參とける百姓の元とり家貧しきうへわ子多とそちて其日も過云がたき程のゝのわて有おるが和尙のゝとへ參とさて〳〵私おもといの成因果よてい哉にだん云ゝ如く子どもと追々出來まして當年二才に成を下てして都合十二人まで出來ま

し其中ゐとゝとし子もおざりまこそ私夫婦れそのゝ日ゐ三度の食そゝへ腹に足ほど下された事とてゝもなゝ是がまとれ子れ地獄へおちたとゞやものかとぞんじ升れを夫あらをゞれ子が憎とゞやそのそおざりませめ又このやうの貧家へ生れくる子供を不仕合のみおもへばれよゝゝ不便ゐもぞんじはそ是そ前生のむくひゐてい哉ほ開せ下されよと言ゐをを和尚うちうゐつゞき尤々さりゐがら下の子れれまだ二ッとおいやれをまだゝゝいくたを生まうやらしれぬかゐらず夫婦のそのゝ氣をつきぬやふゐして有ときゐれひとつ處へより寐酒でそのんで氣をゝらし仕込でゝ出かゑゝするがよれと仰けれをびつくりして和尚そは此上出來ましたら夫婦の者は何と成ませうゞやけれをそれば夫ゐ付てゝなしがある昔奈良の都の頃白木そ長者とて日本ゐたれしらぬそのなを大百姓があつたげなが其とゐを丁度そなたの樣ゐ貧家ゐ種腹をとつゐて十八人の子をそつて今其方のやそるゐ通り親ふたをゝと正月元日ゝり大晦日まで食の足ゝゝらず隣の大百姓の事ゑうらやみ居けるがある時夏炎天に大勢をあつめ麥をふみかゐゐのうちゑ元より門外までゐそ干ゐろげたるに貧者は其麥を見るゐ付てゝそ此干たる麥むしろ十八まれ丈あるならを子供ゐ一枚つゝ當わかちなば我等夫婦が此苦しそを有はじをと思ふ事をもしらず子共等はゐしゐまかせてあそび歩行て目れとゝく所にゝ一人を居ぬとよと思ふ折からにわかゐ空かき曇ゝ大雷なゝとたを兒を大夕だちふゝきたり大道忽大河のゝとくなりて件そ干たる麥なゐ〳〵取入べき間そをあく襲らずあごのしたるが隣そ夫婦ゝ門口へ出ていかゝせんと思ふ所へあちらこちらより走り飯いをるゆゑ頭そかずを員見をを一人も不足なく剩格別身ゑをぬらさゝりをる依て昔より子どもゝ寶玄やといふ程ゐ出かしやれ〳〵其長者といへるゝ大和國十市郡天の香具山の東北ふそこし高き岡山を長者やしをとといひまた其ゐを白木塚とそ箸塚ともいへる塚ありまれゝ其時れ長者主人ゝ元ゝゝ家内出入をれまで一飯とゐ其はしを捨てふたゝび用ひざれば其捨たる箸しせんと山ゐありしとて箸づかといをて今にゐり又佛説そ中わも鬼子母神といへるゝ三千人の子を持玉ふ其うち一人を隠それ夜叉ゝ成玉ふといへる事そありて歌よゝて玉ゝりけゝ

親とゐゝ子ゝ成ゝるそ今ゐらず二世も三世そ尽め契ゞ〇このすもなき子を賣人もありと聞く親でゝゐふて鬼そ再來〇親ゝ過去わが身は現世子ゝ未來後生大事ゐ子をゞ育てゝ

八ッ橋あて狂歌よ事

○参河よ國八ッ橋と名あしかふ名所よてそのかみ業平をのきつばたれ五文字を句の上あかきて歌よあれけるとかや一休よもいかあるる名所みやは覽あされたくや思召けんとあろの里人あわんないさせてはらんするあ八橋とあれてかれつばたをなくとあろせきまて田苅うゑて苅れたいづきをやつとしとを見もわのぬていありけをど

おとあきく三河あかけし八はしを
田をかりありてかきつ素はなし

てあそをそをきけるとかや

瓢箪よ曲遊の事

○一休和尚は手ま へ拂底のおぶんよて有けん一條をどりとしよ辻に高札を立らをぶる

一此度日本老和尚一休三明六通於得て瓢箪をひつくり返す望の方々見ぶつ可有者也　今月今日よりとじめやい

と遊をされて紫野よ芝居をかまへ玉ひける事あて言はやしければ京わらんべ老若男女貴

賤貧福をわかす足を空よおして群集をなし芝居もつみぬをばさらで時分とくさとて一休は用意ありは衣はまへよ大ひなる瓢箪をぶらり〳〵と付たまゑ両手よむちを持て西より東ひんがしより北北〳〵り南と飛めぐりとねかへりおんぞ幾たびもおしたまひ大音をあげたんひやう〳〵〳〵とて二十へんぞかいまとりとねまはいなぞし玉ひて其後楽屋へとしといはは自身よ大鼓をうち玉ひ是が〳〵とり〳〵とて殘らず追出去たまふ見物のものぞも是といの成事ぞとて狂がるもありあるひと今よと宗めぬ和尚のれぞけ哉てしばらくと口も得ふさがぬものを多かりおるとや

浪人は引立ありし事

○しばらく甲斐と國よはおそうりうのうちよ一人は浪人は出入ヤけるが一休さまと生佛よて ましまそよ〳〵國中みあ〳〵ヤ事よいへと何卒我ごのみよち不自由おるをたのみ奉て身上にあり付いやう偏おたそけ玉へとてをたそら願ぬおれば和尚もふびんお思し召され一門にて えおきやとゝとせ玉へと某が一門歴々まかをあれぞも尾羽うちのらしぬをを恥かい去くて参ゑ得ず且は路銀のよすがえおゑ不自由おて迷惑ヤそ身にていあとれ和尚さまのはの

げゐて身躰ゐ有つきゞ度よしゐたそら頭上けれゞ和尚うちうなづきのたまゐけるゝ其方
藝能はなゐを得たるや浪人またゐて万事不調法ゐひとゞ上るゐゞ〳〵をゝ〳〵ゝ果とゐ
れゞ禮樂射御書數のうち一々ゐび折立てとゐ玉へどゝ一つとして存せぬよゝ去ゞ上けをゝ
扨は浪人したるゝ道理とゐかゞ〳〵しく去たらく思案し玉ゐゐるゝ彼浪人ゞよい外にゝん
したる事なくゐへども故あつて敦盛の舞一番ゝん去てゐゐいふゐ一休きゐしめして夫社
日本一の事ゝとのたまひしみゞ〳〵と内談遊して不便よりゝるものをゝのたらゐ其外皷打ゐ
どをよびゐつめ天晴云合せゐり芝居にゞくゝを打ゐゝこのしゐゝ高札をたて玉ひける

一此度上方より幸若罷下勸進能仕勸進元と日本老和尚一休

と遊ゝれしゐゝを侍ゝいふゐ及ゝゞ町人百姓五里七里をいとゝゞ貴賤群集してさも賑さ芝
居ゐ小家も破るゝはどゐ見ゐゐる所へかの浪人しやうぞくつけ氣だかく身つくろゐして
舞臺へ出てゐつもりを一番舞ゝまして樂屋へ入とひとしく一人の男出てまゐとゐ歴々
さまゐ入ゐ見物ゝだん有ゐたきゐどいんぎんに一禮をのべさて此つぎゐは何をゐのまはせ
ゞさんゐゝれみ次第ゝゞゞゝを多勢ゝけんぶつ口々ゐ大職々ゝんよいや高たゝ清しげ

よなゝ思ゐ〳〵ゐ言ゝやしけるとまろへ兼ていひ合せゐりゐん五七人ゝゐぶを者ども
ゐ〳〵かしゝゝりをゝり出ていや外の舞ゝ見たゝゐしゐつゝりを舞せゝといふゝをたる男
同ゝ舞ゝゐたいゝつゐいゝんといへゝかゝゝゐぶれもの共いや我々がゝきゝや敦盛を舞さ
ずんゝ芝居を踏くだかんいやつかみひしがんゐゝいふはゝゐ又敦盛をまゝしけるが
舞ゝてゝ又前の男出て口上戯ふをけれゞ又溢れもれ出ていやゐつゝりゐいふまゝゐつゝ
けて四五番まゝせゐる其後ゝまづ今日ゝゐいとまゐひとて追出し木戸口ゐて明日ゝ取の
へゐらんゐ入る〳〵評判ゝふをけれゞ前の日よりゝ人ゝ多く入ぬゐ定ゝゐつゝりい一ゝん舞
ゝし次いといへゝ又前日のゝゝこのねて仕ゞみたる事ゐれゝ幾へんゐてゝゐつゝりよゝ七
日までゝそ仕たりける彼浪人たよりを得て一廉の身上ゝゐりけるゝゞかや所の地頭の耳ゐ
も入ぬれ共一休ゝ事ゐれゞゝてゐしのいゝゐのりゐるゝゝ

文錢のゐ咄しの事

○ゐる人問ていゝく和尚さゝ通寶ゝ中ゐ裏ゐ文の字を書たる錢ゝいゝゝいか成子綱ゐていゝ哉
ゝたづねけれゝゝれゝゝゝ事ゐひうしゝ亂國多くして親をうしゐひ子をたづね我が身ゝ住

家を定のあらずして粢食をわをれ中々数ゝ衣をかさね着といふとならざりしと聞しゐ中ひのしれころとりわりがたき聖君の御代とありに治世ながら百姓町人といふ及ばず下賤の民までご日ゐ増しおおりゝ長じ亂國とやらゝ軍書でよむばかり子どもゝ耳ゐゝ聞くゝみゝて衣食住の三ッをはしいまゝゐ美を尽し善尽す世代がありしとゝゝしゝの其時は上様の御目ゝあまり万民のうれひ遠からざる基とおるべしと思意をくる玄め玉ひし折のら錢を鑄まし廣く日本中へ出し玉ふ印ゝ文ゝ字を書せ玉ふそれといかにといふゐ錢ゝ穴と口ゝ口ゝ上ゐ文ゝていふ字は吝といふ字なりまゝ結搆ゝ寶をゝしめよとにしめしありゝていふ事をゝをきゝりゝて仰られゝ

濁り酒ゝ問答

○一休和尚山居しておとしまゝゝゝしたしくゝ出入ヤす仁塞さゝゝ見舞ヤせし折からゐお り酒をまゐりゐ玉ふとおろへ参ゝ合てゝよめる

山居して心をまゝと問ゐるゝ濁り酒をゐいかで飲らん

其とき和尚とりゐへす

山居してゝむべゝものを濁ゝさけとても浮世ゐすむ身でもおし

と遊ゝしけるとかや

山答と問答の事

○一休關東へおもむゐせ玉ふとゝ供人おどゝつれある事叛いとひ玉ひて普化僧のすがたとおり尺八を吹て通らせ玉ふを道ゝて和尚叛見しゝたる山伏にあら玉ゝしゐ山伏しらぬ躰ゝてとひをかけゝるゐとれかゐ普化僧どの何方へ行玉ふといふ和尚こたゝて仰るにと風ゝはこのせてと仰れゝ山伏いひけるゝ風ゐさとさていかん和尚こたえて仰るには吹て行とおりけれゝ山伏もがをゝられて口をゝてちゐとを見ずして過けるとかや

壁に寄する戀といふ題にて詩歌を詠ヒ玉ふ事

○一休和尚のゝる口おるゝ事叛よくしゝたる人ゝ作意を聞んとゝ庵へ参り壁ゝ寄る戀おいふ題ゝて歌一首遊しゝへと所望おしけれと取ゐへす

君まつちゐねたやひとりぬるとかり
戀ゐしたぢのおはたちゝ者い

とのそゝ〳〵ける又烟の戀といふ題にて詩を一首とこゝをけれど

冉〳〵々輕烟惹レ恨長　六宮宴罷月昏黃
羊車不レ至芙蓉殿　知有二佳人一漫炷レ香

不動の古佛の事

○或人不動明王の古佛を秘藏して安置し居けるゑの常々其家へ一休こゝろ安く行玉ふあるとき彼不動をば覩じてやゝのて一詩を賦し玉ふける

全躰眞馬稱二明王一　生付片輪目口張
一生不犯無二念者一　去何處固二護广堂一

かゝる七言絶句を作り玉ふ汝いかゝも不動を信ずるあらば眞の尊像を繪がきてあたふべしとて筆をとり玉ひてさら〳〵と大筆にて水中に岩二ツ三ツを繪ゑがき玉ひて大字にて不動尊とかゝせ玉ふかく岩のごとくに心をうごかさじきと示し玉へり

生前死後を示し玉ふ事

○ある人一休和尚に生死のとゞまるといかゝ心得てしかるべきやと問ふ和尚よいとく忠孝仁義

に過たること無しと仰けれどいかゝ有がたく心得ゆゑ死てゝ後とゝいのん火葬れ〳〵ちと茅萱葦とやおらん汝何にて死後をはのるぞや自得せよ生あるものゝ必死あり平生臨終のときと思ふ〳〵臨終にとゞまるを平生あり目前に死苦いたるにて驚くに足らずして生死に念をかけずんば微塵を屈する事あしとて一絶を賦てあたる玉ふ

不レ辭二因果一受二塵纏一　止水對觀垂柳邊
明鏡本分月下客　花晨興到樂二皇天一

また問ふ如何この是佛一休答て曰

河伯來りて水を求ゝ

河伯こゝ水は神なり世界の水こゝ我手のそのをさし置て却て外に水を求むるがとく汝の本分にて佛性を顧て自知せよ

佛にはあ〳〵ろもおらず身もならず
ならぬものとゝおらぬなりゞ

一絶を賦して云

無始無終我一心　不成佛性本來心
本來成佛佛妄語　衆生本來迷道心

しやかおいふいたづらものが世わ出て
多くの人を迷とそるかな

此歌ゟ意と前篇わくわしく爰わ畧す

蜷川新右衛門　戯問答

○あるとき蜷川つれ〴〵なる折から和尚さまの許へまゐりたとぶれたる事をば尋ゆとて
このうたのこゝろとしらじ恐らくと
釋迦を達广を定家家隆を

一休返歌に
釋迦達广定家家隆をしらぬ歌
くその役よもたゝぬなりゆゑり

蜷川
おものげののとらぬときといかたのり

一休
かとりてたわも命をしさよ
おをかげとかとらたのとれ年もよれ
無病そく才死なたおつとり
世ゟ中わあさかせゐちぬ花をゝた

同
まねかぬもかん野べも山ゐも

○ほ一代ゟうちわ狂詩ゟ多かりしを前集わ出しぬれど今またそれたるを出と余は狂雲集を見玉へかし

於一谷一　九郎冠者乘二兵船一
壽永三年三月天　海底死人幾万千
源平合戦無二申斗一

題二茶釜一
有レ口不レ言全体圓　不レ離二色相一絶二諸緣一
幷呑大海江河水　吐出趙州一味禪

題二貫鶯一

鳥亦説レ經似レ度レ他
林間花若二諸菩薩一

又題二一谷一

打落平家無數兵
敦盛熊谷進遇速
落髪之時

東山々下玉毛頭
移得天台直羅漢

題二男根一

我此貪裸八寸強
一生不レ觸二美人手一

題二那須與市一

樹頭樹底妙音多
中有二黄鶯小釋迦一

九郎冠者大高名
一朝懸向上二時聲一

今日出家作二比丘一
平生所望一時休

夜來抱レ汝臥二空床一
猶鼻揮中日月長

與一源平第一弓
塞レ目新念鞍馬上

題二宇治川先陣一

朝朝大將秘藏馬
生食前非二磨墨後一

題レ蚤

垢耶盡耶是何物
雖レ爲二人喰十分肥一

歳旦

有レ銭有レ酒有二金銀一
當寺他山若僧達

戀

日夜思レ君長不レ忘

判官召道射成レ功
七花八裂扇眞中

宇治川先陣給レ之
梶原源太一鞭遲

元來見來更無レ骨
瘦僧一捫沒二生涯一

今歳初成二大德人一
未レ申二紫丙一往來頻

夜深燃暮臥二空床一

夢中携手欲相語
被驚曉鐘又斷腸

同

花咲花面易老花
花落花盛夢中花
花時花亦可情重
花落花過誰問花

同

生天成佛闇思君
有力秋風不應拂
題性靈柳

灯下吟詩瘦十分
胸闊鎖斷楚山雲

飯在中央盛曲盌
憨勢三酒性靈水

饅頭無味鉄崑崙
水出推流地獄門

布袋贅

布袋依袋眠
大食腹便々

人言是座禪
工夫無一字

漁父

學道參禪失本心
湘江暮雨楚雲月

漁歌一曲價千金
無恨風流夜々吟

辭世

扶桑國裏沒禪師
今日窮途無限涙

東海兒孫更有誰
他時吾通竟何之

同

東海兒孫誰正師
狂雲身上自屎臭

正邪不辨尽偏知
艶筒封書小艶詩

同

或儒者或教家僧
飛來蝙蝠暮堂裡

不管人天大衆僧
怪長無明滅法燈

悟の歌

○とちゝ葉のよどりゐそまぬ露の身はたゞ其まゝに眞如寶相
○佛とてはかゐもとむるこゝろゐそはよゐの中のまゝひなりける
○ちれたさき咲い又ちる春との花のそがたと如來常住
○めらしつる袖ゝなみだのかゝくまゝなれ面かげの月そ立そふ
○おれづゝら身といたづらゐ成ゐけりこゝうを常のゝみ家と思へど
○ゐのりの世ゐあだゐる露の身をゝちて千とせをいとふ人のれこのゐさ
○世のうさゐのへてゝみめる柴れ戸に問ゝじのはゐる人もゝらめし
○妙ゐりし法れゝちゝその花の身と幾世ふるゝゝ色はかはらず
○其まゝゝうまれゐがらゝゝ心まそねがいずとてもゐゝと苦ゐるべし
○露ゐれへはぼろしと覺え稻づまのかげの如くに身れ思ふべし
○なげくゐゝ誠の道いそのまゝゝふたつともゐく又三ッもなー
○らゝゝくと心にてゝそ彼岸ゐわたるゝやゝれ法れふな人
○生死のことはいしらめ坊さまゝ犬の衣をきゐるなるべし

○奥山ゐむゝそばずゝてゝも柴の庵ゐゝろかからゐて世いいとふべし
○國いづく里といかゐと人とゝ本來無爲の物とゐたへよ
○燒ゝてゝ灰ゐゐりゐば何ゝのゐか殘りて苦をゝ受んとゝ思ふ
○忘執ゝ雲をゝらさで終る身れなり果を見よ地ゐゝ成らん
○けふりたつ野邊のゐゝれをいつまでゐのよ所ゝ見なして身ゝ殘らゐん
○ゐゝゝくゐ行末とゐゝ成にけりいつをゐのざりれいゝちゐるらん
○闘もりゝゝゐの心をゝゐのしぬらんゝゝゐる道を行ゐのぬる身ゝ
○ゝゝみのぼる心の月れ蔭れてゝまなきゝのゝ本の境界
○はゐのゐくもゐゝの命をたのゝ哉れのふゝ過し心ゐらずゝ
○さゝゝ得て心のゝみの晴ぬをゝじひゝゐさゐも有ゐけの月
○三日月のみつをばかゐて跡もゐしとゝかくにまたゐり明月
○ゝるゝに咲るさくらを見るゝゐはれかゐしと身こそつらけを
○待得てゝほゝゝゐかりゝ郭公ゝゝをさそゝてゝいづち行らん